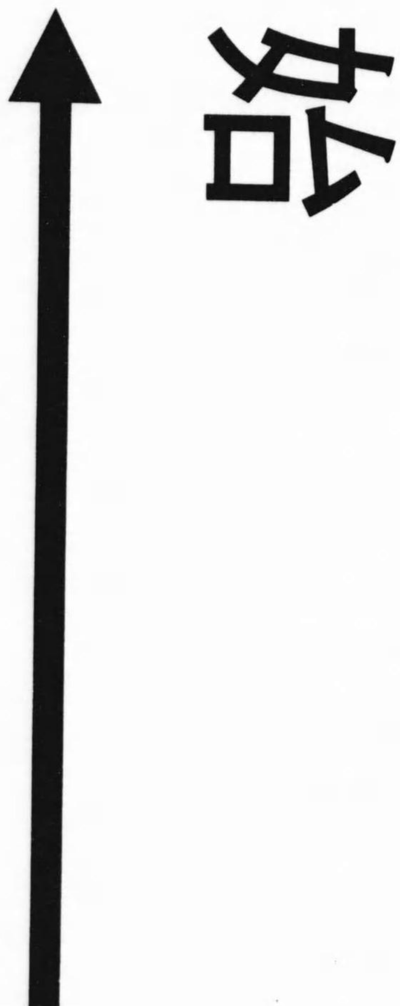
910.26
Ma62-4
910.26-Ma62-4
1200500754475



拾

910.26
MA62
4

納本

正宗白鳥著

現代文藝評論

改造社版

596-32

『現代文藝評論』目次

夏目漱石論……一
岩野泡鳴論……三五
菊池寛論……六九
徳田秋聲論……八三
芥川龍之介の藝術を論ず……九九
蘇峰と蘆花……一一三
森鷗外について……一二七
二葉亭について……一四一
露伴について……一五三
志賀直哉と葛西善藏……一六五
「坂本龍馬」と新作家としての用意……一八五
緑蔭閑語……一九九

年頭所感……二〇九
所感斷片……二一一
斷片語……二二一
演藝時評……二二三
マクベスを觀て……二二三
「兒島高德」の芝居……二二四
吉右衛門について……二二八
平將門……二二九
劇評について……二三四
法成寺物語……二三五
市村座の澤田……二三八
菊吉合同劇……二四八
斷片錄……二五六
ラヂオ演藝……二六〇
歌舞伎座の立見……二六三
露西亞歌劇……二六六
曾我家の喜劇……二七一
尾上松助について……二七四
新劇協會の芝居……二七九
「日本戲曲集」について……二八一
「空氣饅頭」について……二八五
「毛猿」について……二八七
「心座」見物……二九一
歌舞伎座の六月……二九五
「演舞場」の六月……三〇〇
「松竹座」の三時間……三〇四
帝劇の女優劇……三〇六
南北と春水と……三一三
澤田の「金色夜叉」……三一七
「演舞場」の八月……三二四
錦繪美謳歌を嗤ふ……三三一
「桐一葉」について……三三四
菊五郎の舞踊……三三九
ブルジョア、シッペル……三四四
春昇氏の「鳥邊山」……三四七
思ひ出すまゝに……三五一
「相馬の金さん」……三五五
「坊つちやん」……三六一
竹の屋劇評集……三六五
我が饒舌錄（谷崎氏の演劇觀など）……三六七
ダンテについて……三七九

西鶴について……四〇一
雜纂
正岡子規について……四〇四
イプセン劇……四一八
最近の感想……四三〇
讀後感……四三一
二三の短評……四三六
ある感想……四三八
文藝家の表彰について……四四二
人形芝居その他……四四六
「信州義民錄」について……四五一
文學者と「不遇」……四五二
「大岡政談」その他……四五七
寒山の詩……四六三
「三田文學」と「新潮」……四六七
文藝時評……四七四
讀後感……四七八
國性爺合戰……四七九
ある夜……四八一
字野君、芽ヨン・チエリイニ……四八四
今月の帝劇……四八八
昔の新聞小說……四九一

夏目漱石論

一

私はこの頃、はじめて「虞美人草」を讀んだ。この長篇小說は、夏目漱石が朝日新聞に入社最初の作品で、森田草平氏は、「明治大正文學全集」に添附された解題に於て、「この作品は、先生が入社後京都に遊んで、歸來直ちに筆を執られたもので、即ち純粹に作家として世に立たれた道程の第一歩で、先生としても比較的此の一篇に力を注がれたらしく、想ひを構ふること愼重に、プロットの上から云つても一絲亂れず、文章から云つても實に絢爛と精緻を極めたものである」と云つてゐる。

この批評は當つてゐる。プロットが整然として、文章も絢爛と精緻を極めてゐることは、誰れにでも認められる。この一篇だけを例に取つても、漱石が近代無比の名文家であることは、充分に證據立てられる。それでは、「虞美人草は讀んで面白かつたか」と訊かれると、私は、言下に否と答へる。「私にはちつとも面白くなかつた。讀んでゐるうちは退屈の連續を感じた」と、私は躊躇するところなく答へる。

漱石は、獨歩などと違つて　文才が豐かで、警句や洒落が口を吐いて出ると云つた風であるが、しかし、私には、さういふ警句や洒落がさして面白くないのだ。「猫である」は、作者が匠氣なく、興にまかせて書きなぐつたところに、自然の瓢逸滑稽の味ひが漂つてゐて面白かつたが、「虞美人草」では、才に任せて、詰らないことを喋舌り散らしてゐるやうに思はれる。それに、近代化した馬琴と云つたやうな物知り振りと、どのページにも頑張つてゐる理窟に、私はうんざりした。馬琴の龍の講釋でも虎の講釋でも、當時の讀者を感心させたのであらうし、漱石が今日の知識階級の小說愛好者に喜ばれるのも、一半はさういふ理窟が挿入されてゐるためなのであらう。

「氣餒を吐くより、反吐でも吐く方が哲學者らしいね」

「哲學者がそんなものを吐くものか」

「本當の哲學者になると、頭ばかりになつて　只考へるだけか、丸で達磨だね」

哲學者を評した警句として、讀者が感心するのか知れないが、私には、ちつとも面白くない。

「そよと吹く風の戀や、涙の戀や、嘆息の戀ぢやありません。暴風雨の戀、暦にも錄つてゐない大暴雨の戀、九寸五分の戀です」

「九寸五分の戀が紫なんですか」

「九寸五分の戀が紫なんぢやない。紫の戀が九寸五分なんです」

「戀を斬ると紫色の血が出るといふのですか」

「戀が怒ると九寸五分が紫色に閃ると云ふんです」

かういふ氣取つた洒落は、泉鏡花の小說のある部分と同樣に、私に取つては、ちんぷんかんぷんである。

「長篇虞美人草」の前半は、かういふ捉へどころのない、美文で續くのだからたまらない。私はさきに、漱石を無類の名文家と云つたが、名文家といふよりも美文家と云つた方が、一層適切である。兎に角、彼れは美文的饒舌家である。三語樓などが連想される。

かういふ餘計なものを取去つてしまつて、小說のエッセンスだけを殘すと、藤尾と彼女の母、甲野、小野、宗近など、數人の男女の錯綜した世相が、明確ではあるが、しかし概念的に讀者の心に映ずるだけである。女性に對する聰明なる觀察はある。人生に對する作者の考察も膚淺ではない。しかし、この一篇には、生き〳〵した人間は決して活躍してゐないのである。思慮の淺い虛榮に富んだ近代ぶりの女性藤尾の描寫は、作者の最も苦心したところであらうが、要するに說明に留まつてゐる。謎の女にしてもさうだ。宗近の如きも、作者の道德心から造り上げられた人物で、伏姬傳受の玉の一つを有つてゐる犬江犬川の徒と同一視すべきものである。「虞美人草」を通して見られる作者漱石が、疑問のない頑强なる道德心を保持してゐることは、八犬傳を通して見られる曲亭馬琴と同樣である。知識階級の通俗讀者が、漱石の作品を愛誦する一半の理由は、この通常道德が作品の基調となつてゐるのに本づくのであるまいか。

私は、最近、菊池寬君の「新珠」など、二三の通俗小說を讀破したので、連想がそれ等の小說に及んだが、藤尾や糸子、あるひは二三の靑年の如き男女を表現してゐる點では、むしろ、菊池君などの方が傑れてゐるのである。わが佛尊しと見る偏見を離れて見るがいゝ。「虞美人草」の小說的部分は、通俗小說の型を追つて、しかも至らざるものである。……しかし、漱石の大作家たる所以は、その通俗小說型の脚色を、彼獨得の詩才で磨きをかけ、十重二十重の錦の切れで包んでゐるためなのであらう。私の目には、あまり賞味されない色取りであるが、他の多くの人々は、その錦繡の美に眩惑されるのであらう。美辭麗句が無限に續いてゐるやうに思はれるのであらう。

馬琴は「饑ゑたるものは食を撰ばず、逃ぐるものは道を撰ばず、貧しきものは妻を撰ばず」と云つたやうな、格言じみた氣取つた文句で、一回一章を書きはじめることがあつたが「虞美人草」は、かういふ癖を有つてゐる。「蟻は甘きに集まり、人は新らしきに集る。文明の民は激烈なる生存のうちに無聊をかこつ……」（十一回）「貧乏を十七字に標榜して、馬の蹇馬の尿を得意氣に咏ずる發句と云ふがある……貧に誇る風流は今日に至つても盡きぬ」（十二回）などの書出しは、今日の讀者には、古めかしく思はれるだらう。宗近と妹との對話、藤尾と母親との對話など、サクリ〳〵と齒切れがよくつて、なか〳〵巧みなのだが、例の說明の邪魔が入るので、折角の興が醒まされ勝ちになる。

要するに「虞美人草」は、最初の新聞小說であるがために、雜誌に揭げられるために執筆されてゐたそれまでの小說とは、作者の心構へが自から異つて、そこに作爲の跟が現はれ、作者の缺點を暴露することにもなつたのであらう。何としても冗漫だ。新聞の讀者がよくもかういふ長つたらしい隨筆錄漫談集を、小說として受入れて、辛抱して讀み續けたものだと、不思議に思はれる。今日の時世では、朝日新聞のやうな新聞でも、かういふ長篇小說を安んじて揭載してゐられないであらう。

私は「三四郎」といふ小說を、半歲ほど前にはじめて讀んだのであつたが、それは「虞美人草」ほどに隨筆的美文的でなかつたに關はらず、一篇の筋立さへ心に殘つてゐない。讀者を感激させる魅力のない長篇小說を讀過することのいかに困難なるかを、その時感じたことだけ、今思出してゐる。

二

森田草平氏の「煤煙」が朝日新聞に連載されて、評判になつてゐた時分のことである。ある日、私は、博文館の應接室で、田山花袋、岩野泡鳴兩氏と雜談に耽つてゐるうち、談たまゝ「煤煙」の價値に及んで、誰れかゞ非難の語を挿んでゐたが、

「しかし、漱石の比ぢやない」と、泡鳴は例の大きな聲で放言した。

「それはさうだね」と、花袋は輕く應じた。

私は、默つてゐたが、心中この二氏の批評に同感してゐた。「漱石の比ぢやない」といふ評語を、今日の讀者が讀んだら、「草平の作品は漱石には及びもつかない」といふ意味に解するかも知れないが、あの頃なら、その評語は、「煤煙は、評判ほどのものではないにしても、漱石物のやうな詰らないものではない」といふ意味に受入られるのであつた。それほど、あの頃の漱石は、一般の讀者には盛んに歡迎されてゐたに關はらず、文壇からはなほ〳〵侮蔑の語を投げられてゐた。泡鳴の如きは、最も勇敢に漱石や鷗外を蔑視して、「二流作家」呼はりをもしてゐたのであつた。人間の榮枯盛衰、毀譽褒貶の定めがたきことは、ここにもよく現はれてゐるので、漱石の作品は、死後年を追ふて、ます〳〵世上にのさばり返つて、泡鳴の作品は、この頃たやすく手に入れることの出來ないくらゐに埋沒されてゐる。それは、作品の眞價の齎らす自然の結果なのであらうか。私は斷じてさうは思はない。私自身の好惡を別にして、漱石の蔚然たる大作家たることは否定し得ないのであるが、しかし、泡鳴が漱石などとは異つた素質を有つた傑れた作家であつなことも否定し得られないと思ふ。泡鳴の作品は今日の一般の讀者に認められるべく、あまりに深いところを持つてゐるのではあるまいか。

世界の文學の種類は千差萬別である。批評家や讀者の好みもさまゝである。私にはおのづから私の好みがあつて、それはいかんともし難いのである。たとへば、明治の中期以後、特異の作風によつて、一部の文學愛好者に熱愛され、目まぐるしい文藝思潮の動搖變遷の間にも、堅くおのれを持してゐた泉鏡花氏の作品については、私は緣なき衆生と云つていい。幼少の頃から、いろ〳〵な文學に親しんで來た私も、鏡花氏などの作品を鑑賞する素質を、生れながらに缺いでゐるのかも知れない。

さういふと、「自然主義を信奉してゐる作家には、鏡花氏の藝術が分る筈がない」と、舊套的評語が、鏡花最屓の人々から下されるであらう。しかし私は、文學に於ける自然主義の信仰者であるかないかは別問題として、可成り種類の異つた文學を翫賞して來た。哀傷の文學をも詠歎の文學をも、怪奇の文學をも、艶濃な文學をも、淡彩の文學をも、みなそれ相應に愛誦して來た。私は、長い間歌舞伎芝居に惑溺したこともあつた。「即興詩人」に心魂を蕩かされたこともあつた。かつて「隅田川」を讀んで恍惚としたこともあつた。青年期に於てさへ、落寞たる實生活を經驗してゐた私は、藝術の世界に於ては、人一倍現實を離れた夢をそこに見てゐたかも知れなかつた。父祖の遺傳や環境から云つても、藝術的才華を身心に具へてゐないに違ひない私は、自から豐かな夢を描く力は缺いでゐて、貧寒な文章をのみ書きつゞけて今日に至つたのであるが、自分の描かんとして描き能はざる美しい夢を描いた文學を愛好することは、人後に落ちなかつたと思

つてゐる。しかし、鏡花氏の文字によつて描かれた夢の世界は、私には窺ひ得られざる別の天地である。氏の文字や着想は、すべて私の翫賞慾を跳ね返して、氏獨特の世界へ私を入れさせないのである。殆んど、一章をも一節をも快くは讀み得られないのである。……氏の讃美者のいろ〳〵な評語も、私に取つては、いつも空言としか思はれない。したがつて、明治以來の知名な作家の重な作品は大抵讀破したつもりの私も、鏡花氏のだけは、いくばくも讀んでゐない。讀まうとしても讀めないのである。

それでも、氏の初期のものは、昔幾篇かを通讀した。そして、「照葉狂言」「湯島詣」「夜行巡査」「高野聖」「琵琶傳」など、初期の作品は、氏のその後の作品よりも、鏡花臭があくどくなくつて、純眞素朴で、藝術として傑れてゐるのではあるまいかと、ひそかに思つてゐる。

私の學生時代には、當時の新進作家のうちで泉鏡花の名聲が最も光つてゐた。島村抱月氏主宰の下に、我々數人の文科生によつて催された合評會で、最初に撰んだものは、「新小說」所載の鏡花氏の「注文帳」であつた。私が世間に發表した最初の文章は、この「注文帳」の批評であつた。私はまた、その頃數人の級友とともに、鏡花氏を訪問したことがあつた。島村氏も、屢々鏡花氏を推讃してゐた。歐洲留學から歸朝した後、間もなく島村氏は、當時の文壇の不振について批判を加へてゐるうち、「しかし、鏡花だけは、他の凡庸の徒とちがつてゐる」と云つて、文藝倶樂部所載の、「靈象」と題された彼れの新作を稱讃した。

年少の頃には、人はたやすく周圍にかぶれるものである。自然主義流行の時代にでも、マルタス主義流行の時代にでも、周圍が騷がしく囃立てゝゐると、年少の徒は、それ以外に眞理はないと思つて雷同するのである。確信をもつて異を樹つることは難い。私も、鏡花讃美の聲を、左の耳からも右の耳からも聞かされてゐると、譯も分らずに、正體も分らずに、鏡花のえらさに感歎しなければならない氣持になることもあつた。多數の拜む偶像をば、われも拜みたくなるのが人間通有の面白い心理らしい。鏡花漱石など二三の文人について、私自身の經驗した些細なことも萬般の世相に廣く押及ぼして見ると面白いのである。

私は、今、新潮社出版の「現代小說全集」中の泉鏡花集を取出して、久振りに鏡花氏の作品に目を觸れた。しかし、相變らず讀むに堪へぬのである。何となく名文らしい感じがするだけで、私の心に響くところは少しもないのだ。卷頭の「玄武朱雀」は、ひどくイナセナ景氣のいゝ書きつ振りだが、この鏡花式とも云つていい調子づいた文章が、私には快く受取れない。有り振れた平坦な寫實的描寫を試みないのが、この作者の特色であるが、異常な特色を有つた文學は、それを受入れるに足る素質を備へた少數の讀者にのみ翫賞されるのであらう。「玄武朱雀」を努力して讀通した私はこの調子づいた文章に於て、作者がうしろ鉢卷でステ、コを踊りつづけてゐるのを見るやうな感じがした。

「國貞畫く」は、久振りに歸省した男が舊知を訪ねる道すがらの追憶などに、情趣が豐かに漂つてゐる譯なのだが、それでさへ、文章がいやに踊つてゐて、感じが私の心に傳はつて來ない。「白鷺」の如きは、優にやさしい女性の心で現はしてゐるらしいのだが、曲りくねつた文章に、私の神經はじらされるばかりであつた。……まだしも初期の文章の方が、いやみがなかつたのではあるまいか。

私は、昔の鏡花氏の小説のうちに、酒宴の席に、舞妓か誰れかゞ入つて來たのを形容して「池田の宿から朝顔がまゐつて候」と書いてあつたのを、よく思出すのである。含蓄のある洒落で、鏡花式修辭法から云へば、一つの標本的名文句としていゝのであらうが、私の心は、かういふ表現法にはどうしても從つて行けないのである。

三

夏目漱石は、泉鏡花を非凡な作者として推稱してゐたさうである。さう云へば、漱石の文章には、鏡花に似たやうなところがないでもない。「虞美人草」のなかに散亂してゐる洒落や警句には、鏡花の文章から受ける感じに似通つたものがある。一種のくさみをもつた氣取りである。

これ等二氏を、舊式の文學分類法により「ロマンチシズムの作家欄」に收めて觀察すると、兩者の間にいろ〳〵な類似を見出し得られるのであるが、しかし、それは皮肉な類似であらう。

私は「虞美人草」以前の漱石の作品は、少くも過半は、發表當時に通讀してゐる。そして、運筆が自由自在で、千言立ちどころに成るといつた文才を不思議に思つた。「カーライル博物館」とか「倫敦塔」とかを讀んで、名文章として感心してゐた。當時の文壇には、鷗外以外には、かういふどつしりした文章を書く人はなかつたのだが、鷗外はもつと骨つぽくて、漱石ほどの滋味を缺いでゐた。「草枕」を二日で書上げたとか、「二百十日」を一日で脫稿したとかいふ噂を聞いて、その筆の速さに驚いたこともあつた。しかし、「二百十日」だの「琴のそら音」だのは、小説としては詰らないものだと、發表當時に、私はさう思つたのであつたが、當時の讀後感を、私は今も改めようとは思つてゐない。「倫敦塔」や「草枕」などが、漱石の天分と修養とをよく發揮した作品であつて、世相の描寫や、人間そのものの眞相を掘つて行く力は、當時の彼れには、まだなかつたのであつた。四十近くなつてから筆を取出した彼れの作品には「舞姫」も「うたかたの記」もなかつた。青春の惱みなどは、彼れはつひに描かないで濟んだ。

漱石は、よくも惡くも「虞美人草」から　小説道に踏込んだのであつた。妙なもので　小説を自己畢世の職業とすることに極まると　左右前後の人生を、小説家的眼光をもつて見廻すやうになるのである。それで、以前は　淡々として　俳句か俳體詩でもつくるやうな氣持で　心のまゝに筆を動かしてゐた漱石も、（意識的にか無意識的にか）新たなる態度で　左右を見るやうになつた。彼れは、朝日新聞のお雇作家となつたがために、一歩々々人生を深く廣く見るやうになつたのである。聰明烱眼な彼れは、たとへ多く書齋裡に踟躕してゐても　門下生や崇拜者に取卷かれて　太平樂を云つてゐたとしても　魯鈍な觀察に安んじてゐなかつた。人間のいろ〳〵な心理を見る目は光つてゐた。「虞美人草」は、前期の漱石の趣味に蔽はれて　小説的人物は、たゞお粗末な形を具へてゐるに留まつてゐるのだが　それからはじまつて最後の「明暗」まで　彼れの小説道の努力は續いた。

しかし、四十以後に小説修業の途に上つた彼れは、根本に於て變化を來すことはなかつた。時代の流行に附和雷同することもなかつたし　左顧右盼煩悶苦惱するところもなかつた。乙女小説から「蒲團」に轉じた田山花袋のやうな自己革命など無論經驗しなかつた。

彼れの小説の見本は　初期の「坊つちやん」に於て決定されてゐるのであつた。「猫」とゝも

に、最も廣く讀まれてゐる小說で、私も三四度讀んでゐる譯である。先日本鄕座の舞臺に上演されたのも見た。讀んでも面白かつた。芝居でも面白かつた。通俗小說としても、通俗劇としても、しめつぽいところのない、明るいお目出たい、懷疑のない、健全なものであつた。漱石が日本の國民的作家となつてゐる所以もこゝにあるのであらうか。英國の國民的作家として先日逝去したトマス・ハ！ディが暗憺たる運命觀を保持してゐたのとはちがつてゐる。漱石を愛敬する日本の國民性は、しかく、明るくつてお目出たくつて、懷疑のない健全なものなのであらうか。外來の自然主義風の文學が、地味の適しないところに播かれた種子の如く、發育不良で繁茂しなかつたも、その譯なのであらうか。

私は、「猫」のまだ世に現はれない以前、漱石がまだ無名作家であつた時分、彼れに關する短評を、讀賣新聞に掲げたことがあつた。それは、「源兵衞村から誰れとかゞ大根を持つて來た」といふやうな飄輕な俳體詩を、「ホトトギス」誌上で讀んで感心したゝめであつた。

當時、私は新聞記事の材料を得るために、近所の畔柳芥舟氏ををり〳〵訪問してゐたので、ある日、氏に向つて、俳體詩の話をすると、氏は、それに連關して、漱石の人となりを、いろ〳〵私に話して聞かせた。彼れが讀書家であること、世間的名譽の外に超然としてゐることなどを話して、畔柳氏自身、彼れに敬服してゐるらしい口吻であつた。「高濱君と俳體詩なんかをやつてゝ氣になつてる」と云つてゐた。これによつて見ても、漱石は、無論、他の多くの文學者の如く文筆を以つて世に立たうとする考へはなかつたのだと察せられる。鷗外や上田柳村とも異つてゐた。私が讀賣新聞で、漱石を讃美し、柳村を貶した筆法を弄すると、柳村は、「積極的に何かやらうとするものを非難して、消極的な生活に甘んじてゐるものを褒めるのはいゝことであらうか」といふ意味のことを、私に云つた。しかし、間もなく、漱石は急轉直下の勢ひで世上に活躍した。

當時の讀賣新聞の主筆であつた竹越三叉氏は、漱石招聘を企てて、自分で交渉に出掛けたやうであつたが、私も一度主筆の命を奉じて駒込の邸宅に漱石を訪問した。新聞記者として訪問ずれのしてゐた當時の私は、學生時代に鏡花訪問を試みた時のやうな純な氣持は失つてゐて、「お役目に訪ねて來た」といふ感じを、露骨に現はしたらしかつた。部屋の樣子も、主人の態度も話し振りも、陰欝で冴えなかつた。「草枕」を發表して名聲嘖々たる時であつたのに關はらず、得意の色は見えなかつた。「竹越さんが先日訪ねて來たが、僕を先生と云つてゐた。しかし、竹越さんの方が僕よりも年上ぢやないだらうか」「小說を書きだしてから、丸善の借金は濟した」と、興もなげに云つたことだけは、今もなほ覺えてゐる。その時坂元雪爲君が來てゐたが、この人の話の方が元氣がよくつて座が白けないで濟んだ。讀賣入社の件は無論駄目であつたが、間もなく日曜の文學附錄へ一篇の評論を寄稿されたのが、漱石が讀賣に對する寸志と見るべきであつた。

例の畔柳氏にこの話をすると、「漱石が新聞社なんかへ入るものか」と、賴みに行く方が馬鹿だと云はぬばかりに云つて、笑つた。私は成程と同感した。

ところが、それから、半年も經たぬ間に、夏目漱石先生は、堂々と朝日新聞社に入社した。私は意外に感じた。人は、處世上の利害の打算によつてどうにでも動くものである。あの人に限つてそんなことはないと斷言するのは淺墓な考へである。漱石先生と雖も例外がある筈がない。竹

越氏は私に向つて、「漱石は、讀賣入社については不安を感じてゐるらしいが、社では約束は確實に守る。本野一郎君に僕からさう云つて、將來の地位の安全は保證する」と云つたが、さういふ言葉をそのまゝに受入れるべく漱石は、あまりに聰明であつた。讀賣では前途に不安を感じて、乘り氣にならなかつた彼れが、朝日ならと乘り出したところに、彼れの人生觀察の目の動きが見られる。

島村抱月は、その頭腦の聰明さに於ては漱石に劣らなかつたが、晩年一婦人の愛に惑溺して常道を逸した生活を過した人ほどあつて、あまく調子に乘つて利害を見る目のくらむことがあつたらしかつた。衆人の期待を荷つて歐洲留學から歸朝した時、讀賣では、かねての關係もあることだから、彼れの助力を待設けてゐたのであつたが、彼れは、容易に日々新聞の招きに應じた。當時は文藝には緣のなかつたその新聞を舞臺として、自己の勢力を扶植しようとした。おれが出れば不適當な舞臺でも生かして見せると氣を負つてゐたのであつた。ところが、滿一年を過ぎると無雜作に社の方から斷はられてしまつた。その頃私は伊原青々園氏に聞いた。氏は抱月に忠告して「君は日々のやうな場所違ひの新聞に書くよりもやはり讀賣に書いた方がいゝぢやないか」と云つたが、彼れは、自信あるらしく、忠告に耳を傾けなかつたさうであつた。

抱月よりも漱石の方が、自己と周圍との觀察に於て用意周到であつた譯だ。

四

「坊つちやん」は、筆がキビ〳〵してゐるのと、例の美文脈の低徊味よりも、事件の運びに富んでゐるのと、主人公の人となりがキビ〳〵してゐるので、萬人向の小說になつてゐる。大抵の人に面白く讀まれさうである。「不如歸」や「金色夜叉」などよりも、いやみがなくつて、いゝ通俗小說である。しかし、ここに現はれてゐるいろ〳〵な人間は型の如き人間である。ここに現はれてゐる作者の正義觀は卑近である。かういふ風に世の中を見て安んじてゐられゝばお目出たいものだと思はれる。

漱石が、モウパツサンの「首飾り」を非難した講演錄を讀んだことがあつたが、そこに含まれてゐた非難の個所は、このフランスの作家が、作中の薄給者夫妻の長い間の苦辛を無意味なもののやうに取扱つた點にあつた。モウパツサンに對する道德の立場からの非難は、トルストヰによつて、峻烈に下されたのであつて、さういふところに、いろ〳〵な文學者の見解の相違が見られて面白いのであるが、トルストヰ自身の描いた人間は、漱石の描いた人物のやうに、やす〳〵と道德の支配を受けるほど薄手ではなかつた。そしてトルストヰの道德觀は、彼れの深い惱みと表裏してゐた。「坊つちやん」に現はれた漱石のそれのやうに安價ではなかつた。

漱石の大部の「文學論」集や「文學評論」集は、彼れの學殖と批判力とを充分に現はしたもので、文學研究者を裨益する良書である。私は學ぶところが少くなかつた。「英國十八世紀の文學評論」は、日本人の觀察した西洋文學觀として、これほど委曲を盡したものは、他に類がないだらうと思はれる。私としては、漱石が小說は書かないでも、この調子で、英國各時代の文學史を書殘してゐたなら、もつと有難かつたと思つてゐる。

「文學論」集の序文に於て、彼れは、かう云つてゐる。

「倫敦に住み暮らしたる二年は、尤も不愉快の二年なり。余は、英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。……歸朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。去れども、余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光榮と權利を有する余は、五千萬人中に生息して、少くとも五千萬分の一の光榮と權利を支持せんと欲す。此光榮と權利を五千萬分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若くは余が本國を去るの擧に出づる能はず、寧ろ力の盡く限り、之を五千萬分一に回復せんことを努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず、余が意志以上の意志なり。……英國人は余を目して神經衰弱と云へり。ある日本人は書を本國に致して余を狂氣なりと云へる由。……歸朝後の余も、依然として神經衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。……余が身邊の狀況にして變化せざる限りは、余の神經衰弱と狂氣とは、命のあらん程永續すべし、……」

かう欝勃たる不平を述べてゐる。「猫」その他の隨筆錄に於てゞなく「文學論」の序文に於て、精神の惱みを直截に述べてゐるのは面白い。そして、神經衰弱にして狂人なるがため「猫」や、「漾虛集」や「鶉籠」を著はしたと、皮肉を云つてゐる。

「十八世紀文學論」のうちでは、スキフト論が最も光彩を放つてゐて、これほど微細に且つ鋭利に、スキフトを解剖し觀察し翫賞したものは、英國に於てもないに違ひない。サツカレーやハリズリツトなどのスキフト觀も、漱石に比べると見方が皮相である。そして　漱石は、この稀代の諷刺家厭世家スキフトを非常に高く評價してゐる。「不滿足を現はす文學的表現」の階段を四種に分ちていろ〳〵に例を擧げたあと、スキフトをもつてそのどん詰りとしてゐる。

「普通の不滿足は必ず一方に滿足を控えてゐる。もしくは夢見てゐる。スキフトの不滿足には此對立がない。……過去現在未來を通じて、古今東西を盡くして、苟しくも人間たる以上は、悉く嫌惡すべき動物であると云ふ不滿足である。從つて希望がない。救はれ樣がない。免かれ樣がない。彼れの諷刺は噴火口から迸しる氷の樣なものである。非常に猛烈であるけれども、非常に冷たい。人を動すための不平でもなければ、自ら免れるための不平でもない。どうしたつて世界のあらん限りつゞく、不平の爲めの不平だから、スキフト自身は骨て激してゐない。冷然平然としてゐる。何だかスキフトなるものが重たい石のやうに英國の眞中に轉がつてゐるやうな氣がする。さうして此石が一つある爲めに、左右前後は無論、全世界に蠢動する人間と名のつくものが、悉く石に變化した樣に思はれる。なぜと云ふと、彼れは如何に憎惡の意を洩らしても決して赤くならない。又決して慇懃にも出ない。同情は固よりない。……」

漱石の見たスキフトは、通俗の文學史家の見たやうな淺薄皮相な諷刺家ではないのである。古今東西の文學史に散在してゐる諷刺家や厭世家は、大抵は一方で甘い夢を見てゐるので、彼れと心を同うして見てゐると、世界の殆んど凡ての文學者が甘ちやんなのである。馬琴の「夢想兵衛」などは「ガリヴァ旅日記」に比べると、お話しにならないほど卑俗であり膚淺である。そして、漱石の所論を熟讀してゐると、彼れはスキフトを客觀的に研究し解剖してゐるだけではなくつて、スキフトの見解に可成り同感し共鳴してゐるのではないかと疑はれる。さうでなければ、あゝまで深くスキフトの心境に立入つた傑れた批評が出來る譯はないと私には思はれる。

しかし、一部分だけでもスキフトと心を同うしてゐる漱石が、自分の創作に於ては、なぜ「坊つちやん」の如き、通俗的小説を書くのであらうか。留學中にも歸朝後にも滿腔の不平を抱いてゐた筈の彼れの鬱憤はこんな小説で洩らされる程度であつたのか。……私は、漱石の創作に現はれてる彼れの心理について、少からぬ興味を覺えだした。鷗外は聰明至極で筆致も明快であつたが、心の働きが單純であつた。漱石は複雜である。

彼れは、生眞面目に堂々とスキフトを論じてゐるうちにも、時々はおひやらかしを云つたり、忘れてゐたものをふと思出したやうな態度で卑近な道德に拘泥した口吻を洩らしてゐる。こゝらが、讓歩のない冷靜なスキフトとは違つた漱石の眞面目なのであらうか。彼れは、「ドンキホテ」についても、「多數の評家は諷刺と見るやうだが、私には花見の髮同樣な感がある」と、おひやらかしてゐる。

五

私は、「それから」を改めて讀んだ。

この長篇は二年ほど前に、歸省の途上、汽車のなかで通讀して、直ちに簡單なる讀後感を『讀賣』に寄稿したのであるが、作品から受けた印象は間もなく私の頭から消失せてゐた。それほど感銘の薄い作品であつた。

しかし、この小説は、漱石の作中でも殊に深刻味のあるものとして、知識階級の讀者に推讃されてゐると聞いたので、今度改めて讀直したのである。

「虞美人草」を讀んだあとで、「それから」を讀むと、この作者の小説構成術の進歩が見られる。前作では、小説らしいところはぽつちりしかなくつて、隨筆風の徒徊趣味が果てしなく跋扈してゐたのであつたが、後作では、全篇の初中後がもつと有機的に構成されてゐた。作中人物のそれぞれがもつと現實の姿を備へてゐる。しかし、私には、最初讀んだ時にまさつた興味は感ぜられなかつた。

「虞美人草」でも、「彼岸過迄」でも、「心」でも、あるひは「明暗」でも、漱石の長篇小説の作風は、後に何か奇拔なことが出て來さうに讀者に期待させながら、くどく長く讀者を引づつて行くので、讀者には辛抱が入る。凡庸な作者は、讀者を釣つて行くだけで、最後に玉手箱から取出された手品の種は案外詰らないことが多いのだが、漱石の玉手箱には、いつも相應に見事なものが潜められてゐる。「それから」にも、主人公代助が友人の妻三千代に對する心理の交錯に、讀者の心を充分に捉へる力を有つてゐるのである。彼れの胸に潜んでゐた秘密を、女の夫や、父や兄嫁や讀者の前にさらけ出した時には、彼れの人生は混亂し、「世の中は眞赤」になる譯である。……ところが作者が筆を盡してゐるにかゝはらず、事相が私には空々しく思はれて、胸を抉られるやうな感じがしないのだ。私ばかりがさうなのであらうか。

「代助は西洋の小説を讀むたびに、そのうちに出て來る男女の情話があまりに露骨で、あまりに放肆で、且つあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪しんでゐた。言語で讀めば兎に角、日本には譯し得ぬ趣味のものと考へてゐた。從つて彼は自分と三千代との關係を發展させるために、舶來の臺詞を用ひる意志は毫もなかつた」と云つてゐるが、漱石は男女關係を描くにあたつて、つ

ねにこの心構へを棄てなかつた。人倫五常の道義を表に振翳しながら、傍ら、忌憚なく淫蕩の情景を描寫してゐた馬琴とは違つて、漱石はあくまで品位を保つてゐた。それは彼れの創作の風格として尊重していゝことなので、私は、漱石がモウパツサンなどの風作を眞似なかつたのを遺憾に思つてゐるのではないが、「それから」の代助が、そんなに熱烈に三千代を戀してゐるやうには思はれないのである。代助の心は躍つてゐない。血は湧いてゐない。作者の頭は自在に働いて、戀愛心理の經過に於ても、へまなことは書いてゐないのだが、どこまで行つても理詰めな感じがする。へまなところがなさ過ぎるので窮屈である。新聞小説執筆前の初期の作品「猫」の如き、「草枕」の如き、「坊つちやん」の如き、みんな、のび〳〵としてゆつたりしてゐたが、「それから」やその他の長篇小説は、くどく詳しく書かれてゐるに關はらず窮屈である。

「代助は泣いて人を動かさうとするほど、低級趣味のものはないと自信してゐる。凡そ何が氣障だつて、思はせ振りの、涙や煩悶や、眞面目や、熱烈ほど氣障なものはないと自覺してゐる」と云つてゐるが、彼れの創作の用意にはこの氣持が嚴守されてゐる。普通の小説の書振りに對する彼れの反抗心もここに微見してゐる。

彼れ漱石も、ある意味で代助の如く、ニルアドミラリの域に達してゐたのであらう。……私はかう思ふ。彼れは、學究的職業から離れて、小説によつて生活の料を得ることになつて以來、當面の必要上、世界と人間の眞相を考察し冥想して、それを机上に持つて來たのであらうが、考察冥想の結果として得た人と人との間の愛慾や鬪爭を、彼れは、つまりは、ニルアドミラリの目で見てゐたのではあるまいか。彼れと同時代に自然主義作家として區別された花袋獨歩藤村などは、案外傍觀的や客觀的の作家ではなくて、漱石の見方から判斷すると、思はせ振りの涙や、煩悶や、眞面目や熱烈を作品に傾注した、氣障な作家であつたのかも知れなかつた。彼れがツルゲネーフ全集を讀んでゐるといふ噂を昔聞いたことがあつたが、彼れはツルゲネーフに於ても、思はせ振りの氣障な作家を見たかも知れなかつた。

ニルアドミラリの極は、文學としてはスキフトの域に達しなければならぬ。彼れは一面さういふ素質を有つてゐたらしいのだが、それを、徹底させなかつた。……思はせ振りのもの氣障なものを、思はせ振りのもの氣障なものとして、スイフト式に冷靜にあるひは冷酷に、人間といふ生物の愚かしき行作として描寫しないで、尤もらしく重みをつけて書いたのは、彼れの職業意識と、傳統的道德癖とに由るのであらう。彼れは腹の底では、雜多紛々の色戀沙汰などに、尊い人生の意義を見たりしてなんかゐなかつたのであらうか。

深い人間心理を微細に取扱つたいくつかの彼れの小説を讀むと、よく知つてゐるのに感心されるが、いつも實感が缺けてゐて、生な人間らしいところが缺けてゐるので、強く胸を打たれることがない。

何と云つても、彼れの長篇小説のうちで生氣に富んでゐるのは「道草」である。「それから」なども、漱石の他の多くの小説の如く、頻りに道草を喰つてゐる小説で、その道草が例の如く、アンドレーフの「七刑人」の説明だつたり、ダンヌンチオの部屋の色の説明だつたり、文學論だつたり、社會觀だつたりして、やゝもすると、小説の中へ雜錄がまぎれ込んだのぢやないかと思はれるのだが、「道草」は、題は明らさまに道草を標榜してゐながら、內容は首尾を通じて、生々した

人生記錄なのである。

六

「門」を今度はじめて讀んだ。

窓前の若葉を見上げては目を休めながら、半日足らずの時間で讀通した。逝く春の感ぜられる この頃の時節には、私は毎年、「花よ〳〵」と浮れぞめきし人の心も稍々鎭まりて、一輪早咲きの躑躅花の上を、羽弱の蝶の行き戻りする四月の末の春景色」といふ、北村透谷の「宿魂鏡」の書出しの一節と、「江南四月草青々、千山花落杜鵑啼」といふ、鷗外一派の飜譯詩集「面影」のうちに收められた平家物語鬼界ケ島漢譯の一句を思出すのを常例としてゐる。これ等の平凡な詞句にも、それを初めて愛誦した當時の、少年の夢が纏綿としてゐて、私には言ひ知らぬ懷しみが存するのである。我々の文學翫賞には、作品それ自身の價値以外に、かういふ讀者各自の主觀の色が添つてゐるのである。

私は、「門」を机上に伏せては、窓外に淀んでゐる懶い春を眺めた。あるひは、漱石の他の文集にある「修善寺日記」や「思ひ出すことなど」を拔讀みして、小說以上の興味を感じた。漱石自身も職業意識の伴つてゐる小說に筆を執るよりも、かういふものゝ方に、自己本來の趣味を感じてゐたのである。

縹緲玄黃外、生死交謝時、杳然無寄託、懸命一藕絲、命根何處是、窈窕不可知、――――
孤愁來落枕、又搖蕭颯悲、仰臥秋已闌、苦病欲銀髭、寥廓天猶在、高樹空餘枝、對比忡悵久、

晩懷無盡期

病後に作られたかういふ古詩を私は微吟した。そして、この詩人の氣持がぴつたり自分の氣持に合ふのを感じた。小說については、私の氣持は何となく、彼れの氣持とそぐはないところがあるやうに思はれるのだが。……

しかし、「門」は、傑れた作品である。「それから」のやうに理窟責めのギチ〳〵した小說ではない。「虞美人草」のやうな美文で塗り潰された退屈な小說ではない。漱石は、ここに於てけば〳〵した美服を脫いで、袴も脫いで、平服に着替えて、樂々と浮世を語つてゐる。例の今に面白いものを見せるぞと云つたやうに、讀者を釣らうとする山氣がない。はじめから、腰辨夫婦の平凡な人生を、平凡な筆致で淳々と叙して行くところに、私は親しみをもつて隨いて行かれた。この創作態度や人間を見る目に於て、私は漱石の進境を認めた。――さう思つて讀んでゐた。ところが、しまひの方へ近づくと、この腰辨夫婦は異常な過去を有つてゐることが曝露された。私は、舊劇で、鰺七が引拔いて金輪五郎になつたのを見るやうだつた。安官吏宗助實は何某と變つて、急に深刻性を發揮するのに驚かされた。友人の妻を奪つた彼は、「それから」の代助の生れ變りのやうな氣がした。さう云へば、はじめから、何かの伏線らしい變な文句がをり〳〵挿まれてゐたのだが、他の小說とはちがつて、「門」にはしみ〴〵とした、衒氣のない世相の描寫が續いてゐたので、私は、それだけに滿足して、貧しい冴えない腰辨生活の心境に同感して、變な伏線なんかをあまり氣にしなかつたのであつた。それほど柔順な讀者であつたために、後で作者のからくりが分ると、激しい嫌惡を覺えた。宗助が正體を現はしてからの心理も一通り書けてゐるには違ひ

ないが、眞に迫つたところはなかつた。鎌倉の禪寺へ行くなんか少し巫山戯てゐる。……作者はどの小説にも〳〵なぜこんな筆法を用ひるのであらうか。腰辨宗助の平凡生活だけでいゝではないか。作者はそれだけで世相を描出し得る手腕を有つてゐるのである。

思ふに、責任感の强いこの作者は、新聞小説家として讀君を面白がらせなければならぬと云ふ職業意識から、こんな餘計な作爲を用ひたのではあるまいか。初期の漱石は、水の流るゝ如く雲の動く如くに筆を運んでゐた。

「門」のはじめの方に、「いくら容易い字でも、こりや變だと思つて疑り出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大變迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぢつと眺めてゐると、何だか違つた樣な氣がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて來る」と宗助に云はせてゐるが、かういつた感じは、私もをり〳〵經驗することがある。日常の茶の間ばなしのうちにこんなことを云はせて置いて、最後に迷ひを晴らしに禪寺へ行くのが、宗助の人となりとしてさう不調和でないやうに仕組んでゐるなんか、この作者が脚色に拔け目のないことが察せられる。兎に角、構成の才は充分に有つてゐる人なので、戯曲を書かうと思へば書けた人なのである。

この頃劇場で上演用の新脚本に缺乏してゐるため、盛名ある漱石の小説の戯曲化が流行しだした。「猫」のやうな、どこから見ても芝居にならないものまでも脚色しだした。やがて、彼れの他のいろ〳〵な長篇小説が戯曲化されるのではないかと危まれる。生前の漱石は夢にも思はなかつたことで、芝居嫌ひの彼れが、地下で聞いたら、作品の神聖が傷けられたやうにいやな顔をするだらう。

しかし、彼れの新聞小説には、お芝居じみたところがあるのだ。探偵小説じみたところもあるのだ。彼れは、探偵といふ者を嫌つてゐたに關はらず、探偵小説を書き得る素質をも有つてゐた。「彼岸過迄」は、殊に探偵小説らしい分子に富んでゐる。

彼れは、「門」を書いた後大病に罹つて、暫らく新聞小説の筆を絶つてゐた。責任感の强い彼れは、お雇ひ作家としての義務を怠つてゐたことを心苦しく思つてゐたらしい。「久振りだから成るべく面白いものを書かなければ濟まない」といふ氣になつてゐた。俗受けを顧慮する氣持が不斷にも勝つてゐたことは、「彼岸過迄」に添へられた序文を讀んでも察せられる。森鷗外が、日日新聞に於て、平然として、あの非通俗甚だしい考證的史傳を、書續けた氣持とは大いにちがつてゐる。

私は數年前に一度通讀したことのあるこの長篇を、今度讀直した。この小説は、この作者のどの小説よりも手の込んだもので、漱石の頭腦がいかに複雜に回轉するかに驚れる。前半の探偵趣味浪漫的探偵趣味、「異常に對する嗜欲」の發揮は、彼れが愛讀してゐたらしいスチーヴンソンなどから、暗示され啓發されたらしく思はれるが、理智に於てスチーヴンソンより優れてゐた彼れは、「新アラビア物語」や「寶島」の作者のやうに、「異常」や「冒險」に陶然として心を浸しただけではゐられなかつた。自分で作つた夢を、自分で破つてゐる。ここには、鏡花趣味も含まれてゐるが、漱石は白晝にタハイのない夢を見て、そこに安んじてゐられなかつた。蛇頭を彫つた異樣な洋杖でも、女占ひ者の神秘らしい話でも、條理明晰に取扱はれてゐる。鷗外や漱石の小説を通して見る人生には、神秘不可解の影はないので、外の作者は知恵が足りないからそんなものを感

じるのではないかと思はれる。

「話が理窟張つて六ケしくなつて來たね。あんまり一人で調子に乘つて饒舌つてゐるものだから」と、作中の人物に云はせてゐるのは、作者自身、あまりに獨りよがりの心理解剖をし過ぎてゐるのに氣がついたゝめの申譯であつて、「右か左へ自分の身體を動かし得ない唯の理窟は、いくら旨く出來てゐても、彼れには用のない贋造紙幣と同じ物であつた」と、他の人物に云はせてゐるのも、作者自身讀者の思惑を氣にしたための照れ隱しであらう。

しかし、この小說のうちの「須永の話」は、今度も面白く讀んだ。「虞美人草」の藤尾は、着物は派手に出來てゐるが肉體が作られてゐない。「それから」の三千代は、影が薄い。「門」のお米は日蔭の女らしく描かれてゐるが、女性としての神經が通つてゐないやうな感じがする。……私は「須永の話」を中心とした「彼岸過迄」に於て、はじめて、漱石の頭から描きだされた潑溂たる女性を見るのである。それほど千代子はよく描かれてゐる。溫かい肉體を備へてそこに鮮かに浮出してゐる。彼女に對する須永の嫉妬焦慮の氣持も讀者の胸に迫る力を有つてゐる。今までの漱石の作中に現はれてゐなかつた氣持である。私は漱石の人生觀察心理解剖が、一作毎に深くなつて行くのを感じる。彼れは新聞小說を職業としたために、餘儀なく人生研究に目を向け、その結果が自己の修養になつたのである。

かういふ性質の須永が千代子に對してかういふ態度を取つたと云ふだけで、一篇の好材料になる譯だが、この作者は、例の如く二重にも三重にもひねくつて、須永をある不幸な運命の下に置かれた男として、そこに須永の性癖の由つて來たる原因を索つた。

鎌倉で小鰺の一鹽を食ふことから、ふと話の筋を引出して、「是れはまた誰れにも話さない秘密だが、實は單に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何處がどう違つて、何處がどう似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである——缺點でも母と共に具へてゐるのなら、僕は大變嬉しかつた。長所でも母になくつて僕だけ有つてゐると甚だ不愉快になつた。そのうちで僕の最も氣になるのは、僕の顏が父にだけ似て、母とはまるで緣のない目鼻立に出來上つてゐる事であつた」といふ須永の話を讀むと、讀者は作者のからくりに氣がついて、また例の趣向かと微笑されるのである。

果して、須永は現在の母親の實の子ではなくつて、早逝した父親が小間使に生ませた子であつた。しかし、續けて讀んで行くと、この事實が、さうして痛ましい世相として讀者を動かすほどには描かれてゐなかつた。むしろ、須永出生の秘密に關する追窮はいい加減にして、千代子との交渉をもつと發展させて小說を進めた方が面白かつたのだが、それは漱石は、企てゝも爲遂げ得なかつたかも知れない。

七

「彼岸過迄」の須永と云ひ松本と云ひ、「それから」の代助と云ひ、「心」の先生と云ひ、その他の作品中の某々など、漱石の小說には、可成りの資產を有つてゐて遊んで暮してゐる高等遊民が多い。知識があつて、暇があるのだから、ともすると、丹念に自己解剖に耽るのである。そして、作中の老人は、詩會へ行つたり骨董を翫んだり謠曲をやつたりする。今日の文壇で盛んに論爭さ

れてゐる社會意識は、彼れの小說には殆んど現はれてゐないと云つていい。しかし、彼れが、今日の世に働いてゐたなら、聰明なる見解をもつてそれを取扱つてゐたであらう。鷗外は、共產主義に關する歷史的研究をはじめたが、はじめたばかりで倒れた。彼れは旺んな知識慾によつてさういふものを研究はしても、盲目的に時の流行に附隨しなつたに違ひなかつた。「善とは家畜の群のやうな人間と、去就を同うする道にすぎない。それを破らうとするのは惡だ。善惡は問ふべきではない。家畜の凡俗を離れて、意思を强くして貴族的に高尙に淋しい高いところに身を置きたいといふのだ。その高尙な人間は假面を冠つてゐる。假面を尊敬せねばならない」と云つたやうなほこりを彼れは有つてゐた。しかし、漱石はもつと平民的であつた。鷗外よりも豐なか藝術的天分は有つてゐたが、周圍を顧慮するところがあつた。「成金の亂行を見ると、强盜が白刃の拔身を疊に突き立てゝ良民を脅迫してゐるのと同じやうな感じになるのです……僕は是程臆病な人間なのです」と、云ふやうな須永の手紙の文句も、必しも作中の人物だけの心持ではないかも知れない。

「心」には、今までの作品のうちにも微見えてゐた憎人厭世の氣持が最も强烈に出てゐる。憎人厭世が自己嫌惡に達してゐるのである。「私は個人に對する復讐以上の事を現にやつてゐるんだ。私は彼等を憎むばかりぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎むことを覺えた」と云つてゐる作中の人物は、つひに自分自身の憎さに堪へられないで自滅した。漱石の人間研究の最頂點に達したものと云つていゝ。そして此處には例の美文脈が全く跟を絕つてゐる。警句や諧謔がたまにあつても、「猫」や「虞美人草」時代のやうな作者自身面白がつてゐるやうな洒落や警句とはまるで違つてゐる。嚴肅である。陰欝である。私の讀んだ範圍內に於ては、この一篇が彼れの小說のうちで、最も通俗味の乏しいものである。讀物の好奇心を惹かうとする脚色ぶりは例の通りであるが、小細工はしないで、平押しに押して行つてゐる。「私」と云ふ青年に取つての參考になると「先生の遺書」に云つてゐるのが、青年の田舍の家庭の情況に照らして、何となく適中してゐるやうでもあるし、田舍の老父の重患と「先生」の自殺とが對蹠的に人間の生存について讀者の思ひを致させるやうな書振りは、彼れの他の小說のわざとらしい趣向とは格段の相違がある。

「惡い人間といふ一種の人間が世の中にあると、君は思つてゐるんですか。そんな鑄型に入れられたやうな惡人は、世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少くともみんな普通の人間なんです。いざといふ間際に、急に惡人に變るんだから恐ろしいんです」といふ、この一篇の結晶として見るべき言葉を、前に引用した鷗外のほこりとしてゐた假面說と比べて見ると面白い。兩者は相反してゐるやうなところもあり、似通つてゐるやうにも思はれる。「假面」も、大學生である一人の青年に向つてだけ、主人公の生死の秘密が洩らされてゐる。ところで、鷗外はほこりを有つて、青年の蒙を啓く如くに語り、漱石は「先生」をして妻にさへ云はない心底を、委曲を盡くして、青年にだけ語らせながら、「最も强く明治の影響を受けた私どもが、其後に生殘つてゐるのは必竟時勢遲れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました」とか、「あなたにも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしさうだとすると、それは時勢の推移から來る人間の相違だ

から仕方がありません。あるひは個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かかも知れません」とか、自己の強烈なる信念の發露についても、謙遜させてゐる。漱石には、執筆にあたつて、移り行く周圍の風潮を顧慮するところがあると、私が云つた所以である。

「彼岸過迄」には一端を現はしてゐたゞけの嫉妬が、「心」に於ては、最も熱心に追窮されてゐる。財産に關する暗鬪、親類緣者の反目、嫉妬、孤獨感などが、在來の彼れの作品に見られないほどに強く、陰欝に書かれてゐる。いろ〳〵な人々の心理を研究して、ついにどん詰りまで來たやうなものである。

そこで、彼れは、「心」の次ぎには、「道草」を書いた。この小說は彼れの自叙傳らしく思はれるが、この自叙傳小說を讀むと、今までの彼れの小說の人物について思ひ當るところが少くない。

「道草」讀後感は、私は去年讀賣新聞に揭げてゐる。

最後の大作「明暗」は、永久に未完のまゝで殘されてゐる。結末に近くほど波瀾を起させるのが、彼れの創作の慣例になつてゐるので、「明暗」は、どう發展して完結するのか、讀者には想像がつかないのみならず、作者自身の意圖もハッキリしてゐなかつたのぢやないかと思はれる。そして書殘された範圍に於ての「明暗」は、少し箍がゆるんでゐるやうな感じのする作品である。運びがまどろこしく退屈だ。しかし、お延とお秀などの女性は、よく描かれてゐる、これまでの彼れの小說には、多くの女性は、斷片的に現はされてゐるか、あるひは型に入つたやうに現實味を缺いでゐたが、お延とお秀と、吉川夫人とは、充分に現實の女らしい羽を擴げて羽叩きしてゐる。

「眞晝間提灯を點けて往來を歩くのは、世の中の暗黑な所を諷した皮肉な仕事と取れば、取れないともあるまいが、一方から云へば、髮をつけて花見をすると同一の氣樂さから出ないとも限らない。花見の趣向などは現在に滿足を表はす程度の尤も甚しいもので、不平や諷刺の表現でないことは明かである。現に「ドンキホテ」なども、多數の評家は諷刺と見てゐるやうだが、私には花見の鬘同樣な感がある」

漱石はかう云つてゐる。我々が彼れの作品に對して、事々しき穿鑿を試みるのも、花見の鬘同樣なものに殊更らしく深刻な意味を附することのやうに、彼には思はれるかも知れない。

ところが、漱石自身は、「明暗」に於ても、小うるさいくらゐに、心理の穿鑿に從事してゐる。作中人物は、互ひに相手の目叩きの數までも數へて、それによつて相手の心理を批判するといつた態度で、そのために作の進行がのろく、且つ實感が水つぽくなるのである。人物も筋肉の微動にも、一ページも書續けられるほどにその人の心の表現が籠つてゐるらしく見られるのだ。漱石の面前では、うつかり痒いところをちよつと痒く譯にも行かないやうである。

しかし、「明暗」には、我々が日常見聞してゐる平凡な現實生活の眞相が多分に出てゐる。書殘されてゐる範圍內で云へば、異常な事件がない。この作者には免れがたい癖であつたロマンチクな取扱振りがない。詩がなくなつてゐる。「三四郎」よりも「門」よりも、どれよりも平凡な筋立で、人物も事件もそこらにありさうに思はれる。兄嫁と小姑、若夫婦をつゝいて喜んでゐる意地惡い中年女の交渉は、微細に渡つて實相が描かれてゐる。私は、「明暗」まで讀んで、はじめて、

漱石も女がわかるやうになつたと思つた。老いたる彼れは、もう「草枕」にあるやうな詩的女性を朦朧と幻想し得られなくなつたのであらう。鏡花式の夢から醒めて現實を見るやうになつたのであらう。それ故、「明暗」は、運筆の點では作者老衰の非が見えるにしても、意義のある作品たることを失はない。

もう一つ面白いのは、この最後の小説のなかに、小林といふ皮肉ないやがらせを云ふ變な男が抛り出されてゐることである。ニルアドミラリの域に達してゐるといふ「それから」の代助にちよつと似てゐるところがあるが、代助は、要するにブルヂョアのノラクラものである。小林は、卑俗であるが、自棄的鬪志を持つてゐる。プロレタリア意識をもつてブルヂョアに反抗してゐる。有產階級が彼れを侮蔑するなら、彼れも有產階級を侮蔑してやる。復讐してやるといふ反抗心を有つてゐる。漱石の作中に、皮肉揶揄反抗の氣分は珍らしくないが、プロレタリア意識を持つた皮肉揶揄反抗は珍らしい。

彼れの作品の殆んど全部を讀去り讀來つた私は、最後の「明暗」に於て、こんな人間が、水に油を點したやうにぽつりと現出してゐるのに、甚だ興味を感じた。漱石としては、柄にない人物を創造した譯で、取扱ひ方も上手でない。しかし、社會主義か共產主義か、さういつた假色を使ふ人間を、ブルヂョア仲間へ割込ませたところに、時代に關心する作者の氣持が分るやうに思はれる。

兎に角漱石は凡庸の作家ではない。私は未完の大作「明暗」の最後の一行を讀終つて、この作者の一生を回顧した。そして、例の「縹緲玄黃外、死生交謝時、冥然無寄託、懸命一藕絲……」といふ彼の病中の詩を思浮べた。

今夜は波の音が高い。　（四月十八日、大磯にて）

右の如く漱石論を書いてしまつたところへ、手許に書物がなかつたために讀落した「行人」がふと手に入つたので、次手に速讀することにした。

例の如く讀者をもどかしがらせる小説であるが、前半は讀者を惹きつける力をもつてゐる。弟に對する兄の疑惑には深刻性が含まれてゐて、弟と兄嫁とが暴風雨の夜和歌山の宿に泊るあたりは、異常に、緊張してゐるが、それから後は、甚だしく氣が拔けてゐる。中心を逸して、徒らにまはりを廻つてばかりゐるやうな小説である。くどくつてまどろこしくて、讀後の感銘が甚だ薄い。漱石にも似合はしからざる小説である。彼れの哲學觀宗教觀が窺はれないこともないが、それが乾燥無味な叙述に終つてゐる。この長篇執筆中、作者は病氣をして一時稿を中絶させてゐるが、作品の不出來なのはそのためかも知れない。

この小説は、「彼岸過迄」と「心」の間に作り上げられたのであるが、これ等前後の作品と連關させて考へると、この作者がいかに、男女關係についての暗い心理に思ひを致してゐたか、またさういふ暗い氣持から脫却するためにはいかに苦鬪しなければならぬかと、思ひを潛めてゐたことが察せられる。……藝術として劣つてゐてもその點では興味がある。

小宮豐隆君は、漱石の修善寺に於ける大吐血を以つて、彼れの生涯の轉機としてゐるが、それ

はそうかも知れない。しかし、大吐血後の漱石が前期の彼れよりも、人生の見方が一層溫かになり、一層寛大になつたとは思はれない。却つて反對ではないだらうか。「心」「行人」「道草」「明暗」がそれを證明してゐる。他人の心の暗さ醜さを傍觀的に描いたといふやうな空々しいものではなくつて、これ等に現はれてゐるいろ〳〵な疑惑は、作者自身の心に深く根を張つてゐたのぢやないかと思はれる。そして、大病前の作品よりも洒落つ氣が少くて、一貫した眞面目さがある。「坊つちやん」時代の薄つぺらな明るさが影を潜めて、懐疑の深さが見られるやうになつた。

「思出すことなど」のうちの病床感想に、知友門下生愛讀者などの好意に感激して、「世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた」と云ひ、「四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に忙しい世が、是程の手間と時間と親切を掛けてくれやうとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた……」とも云つてゐるが、かういふ言葉は、大抵の病人が回復後に起す感傷語であつて、特別に意味の深い言葉とは思はれない。それに「さしたる過去を持たぬ男」と云つてゐるのは、漱石の謙遜した言葉であつて、若し彼が作家として名聲を博してゐなかつたなら、あんなに賑かに彼れの病床が顧みられよう筈はなかつた。

人間は氣力の衰へた時には、年甲斐もなく、いやに感傷的な言葉を吐きたがるものである。「人の死せんとするや、その言ふことや善し」と云ふのも、畢竟は、氣力の衰へをさすに過ぎないことがある。……「心」「行人」「明暗」など、漱石晩年の作品に、私は、彼れの心の惑ひを見、暗さを見、惱みをこそ見るが、超脫した悟性の光りが輝いてゐるとは思はない。

岩野泡鳴論

一

かつて、近松秋江君に小石川の往來で行會つた時、彼れは、先夜龍土會に出席したと云つて、その會の樣子を興もなげに語つたが、その話のうちに、

「岩野は詰らん坊だ」と云つた。惡意を籠めて云つたのでもなく、その批判を高調しようとしたのでもなく、笑ふでもなく嘲けるでもなく、「つまらんぼうだ」と事もなげに云つた。その批評語に私も同感したので、十數年後の今日なほ記憶によく殘つてゐる。

「君はデカダンだよ」と、龍土會の席で誰れかゞ云ふと、

「僕がデカダン？　悅しいねえ。ハツ〳〵ハ」と、泡鳴が聲高く笑ふ。……さう云つた樣子を思浮べると、私にも、岩野が詰らん坊に思へたのであつた。

私は泡鳴とは一時よく往來してゐた。彼れは、原稿の捌け口を志して、ある日突然私を讀賣新聞社に訪ねて來たのであつた。その頃石川喙木も突然訪ねて來た。私は、青白い顏をした虛弱らしい小柄な喙木と、五分刈頭のノッポの、元氣のいゝ、しかし粗野な泡鳴とを、心の中で比べて、詩人にもいろ〳〵あるのだなと思つたゞけで、かういふ人達に寄稿を賴む氣はなかつた。その頃の私は、當時の詩人をあまり好んでゐなかつた。ところが、その後、小山內君主宰のイブセン研究會に出るやうになつてから、泡鳴とも懇意になつた。森川町の私の下宿へもをり〳〵やつて來た。私の方からも彼れの家へ訪ねて行つたが、最初行つた時には、彼れは、赤坂臺町に住んでゐた。家は汚かつたが、彼れの二階の書齋に洋書がドッサリ置かれてゐるのを見て意外に思つた。

彼れは私を誘つて溜池の東京亭へ連れて行つた。食事をしたあとで、彼れは階下へ下りて玉を突いた。その時私ははじめてキューを手にしたのであつた。

私は、彼れが巢鴨に移轉した後は彼れの家へ足を向けなくなつたが、それまでは頻繁に往來した。最も親しくしてゐた一人であつた。一しよに球戲場へ出掛けたり、圍碁に耽つたこともあつた。絕えず熱烈な議論を聞かされたり、身の上話を聞かされたりした。しかし、私は、世間で云つてゐるやうに、泡鳴の話をさう面白いとは思つてゐなかつた。秋江君の所謂「詰らん坊」といふ感じがすることがあつた。譯の分らん氣焰を吐いて、面白くもないことを獨りで面白がつて高笑ひをしてゐるのが滑稽に感ぜられることがあつた。……でも、氣の置けない、表裏のない親切氣のある人間のやうに、その頃の私には思はれてゐた。小說などに表はれてゐる彼れは、氣の荒い無法者のやうであるが、あれで、案外、人の氣を兼ねる男で、世俗の風習に捉はれてゐる常識家であつた。さうでなければ、私があんなに長く交際を續け得られる筈がなかつた。彼自身の顏があんなに文壇に賞れる筈がなかつた。

二

「耽溺」といふ長編は、小說家としての彼れの出世作で、いろ〳〵な點で、彼れの小說の見本と云つてもいゝ。「坊つちやん」が、漱石全集に於て占めてゐる地位に似てゐる。しかし、文壇の一部の人々に認められたゞけで、世間一般の讀者に受入れられたのではなかつた。「耽溺」も「坊つちやん」も、作家が一生の半ばを過ぎて、浮世の經驗も豐富になつてゐる四十歲近い頃の作品で

あるが、この二つの作品の面目は著るしく異つてゐる。當時漱石は官立大學の教師であり、泡鳴は、月給二十五圓くらゐの大倉商業學校の教師であつたとが、作品に對する世俗の信用を異にした所以で、さながら、書畫骨董の賣立に於て大大名の所藏であるか、一平民の所藏であるかが、買ひ手の心持に影響するのと同樣であるが、作風も、泡鳴のは、漱石のやうに通俗向きではなかつた。卑近な正義觀を含んでゐなかつた。……それに、漱石は、はじめから才氣煥發と評價していゝやうな目醒ましい筆使ひを見せたが、泡鳴の「耽溺」はまだ稚拙であつた。

この小說は所謂「自然主義」時代に現はれたので、その頃には「耽溺」といふ言葉が流行してゐた。その以前には、樗牛の唱へた「美的生活」あるひは「ニーチェ主義」といふ言葉が、卑俗に曲解されて流行してゐたがそれ等の系統を追うて露骨になつたのが「耽溺」といふ用語であつた。小栗風葉にも「耽溺」といふ小說があつた。そして、題目を同うする二小說が比較されて、風葉のは、無反省な耽溺で、泡鳴のは、現代的苦悶のある耽溺であるなどと批評された。

ところが、今讀直して見ると、泡鳴の「耽溺」なんかは、大した耽溺でも、現代的苦悶のあるそれでもないのである。花袋氏の「蒲團」を、今の目で見ると、有振れた甘いものと思はれるのと同樣である。自然主義の幹部として非難の矢を浴びてゐた二氏の如きも、あの頃はまだ初心であつた。彼等によつて創められて、小說作法の常態となつた自己の現實暴露は爾來二十年を經て、次第にすれつからしになつた。彼等の後繼者は藍より出でゝ藍より靑くなつた。

要するに「耽溺」の一篇には、當人の意氣込んでゐるほどの苦悶が含まれてゐるのではないが、彼れは、此處から進んで行つた。自己の熱烈な努力とともに、境遇が彼れを追立てゝ歩を進ませた。

「耽溺」は、國府津の海岸のお寺を借りて避暑してゐた學校の先生が、ふとしたことから、隣家の藝者に馴染んで、それを東京へ連出して女優にしようと企てることが、主要な筋立であつて、その藝者の土地の最負客と、先生たる主人公との間の嫉妬悶着と、先生の貧乏とが、一篇の筋立に味をつけてゐる。……ところで、作者の經驗記錄であるこの小說は、場所を、國府津の海岸で起つたことゝ指定してあるが、その材料となつた實際の事件は、野州日光の町で起つたことなのだ。他の作家ならそれでもいゝが、泡鳴としては、その主張に照らして不徹底であつた譯で、後年の彼れは、そんな小細工はしなかつた。時々思ひ出したやうに「ふと浪の音が聞えて來た」だの「暫く怠つてゐた海水浴でもして」だのと、海岸生活らしい文句を挿んでゐるが、それは取つてつけたやうなもので、全體は山の生活らしいのである。

先生と藝者との關係なんか、いかにもバサ〳〵してゐて、しめやかな情趣と云つたやうなものは、ちつともない。これは、後年まで彼れの作品を一貫した特色である。彼れの作中の男女は、戀を語つても決して蜜のやうではない。「へん、そんなことを知らないやうな馬鹿ぢやねい。役者になりたいからよろしく賴むなんぞと白ばつくれて、一方ぢや、どん百姓か、肥取りかも知れねいへッぽこ旦つくと乳くり合つてゐやあがる」と云つたやうなのが、先生のいつものの口吻である。そして吉彌といふ藝者も「おから『す藝者」といふ綽名の通り色が黑くつて、何だか汚らしい。戀愛小說中の女性は、概して美しく描かれるのを例として、近年の實驗記錄の小說でも、作者の主觀によつて色取られて、それに描かれる女性は、讀者を魅するところがあるのだが、泡鳴

のにはそれがない。醜男醜女の情事を見てゐるやうで、讀者は讀みながら羨望の感じを起すことがない。しかし、小說を娛樂品とせずして、人生世相の眞實の記錄とする立場から見ると、泡鳴の態度に眞實性が多いのではあるまいか。

四十歲近い「耽溺」の先生は、自分より年上の、世帶窶れのした、ヒステリーの古女房に倦怠を感じてゐる。その頃、多くの作家の題材とした「中年の戀」を、彼れも求めてゐたので、ふとした機會で接近した田舍の「おからす藝者」によつてゞも、心の不足を滿たさうとした。しかし、平凡人の浮氣とは違つて、彼れは、自己の抱懷せる人生觀を應用して、この單純な「見ず轉買」以上の何物でもないのに、深刻らしい意味をつけようとした。「墮落、荒廢、倦怠、疲勞——僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、むしろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた」などと云ひ、あるひは、彼れが讀みかけてゐるメレジコフスキーの「先驅者」の主人公、レオナルドダギンチの高尙典雅純潔な生涯を、自分の生涯に比して、「僕の神經は、レオナルドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐる」と云つてゐるところなんか、讀者に「詰らん坊」の感じを與へる。丹念に書かれてゐるが、作者の苦悶が紙上に現はれてゐない。直ぐにこの女を女優にしようと企てるのも滑稽だが、この作者は自分の接近した女は、誰れをでも女優にしようと、大眞面目で考へてゐたのだから妙だ。

「耽溺」一篇の苦悶は、些少の金がありさへすれば、直ぐに解決することであつたが、作者は全心の努力を試みてゐるに關はらず、運命的に窮乏に苦しめられてゐなかつたので、「妻が痩せたのを聯想するせいか、父も痩せてゐたやうだし、今相對する母（繼母）もまた頰が落ちてゐる。僕は家族にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた」と、多少の自責の弱音を洩らしたり、免職を氣にしたり、國府津の負債の仕末をつけるために、妻君の衣類を質入れすることを、「殘忍なほど明確な決心」と云ひ、「僕がわざ〳〵（年上の妻に）若作りさせるために買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、燃ゑるやうな緋縮緬には妻のもとの若肌のにほひがするやうなので、僕はこつそりそれを嗅いで見た」と、花袋の「蒲團」見たいな氣持を現はし、また、「今の妻と吉彌とはどちらがいゝ？」とわれとわが心にたづねて、

「無論吉彌だと、云切りたいのだが、心の奧に誰れか耳をそば立てゝゐるものがあるやうな氣がして、さう思ふことさへ憚られた」と云ふなんかは、當時の泡鳴がまだ初心だつたゝめであつた。さういふところに、所謂人間味なるものがあつて、批評家に喜ばれるのであらうが、しかも、そんな凡庸な人間味に捉はれてゐるやうでは、泡鳴に特異性がない譯だ。すべての感傷主義を打破して自我に徹するところに、彼れの强さがあるのではないか。

彼れを裏切つた吉彌（おからす藝者）が、惡性の眼病に罹つてゐるのを見屆けて、「いゝ氣味だ」と喜んで凱歌を上げるのが、結末になつてゐるが、さういふところは泡鳴の稚氣ある特色である。

三

明治四十二年の末であつたと記憶してゐる。私は目白坂のほとりに住んでゐた。紅葉の頃京都

に遊んで、有馬や大阪を經て故郷へ歸つて、歸京後は新年號の小說に筆を執つてゐた。泡鳴が樺太の事業に失敗して、北海道をうろついて、やうやく歸つて來たと云つて、私を訪ねて來たのはその頃であつた。不思議にも洋服（馬乘洋服ださうだ）を着用してゐたが、外套は着てゐなかつた。頑健な彼れの顏も窶れてゐて、尾羽打枯らした浮浪人のやうな印象が與へられた。五部作の最後の「憑き物」に描かれてゐるやうな極度の窮乏と淋しさを經驗してゐた時なのだが、さういふ事情は、私にはよく分つてゐなかつた。例の通り愚痴や泣き言は、彼れの口から出なかつたから、私は彼れの失敗談も面白づくで聞いてゐた。彼れは、差當つて原稿の捌け口を見つけることと、女を手に入れることゝを志してゐると云つて、「一人は蕎麥屋の女で、一人は教育のある女だが、どちらにしようかと迷つてゐる」と、眞顏で云つた。かういふことをアケスケと云ふのは、世の笑ひ草になるのであるが、しかし、私は、今度彼れの五部作の終篇を讀んだ後で、かういふ彼れの話を思ひ出すと、哂ふ氣になれなかつた。假面を脫した人間の眞實の聲のやうに思はれた。あの場合、どんな女でも側に置かなければ、生存に堪へられなかつたのであらう。そして間もなく選ばれたのは、「教育のある女」たる清子女史であつた。泡鳴は女史によつて救はれたのであつた。彼れは全身を捧げて女の愛を求めたに違ひない。彼女が增長したのは自然の勢ひであつた。

私は、泡鳴全集に收められてゐる日記集を、今度はじめて讀んだ。彼れがある新聞の記者になつて大阪へ行つて、池田に住んでゐた時分の、明治四十四年四月から、大正九年四月まで、日記が續いてゐる。殆んど止切れてゐない。ここにも彼れの熱心と忠實とが見られる。

私が彼れと頻繁に往來してゐたのは、この日記以前のことで、その後は疎遠になつた。「巢鴨日記」の大正二年八月二十一日のところに、「晴、山田（孝）氏、田代氏と共に來訪。正宗（白）氏來訪……」と記されてゐるが　その時が私の方からの訪問の最終であつた。彼れの死んだ時にも、私は東京にゐなかつたので、葬式にも出掛けなかつた。彼れの最後の同棲者とは面識もなかつたので　弔辭をも送らなかつた。

泡鳴の逝去を知つたのは、旅行中に手にした田舍新聞の記事によつたのであつたが、彼れが病氣に罹つてゐたことを全く知らなかつた私は、寢耳に水の感じがした。「あんな强い奴が、そんなに脆く死んだのか」と型の如き無常觀を呼起した。

かつて、ある知人の死について、泡鳴に話した時に、彼れは、「死ぬ奴は馬鹿だ」と云つたことがあつたが、私はそれを思出した。古代神道にも現はれてゐる生々主義は、彼れの信仰であつて彼れは　無內容空虛を意味する「死」を蔑視してゐた。「僕に心熱が無くなつたら死も同樣だから舌を嚙んででも死ぬる」と云つてゐたこともあつた。死後の生命など說く宗教を愚劣極まるものとしてゐた。私は決して同感はしなかつたが　それ等についての、彼れの確信が、口先ばかりではないのを壯としてゐた。そして、死者生前の意志を重んじる慣例に從ふならば、泡鳴の追悼會なんか催すのは無意味であると思つてゐた。

「見ぬもの淸し」といふ諺がある。また「聞いて極樂、見て地獄」といふ諺が、いろは加留多にも出てゐる。私は　東京に於ける泡鳴の住居はをり〳〵覗いてゐたし、その生活振りをも知つてゐたのだが　大阪に於ける彼れの生活は一瞥もしてゐなかつた。それ故「池田日記」にしるされて

ゐる彼れの生活だけは、不斷の泡鳴らしくない床しさをもつて私の目に映じるのである。箕面道にある閑靜な住宅で蜜峰なんかを飼つて、例の「教育ある女」と、文學的生活を營んでゐる有樣が想像される。しかし、それは、直接に彼れの池田に於ける現實の生活振りを見ないで、たゞ日記を通して想像してゐるためなのであらう。離れて想像してゐると、我々文學者の生活は、多くは面白可笑しく過されてゐるやうに思はれるのであらうが、「聞いて極樂、見て地獄」である。

日記を通覽すると、彼れは、一々の原稿の題目と、それの捌け場所と、受取つた原稿料の高とを、完全に書留めてゐる。一圓二圓の零細なものだつて洩らしてゐない。極度の生活難に襲はれてゐた一葉の日記にだつて、うまい物を食べたいために金の欲しかつた子規の病床日記にだつて、收入のことをかう細かには書いてゐない。泡鳴は現實に徹してゐたので、金錢の事が絶えず心にかゝつてゐたのであらう。彼れは金に關して決してだらしのない人間ではなかつた。

彼れは實によく書いた。それも、雜誌社の强請や生活費の必要から、大儀なのを我慢して書いたのでなくつて、つねに意氣込んで筆を執つた。「實行即藝術」「藝術即實行」といふ信仰によつて、勇士が戰場に向ふ態度で机に向つた。……彼れはかつて云つたことがある。「朝目を醒まして新聞を讀んで、愚論愚說に目を留めると、こいつをやつつけようと思つて、寢床を出る」と。

私は、泡鳴の口から出た言葉を、今思出して書いてゐるのだが、私が書くと、彼れ特得の語調がどうも現れて來ない。粗野な彼れの言語や文章にも、他の模し得ない力の響きがあつたのだ。

兎に角、彼れはよく書いた。死後間もなく、豫約出版の形で出た泡鳴全集十八卷が私の座側に並んでゐる。しかも、彼れの一生の文章が悉く此處に集められてゐるのではない。私の取扱つてゐた讀賣新聞文藝附錄に頻繁に揭げられた彼れの論文の多くは、この全集の目錄を搜しても見當らない。……彼れはやうやく世に重んぜられかけた時分に死んだのだが、若し今まで生存してゐたなら、どれほど多量に生産してゐたことであらう。老いても氣力の衰へさうでなかつた彼れは「全集」として、五十卷にも百卷にも達するほどの製作を敢てしたかも知れない。

日記のうちに、原稿を××社へ送ると書いてあつても、必ずしも××社から寄稿を依頼されたのではなかつた。だから、××社から原稿返るといふ記事が多い。採用されないで突返されたことを意味してゐる。しかし、そのために氣を落すやうな彼れではなかつた。編輯者に對して女性的の怨みを抱くやうな彼れでもなかつた。「こいつやつゝけよう」と思つて、書いた抗議文を、未知の新聞社長や名士に送つて、相手にされなくつてもしよげなかつた。

日記によると、彼れの得た原稿料の高は甚だ輕少である。書きおろしの大論文集が、わづか五十圓ばかりで取引されたりしてゐる。これではいくら書きなぐつても貧乏する譯であつて、さすがの彼れも、文學ではろくな生活は出來ないと、文學に見切りをつけて、樺太の蟹の鑵詰業を企てる氣になつたのだ。これが成功してゐたなら、實業家岩野美衞で羽をのばして「おからす藝者」や「北海道のすべた女郎」によつて、辛うじて耽溺慾の滿足を試みないでも、美妓を蓄へた妾宅の二三軒を持つて、彼れの好きな豐太閤や伊藤博文を氣取つてゐたかも知れなかつた……しかし、失敗したればこそ「放浪」や「斷橋」や「憑き物」のやうな名作が現はれたのだ。

彼れが樺太へ出發する少し前に、私を東片町の陋宅に訪問したことがあつたが、その時、私の知人である株屋が座に居合せた。株屋は、泡鳴の計劃を聞糺した上、

「それは止した方がいゝね。そんな危いことをしないで、文學者は文學をやつた方がいゝぢやないか」と、眞面目に忠告した。私も同感の意をあらはした。

二三年後に、その株屋に會ふと、

「いつか君とこで會つた蟹の鑵詰をやると云つた男はどうした?」と、彼れは訊ねた。

「無論失敗して、一文なしで歸つて來た」

「だから、おれがよく云つて聞かせたものに」と、株屋は冷笑した。

しかし、今考へると、泡鳴の樺太行は文學者として內容を充實させるための行爲であつたものだ。その樺太行の失敗は表面だけのことで、內面的には決してさうでなかつた。夏目漱石は、書齋にあつて、傑れた天分をもつて人間の心理の研究をして「心」や「行人」や「明暗」などの名作を出した。しかし、泡鳴が漱石のやうな生活を續けてゐたなら、粗雜な凡作しか世に出せなかつたであらう。北海の風雪にぶたれながら、奮鬪をつゞけてゐるために、彼れの作品に自から深さが加はつたのである。

四

泡鳴の評論には獨り合點が多い。文章もまづいので讀みづらい。しかし、日本の文學者には珍らしく、確固たる自己の哲學を持つてゐるのに、私は好感を寄せてゐる。浮世の風波に對して、この哲學が彼れに取つては、一枚の板子ともなり、笠とも簑ともなつてゐた。彼れは日本主義を皷吹し、極端な自我主義を主張してゐたので、今日流行の思潮とは相背いてゐる。今なほ生存してゐたなら、さぞかし多勢を相手に、死に物狂ひの奮鬪をするであらうと推察される。

彼れの論文では「刹那哲學の建設」と云ふのが、最も要を得る。彼れの意見としての內容が充實してゐる。チグハグなところが少い。文旨も可成り明晰である。

「單純に究理のための究理は、單純に藝術の爲めの藝術と同樣、人生にあつても、なくてもいゝ專門である」

「所謂人類根性の奧には、神とか、正義とか、博愛とか、平等とかいふ、手段でなければ、空形式の俗習思想にからまれてゐるものがある。……個人個人の關係に於て、弱者の獨立存在は必要と思はれない。從つて、その不必要な弱者の獨立を助けようとか、敎へようとか、救濟しようとかすることも亦不必要である。しかし、世間が兎角、その不必要なことに最もらしい理由を附して、これを行ひたがるのは俗習思想に拘束されてゐるからである。社會主義、世界主義、正義、博愛、慈悲、犧牲等の馬鹿々々しい觀念はすべてそれから起つてゐる。この諸觀念の有害無害はさて置き、根底に於てまことに淺薄なものではないか。宇宙はたゞ優强者が弱劣者を吸收して行くその足跡を印した名殘りだ。優强者の存在が乃ち宇宙である。人類の存在もこの優强者を維持して行くところにある。觀じ來れば、優强者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來た」

これ等は珍らしい說ではないが、彼れはそれを日々の行動にも、文學の描寫論の上にも、及ぼした。彼れが自然主義者のうちでも、力のない客觀說を排し、主觀の燃燒を說き、描寫にも一元描寫を說いたのも、その結果であつた。加藤弘之は、早くから「强者の權利」を主張してゐたが、

當時の日本の通俗思想と妥協を試みることは忘れなかつた。泡鳴は他の哲學者の物笑ひを顧みないで、一本調子で徹底しようとした。ニーチェは超人を說いたが、泡鳴は、さういふものは外延的空想として排斥して、すべて、現實と自己とに於て徹底しようとした。

「佛敎の所謂小乘にせよ、大乘にせよ、僕等から見れば、五十步百步の相違だけであつて、孰れもまだ眞理を外的に追つてゐた。しかし、眞理は自己以外に無い。自己の誠實な努力と經驗との外に求めやうは無い。」

「僕等は作品が永久に亘り生命であつても、なくつても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那に於て、人生全體の幻影が特殊の描寫に現はれなければならない」

「物質的人生觀を有するもの等の作は、實質、すなはち、內容が空虛でなければ稀薄であるから、情けないことには、まづ周圍、運命などいふ空想的道具を持つて來なければ埋め合せが出來ない。これは實に情けないことである。運命や周圍と云ふものは出て來る人物の活動若くは思想に先づ入つてゐなければ駄目だといふことを知らないのだ」

優强者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展させるのだといふ彼れの哲學、心理は自己以外に無いといふ彼れの人生觀から出立して、彼れは文學に於ても刹那の描寫に於ても人生全體の幻影の現はれるのを志した。運命も環境も、出て來る人物の活動若くは思想に入つてゐることを期した。

五

彼自身の作品は、果してその哲學その文學說を具體化してゐたであらうか。

私は今度、彼れの五部續きの長編である「發展」「毒藥女」「放浪」「斷橋」「憑き物」を通讀した。

小說の題目からして、泡鳴式に殺風景である。「毒藥女」なんて、意味を成さないいやな題である。全集にはかういふ題をつけられてゐるが、この小說はたしか「毒藥を飲む女」として、中央公論に出てゐたものであらう。全集編纂者が體裁上字數を縮めたためか、あるひは何かの都合で、勝手に改題したのであつたなら、無責任である。(全體この泡鳴全集の編輯振りは、甚だ不忠實である。この浩瀚の書物に、總目錄がついてゐない。著者の年譜もついてゐない。小說の解題も、どういふ譯か、第一卷についてゐるだけだ)

それに「毒藥を飲む女」といふ題目も、低級な感じのするいやな題である。薄々記憶するところによると、作者は、例の無頓着から、作中の女主人公の名前か何かを一篇の題目としたのであつたが、瀧田樗蔭が、讀者の注意を惹くために改題したのださうだ。「××する女」とか「××する男」とかいふ題目が、あの頃ちよつと流行した。

「發展」その他は「耽溺」の後を受けた作者の自傳小說である。父親が病死して、息子の義雄が家を繼いでからのことで、波瀾の多い數年間の事が義雄を中心として叙述されてゐる。小說家が大きな意氣込みをもつて長編小說に從事しようと思立つのは、大抵作者の自傳を書くことであるが、自然主義勃興以來の日本文壇特有の慣例になつてゐるので、泡鳴もその風潮に習つた譯である。しかし、彼れの如きは、その主張から云つても、文壇の常套に從つて、義雄その他の小說名を用ひないで、すべて實名で通したらよささうに思はれる。彼れの排斥する遊戲分子が、そんな

ところにまだ名殘りを留めてゐる。

しかし、この五篇は、緊張してゐる。貧乏と情慾に苛まれながら奮闘してゐる一箇の勇士の面目が躍動してゐる。「毒藥を飲む女」は、中央公論に掲載されたため、文壇の注意を惹き、小說家としての泡鳴の價値を重からしめたもので、そのために中央公論の彼れに拂ふ原稿料が少しばかり値上げされたことは、日記を讀むと推察されるが、しかし、五部作のうち、この一篇が特にいいのではない。五篇を通じて、彼れの通つた世界が開展されてゐるのだが、他の四篇は、東西の新聞などにきれ〴〵に出されたために、多くの注意を惹かなかつた。

無批判な批評家は、島崎藤村でも岩野泡鳴でも、自然主義の作家として、一つの檻の中に入れてしまう癖があるが、この二人は作風が非常に違つてゐる。田山花袋は一面は藤村に似て、一面は泡鳴に似てゐる。

藤村氏はかつて、「云ひたいことを何んでも露骨に云つてしまう人間は思慮が淺い」といふやうなことを、何處かで書いてゐたが、泡鳴こそさう云つた人間で、「詰らん坊」とも思はれる所以で、含蓄を志してゐる藤村氏と非常に異つてゐるのである。しかし、「春」以來の藤村氏の幾つかの生活記錄を通讀して學ぶところの少くなかつた私は、氏とは性癖を異にし作風を異にしてゐる泡鳴の五部作を通讀しても學ぶところが少くなかつた。

私は、心熱を燃やして奮闘してゐる泡鳴の五部作を、映畫に見てゐるやうな態度で傍觀した。作者が自慢してゐるやうな一種特別の人間を見てゐるやうな氣持もするし、世間通有の人間を見てゐるやうな氣持もした。悲慘な感じもしたし、滑稽な感じもした。餓えと色とに惱まされてゐる汚らしい生物が、檻の中をのたうち廻つてゐるのを見るやうな氣もした。泡鳴の文章は粗野で、色彩なんかまるで缺けてゐる。長篇を通じて、感傷的の文字は殆んどないと云つていゝ。優美なところなんか、藥にしたくも無い。小說好きの婦女子に好まれる氣遣ひは全くないのである。

しかし、私には面白かつた。あの粗野な文章にも一種の力が籠つてゐる。あの野蠻な會話に、他の作家の模し得られない力と、一種の調子を持つてゐる。私は今度幾編を讀みつゞけてゐるうちに、泡鳴の小說の會話に、何とも云へない無技巧の妙味のあるのをはじめて感じた。漱石作中の會話が巧みであるとゝもに、作られたわざとらしさと、もどかしさを感じさせるのとは異つてゐる。

古女房に愛想が盡き果てゝ、妥協の餘地のない嫌惡の感じは、至るところ木地のまゝに出てゐて、他の大抵の作家の試みるやうな言譯をしてゐないのが、私には面白い。子供に對してさへ殆んど愛情を寄せてゐないのが、日本現在の作家の作品のうちでは類例を絕してゐる。子供の死去の通知に接しても、葬式の煩はしさを感じるばかりで、哀れなんか感じないところにも、私は特異の味ひを感じた。

「人を呪へば穴二つ——早くあの千代子（妻君）がくたばつて呉れりやア」と願つてゐたのに、意外にも、千代子が死なないで赤ん坊が死んだ。義雄は、龍土會の忘年會の幹事としてその夜出席しなければならないのだが、兎に角死兒の處分もしなければならなかつた。それで妾宅（と云

つても、粗末な間借り住ひ）を飛出して、病院へ駈けつけると、赤ん坊が死んでゐる上に、他の子供もみんな病氣で入院してゐた。妻君千代子は、目が落込んで、頰はずつとこけて、顏全體に血の色とても少しも見えず、變挺（へんてい）な陰陽（おんやう）學なんかに凝つてゐて、憂ひと呪ひのおも影のやうに、義雄の目には映じてゐるのだが、かういふ夫妻が、死兒を前にしての感情の交錯や會話のやり取りは、凡作家の筆と違つて、名優の舞臺を見るやうに、私には感ぜられる。「毒藥女」中の數ページを見よ）

「死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいゝくらゐのものだ」

「どうせあなたが死ぬ〳〵と云つてたから、あの子もその通り死んだのでしようし、うちには誰れも人情にあつい人がゐないのだから……まあ、とに角、死んだ兒の顏でも見納めに見ておいでなさいよ」

「血の氣のなくなつた顏などア、手めへのを見てゐりやア充分だ。手めへマイナス氣ちがひイタオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなものも、もう何度も見飽きてらア」

棺桶を送出しといて、義雄は、戯者などのゐる賑やかな龍土會の宴會へ出掛けるのだが、かういふところや、これに似寄つた他の叙述を讀むと、私はしば〳〵四谷怪談を見てゐる時と同じやうな感じがすることがある。義雄は民谷伊右衛門に扮して動いてゐるやうだ。彼れの目に映る千代子は、毒を飲まされたあとのお岩である。

南北の描いた舞臺は、凄慘であるとゝもに茶番氣もあるが、泡鳴の描いた小說の光景も、凄いうちに滑稽味が伴つてゐる。民谷伊右衛門が極惡非道の結晶ではなくつて、人間の弱さを有つてゐる如く、義雄も苦悶の哲理に徹しようと努めながら、まだ至らないところがあつて、そこから滑稽味が流れ出るのである。

棺桶を病院から送り出したあと、千代子がすすり泣きして袖を目に當てゝゐるのに、義雄は顏を背けて、愁ひの色を隱して、氣を無理に持直して考へた。死に行くものは自分に關係がない。——亡父でも自分に殘して呉れたのは、たゞ梅毒もしくは痔と僅かな財產だけだ——千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

「さうだ、どうしても、わが國の極北へ行かなければならない。——でないと、あいつ、意志が弱いのだ、する〳〵と吹聽ばかりして、何も着手しないといふ、友人間のそしりを脫することが出來ない」

この伊右衛門が、友人の思惑を顧慮するなんか、自から固持してゐる筈の「悲痛孤獨の哲理」に徹してゐない證據であるが、四谷怪談の伊右衛門にもさういふ弱點がある。しかし、そこが、非道人にも人間味が洩れてゐるところだと、讀者や見物の道德性が滿足するのかも知れない。

島崎藤村氏の「芽生」は、幼兒の死を描いた小說であるが、それと、これと比べると、作者の態度も筆使ひもいかに烈しくちがつてゐるか。藤村氏のは人間恩愛の至情を寫してゐて、讀者の涙を誘ふのである。父は子の死に對して、「我もまた、何時までかあるべき……」とか、「芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た」とか、溜息を吐いて感傷語を吐いたりしてゐる。泡鳴の方

では、「もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつ（他の病兒）も今のうちに死んだ方がましだのに」と、病人の顏を見ながら云つたり、これから、「自分のこれまでの失敗と不評判とを取返して自分の同時にまた全人的發展なるところの社會的發展をも實現することが出來るといふ希望が輝いた」と考へたりしてゐる。藤村は至純至情の人間性に浸り、泡鳴は、「死んだものは掃き溜へでもほうり込め」といふ傍若無人の意氣で進んだ。

泡鳴はフアウストなどを無內容な古典として輕蔑してゐるが、フアウストが、彼れの爲めに罪を犯したマーガレツトを牢獄に見舞つたあと、彼女の苦惱なんかはまるつきり忘れたやうに、百花咲亂れる野に横はつて、山を仰ぎ虹を見て人生を面白さうに夢見てゐるのは、泡鳴の化身である義雄が、惱める妻子を踏みつけて極北の事業を夢見てゐるのと、同樣の心意氣ではないだらうか。過去を拋つて積極的に進む意氣は似寄つてゐる。フアウストが無內容である筈がない。伊右衞門の心が泡鳴の心に內在してゐたのと、メフイストの心がゲーテの心に內在してゐたのと同樣である。たゞゲーテは優美華麗な詞句を用ひ、泡鳴は蠻力で書通したのがちがつてゐるのである。

しかし、貧乏と蠻力とは、世に迎へられないので、「芽生」の人々は、醫師や看護婦に好意をもつて柔しく取扱はれてゐるのに、泡鳴の小說中の人物は、ぞんざいに取扱はれてゐる。その光景が、粗野な描寫のうちに、自から浮んでゐるのが面白い。そして、義雄自身は、そんなことに心を痛めたり、メソ〳〵社會の不平を洩らしたりなんかしてゐないのである。

貧乏や不遇によつて氣を落さないのは、泡鳴の小說を貫いてゐる一特色であるが、そこが、一方から云ふと、小說讀者の心を魅惑しない理由になつてゐる。貧乏や死別などの人間苦をうつしても、泣顏を見せて讀者の同情心に訴へる方が喜ばれるのである。

義雄が終始一貫して、いかなる場合にも、千代子をお岩あつかひして、寸毫の讓步をもしないのも、他の作家の作品と異るところである。そして、千代子は作者から正當な取扱ひを受けてゐないのであるが、有樂座の音樂會へ義雄とその妾のお鳥とが出掛けてゐるのを察して、自分もそこへ行つて、二人を惱ますところから、二人の間借住ひを襲ふあたりは、嫉妬に狂つた女の動作や心理がおのづからよく描かれてゐる。「困りますから、早く歸つて下さい。子供が云ふことを聽きません。どうか、お願ひですから歸つて下さい。ほんとに、おねが――」と、往來の、乞食のこもの側から、窓を見上げて叫ぶあたりは、讀者に哀れをさへ傳へてゐる。女の嫉妬と義雄がお鳥と他の男との關係についての嫉妬など、醜く、汚らしく、しかし、生々（なま〳〵）しい實際を現はしてゐるのは、「心」や「行人」に深く追窮されてゐる嫉妬の心理描寫が、上品であり藝術的で、現實味を缺いでゐるのと違つてゐる。……藝術と云ふものは、繪畫でも小說でもいかなる醜い題材を描いても、それに接する鑑賞家に、不快な感じを起させるようではいけないので、泡鳴のを讀んで行くと、彼れに藝術的天分に何か缺けたところのあることが察せられる。それに、粗野で無愛想なお鳥のモデルであつた女は、かつて著者に連れられて、例の「メリンス無地の牡丹色の被布」を着て、一度私の家へ訪問したことがあつたので、讀みながら、そのいやな姿が目について私の興を醒ますのである。

泡鳴は身を以つて小說をつくつてゐたので、そこに眞實の强みがあつたのだが、自己に直接に

關係のない材料を取扱つたものは、どれも大抵は、蕪雜で獨り合點で拙劣だ。戯曲のやうな客觀的才能を要するものに、傑作のないのは當然である。

彼れは、大津事件の津田三藏を題材として、一篇の小說を書いた。かつて伊藤公を小說に書かうと云つてゐたから、「そんなものが君の腕で書きこなせるだらうか」と、私が云ふと、「そりや書けるさ」と、例の自信を現はして、熱海の樋口で聞いたことがあつて、それによつて、伊藤の內面生活に喰入ると云ふやうな抱負を述べてゐた。剛情な自信家であつた彼れも、一面非常な輕信家であつた。容易に他人の口車に乘せられるのであつた。オキシヘラーとかゞ健康にいゝと云つて、蚓りにその提灯持をして、私に勸めたこともあつたが、その價値について根據ある知識があるのではなかつた。彼れはかつて、旅先から讀賣新聞に、彫金術に關する長ったらしい論文を寄せたことがあつたが、それは變なものだつた。それを讀んだ專門家は嘲笑してゐた。あとで泡鳴に訊くと、彼れは、溫泉場で知合ひになつたある彫刻家（それは、名も知れてゐない男）から意見を聞かされて、それを唯一の根據として堂々たる論文を書いたのであつた。日常の座談にも、人の一言を盲信していきり立つことがあつた。……樺太の事業に失敗したのは當然であつた。

六

樺太で雜作なく失敗して、すゞ〳〵北海道へ戻つて來た彼れは「思ひ返へせば、彼れは人を信じ過ぎてゐた」と、やうやく目が醒めたやうに反省してゐる。

「放浪」「斷橋」「憑き物」は、一文無しで孤影悄然として北海道をうろつきながら、まだ一分の未練を事業に對して殘してゐた間の經驗記錄で、泡鳴一代の傑作である。私は、以前きれ〴〵に讀んでゐたのを、今度はじめて通讀して、豫想外の興味を覺えた。藝術として缺點だらけであるにしろ、人を動かす力は、明治文學中の何人にも劣らないのである。

東京の雜誌二三冊と手帖と、不斷着の袷と袷羽織とメリヤスのシャツとを入れた風呂敷包一つを總財產として抱へて、札幌へ戻つて來た田村義雄は、宿を取る費用を持つてゐなかつたので、ある友人——友人と云つても、十年も會はなかつた昔の同窓で、樺太渡航前にちよつと立寄つただけの間柄——の家のガラス戸を開けて「歸つて來ましたよ」と、無雜作に入つて行つたところから、小說ははじまつてゐる。

その家は、薄給の教師の家だから、「寄食される方も迷惑だし、寄食する方も心苦しい譯である。東京の左ほどでもない文學者も田舍へ行くと、事々しく歡迎されるのが、常例であるが、義雄は無一文の淋しさを心の中に潛めながら、賑やかな歡迎を受けた。これで直ぐ歸京したなら、一ぱしの名士として記憶を後に殘して、襤褸を見せなかつたのだが、失敗したまゝ、何もいゝ當てのない東京へ歸るのが無念さに、この北地で何かし出かさうと考へながら愚圖々々してゐた。

當て事は次から次へ外れて行く。敬遠されたり冷遇されたり愚弄されたりしながら、弱さを見せまいとする彼れの奮鬪は、私には、有るがまゝに見た人間生存の眞相見たいに思はれる。「世界に向つて大貿易を開くのも、一國をまとめてその手中に繰縱するのも、自己一身に立籠つて本能の無飾的な發展を全くするのも、事業並びに實行としては、決してその大小と高下とはな

い」と云ひながら、さすがの彼れも、現在の見窄らしい放浪生活に堪へられなくて「しかし、思ふまゝに、外面的な實行にも、もつと自己を發展して見たい」と興奮してゐる。

後藤男爵や、法相何某や、伊藤公爵などが渡來して、全道の人氣を湧立たせてゐる間に、內面的英雄たる彼れは、路傍の乞丐兒の如く人に顧みられなかつた。せめてこの機會に、北海道の巡遊だけでも試みたいと志しながら、乘車券と些少の旅費とを新聞社から得るために、いろ〳〵な屈辱を經なければならなかつた。彼れがやうやく巡遊の途に上つて、馬なんかに乘つて奧深く進むところは、痩馬に跨りながら、騎士氣取りで魑魅魍魎の退治に向つてゐるドンキホテの後姿が連想される。

彼れは、札幌に於て中學校の演說會に招かれたが、その頃、ハルピンに於ける伊藤公爵の凶變が傳はつてゐたので、彼れは演壇に立つと、まづ伊藤公の略歷から說きはじめた。しかし公について語るのは自分自身を語ることであつた。熱心が加はつて來るに從ひ、われを忘れるほどの大聲をつゞけざまに發し、それが講堂中を振動させた。主會者が氣遣つて「あまり大きな聲を出すのは身體に惡いよ」と注意したほどであつたが、滔々二時間つゞきで自己の哲學を辯じ立て「おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙その物だ」などと叫んだ。講堂の聽衆はどつと笑つた。義雄は大に怒つて、人々の謝つて止めるのも聞かず、鳥打帽子を忘れたまゝ驅け出した。

そのため、彼れは周圍の知人から、發狂したとの噂を立てられた。ある知人は、彼れの精神狀態を檢査するために、いろ〳〵な質問を呈したりした。知人と彼れとの間の問答のあたりは實に面白い。セルヴンテス作中の主人公の宗教的問答や氣餞が思出される。小說讀者よ、ここを讀んで笑ふ勿れ。笑ふのはいゝが決して冷笑すること勿れ。愚弄嘲弄のうちに辛うじて食を得て、志すことのすべてが鵲の嘴と喰ひちがつてばかりゐる主人公が、毅然として自己の所信を守つて、愚痴を云はず卑屈な態度を見せなかつた幾ケ月間の放浪の旅に於ける生活振りを顧みよ。哂ふにはあまりにいたましき人の世なのである。

知人が冷語を殘して去つたあと暫らくして、つか〳〵と入つて來る足音がして「わつ」と彼れの枕もとに泣伏したものがあつた。それは、例のお鳥であつた。

「どうしたんだ」彼れがびつくりして首を上げると、

「き、氣違ひになつたと云ふぢやないか」と、すすり泣きだ。

「馬鹿！だ、だれがそんなことを云つた？」

ところで、この二人の男女は、互ひに深く相愛し合つてゐるのではなかつた。

義雄は、この放浪の旅に於て柔しい愛に饑ゑてゐた。物足らない淋しい心を異性によつて慰められたかつた。たま〳〵手に入つた零細な原稿料などを袂に入れて、あるひは知人のお伴になつて、土地の遊女屋の客になつて、時には馴染の女の手管にやす〳〵と乘つていゝ氣になつてゐたこともあつたが、それだけでは、滿足出來なかつた。ところが、他人の家や安下宿屋の薄い冷たい夜具の中で　女欲しい思ひを凝らしてゐると、彼れに多少でも愛憎の拘はりを見せて呉れる女は、天上天下、例のお鳥一人であつた。東京にゐるお鳥の影だけが、彼れの空想に徂徠してゐた。で、その女を知人に對してのろけの種にしたり、その女に嫉妬を籠めた手紙や現狀の報告書を送つたりしてゐたが、つひにお鳥を呼寄せる手筈がついた。

「あの皮膚の美しさ、やわらかさ、敷島（遊女）などのとても及ぶところでない」と頻りに空想を逞うして悦しがつてゐたが、しかし、彼女は、彼れの惡疾をうつされて不具同樣になつてゐて、屢々、「元の身體にしてかへせ」と、彼れに迫つてゐた女であつた。「青年時代のやうな變愛神聖論者でも、内容の空しいのを知らないやうな理想家でもなくなつて、靈肉合致の戀を欲する」彼れに滿足を與へるやうな女ではなかつた。

でも、彼れは、さういふ女をでも呼寄せて傍に置かうとした。彼女の方でも、病身のために自活の道がなくなつて、彼れをでも手頼らなければ、どうしようもなかつたので、遙々北海道までやつて來たのだ。

義雄の寄食してゐる他人の家で、他人夫婦の目の前で二人は一別以來の顏を見合せたのだがその最初の會話はかうだ。

「早く病氣を直せ。病氣さへ直れば、もうお前の世話などにならん」

「まだ直らないのか」

「ふん。……醫者にも行けなければ、直る筈はない。あんなに何度も手紙で云うてやるのに、……手紙の意味が分らん人でもなからう」

「そりや、少くとも、お前よりは讀めるよ」

「讀めるなら、なぜその通り療治代を送つて呉れん？」

「送るにも、金がなかつたのだ」

彼れが知人にのろけたり、淋しい浮世の唯一の伴侶として心待ちにしてゐた女は、會つて見ればかうであつた。傍で見てゐたその家の夫婦は可笑しさやら氣の毒さやらで、「さう喧嘩にばかりなつては御相談も出來ますまいから、仲直りをなさつたらどうです？」と取做さなければならなかつた。

「いくらおとなしく話さうたつて、あの苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をされてゐては」と、男は云ふ。

「苦蟲でも何でも、病氣を直して呉れたらよろしい。病院へ入れて貰ふ。入院さして貰ふ」と女は叫ぶ。

さうかうしてゐるうち、義雄は無理工面をして女を入院さすことにした。しかし、その入院はみじめなものだつた。東京の女として周圍の人達にほこりたいと、女らしい虚榮心を有つてゐた彼女は、却つて日に〳〵屈辱を忍ばなければならなかつた。遙々訪ねて來た甲斐がなかつた。それで、毎日沈み切つた顏してゐて、義雄に會ふと、きつと、泣くか怒るかするより外なかつた。

ところが、天長節の日、雪晴れの午後、彼女は珍らしくニコ〳〵した顏つきして、病院から義雄の下宿を訪ねて來た。

「天長節が嬉しいのか」

「そんなことでもない。別に嬉しいことがあるのさ」

彼女の廂髪の前髪に蒔繪のゴム櫛がささつてゐた。「林檎を送つてやるからと云ふて、東京の友達から送つて貰ふたのぢや……ゆふべ屆いた」

彼女の機嫌のいゝのは、うるさくないだけでもいゝと義雄は喜んだが、この二人の男女が睦じ

く話合つたのは、この時だけであつた。數卷を通じて出沒してゐる彼女に對して、讀者がその心根をいじらしく感じて親しみを覺えるのはこの所だけであると云つていゝ。……ところが、それも暗黑の雲間からちらと洩れた一すぢの光に過ぎなかつた。

二人は仲のいゝ折をはずさないで、市中の散歩に出掛けたのだが、結果は幻滅に終つた。途中で彼女の身體が痛んだので、知人の家へ寄つて、義雄は持前の氣焰を吐いて時の經つのを忘れてゐたのだが、「葡萄色の唐縮緬羽織」のお鳥は、其家の妻君の「小豆縮緬の羽織に黃八丈の小袖」を着てゐるのに目を注がないではゐられなかつた。自慢のゴム櫛なんかを喜んでゐる自分がみじめになつた。

日暮頃に知人の家を出て歸途に就くと、間もなく、お鳥は突然「うそつき。畜生」と叫んで、義雄を亂暴にも突飛した。それから一しよに彼れの下宿に歸ることは歸つたが、二人の間の暗闘はつゞいた。

「病院へ歸るなら早く歸れ」と彼れが云ふと、

「歸つてる留守に、今夜、逃げてしまふんだらう」と、彼女が云ふ。

彼女は病氣のまゝ、知らぬ他鄕に打やられるといふ恐れを抱いてゐる。彼れは、知人等が彼れの歸京費を醵金して歸らせやうと噂してゐることを聞かされて、「北海道の新聞記者の成れの果て」のやうなみじめさを自覺したりしてゐる場合であつた。貧しいながらもこればかりは手放さなかつた紀念の銀時計さへ、人に騙されて持逃げされてゐた。

互ひにおのれの思ひに耽つて默してゐたが、ふと、女は、「あ、あッ」と叫んで突立ち上つた。肉體の痛みを感じたのである。

「どうした?」彼れもはね起きた。

「死の!一しよに死の!」

彼女の顏と聲とに惹かれて、彼れも咄嗟に死ぬ氣になつた。

二人は、死に支度をして出て死場所を捜した。ここが、五部作を通じてのどん詰りであつて、人の世の悲慘なる滑稽がひし〳〵と私の胸に迫るのである。二人はちつとも愛し合つてはゐないのだ。近松の常套的道行とは如何にちがつてゐることか。二人とも默々と歩いてゐる。義雄は、妻のことは云ふまでもなく、子供のことだつて些しも思浮べてゐない。たゞ昔の戀人と吾妻橋の上で生別れをしたことなんか思出してゐる。いよ〳〵死に臨んだ間際に自分の胸の煮えくり返るやうに、お鳥に對して憎惡を感じたりしてゐる。二人は互ひに他を憎みながら一しよに死なうとするのである。

でも、二人は抱合つて、薄暗のなかを、鐵橋から飛下りた。しかし、彼等は、冬中の寢雪として川床に積重つた雪の上に落ちたのであつた。彼等の決心はそれで消えてしまつた。川床から札幌へ出るには、細い小川を渡らなければならないので、彼れは女を背負つて、編み上げの靴のまま流れをざぶ〳〵渡つた。四十歲近い男と二十二三の女だから、お半を肩に長右衞門である。雪は降りだして次第にひどくなつた。

川を出て氣がつくと、彼女は、大切なゴム櫛を鐵橋を飛下りる時に落してゐた。

「身代りになつたのだらうさ。また買へばいゝ」

「金がないのに、買へやせんぢやないか」
「そんなことはないだらう」
「買へやせん／＼。探して來い」
「馬鹿を云ふな」

型の如き心中ではないので、人の世の悲慘なる滑稽がひし／＼と私の胸に迫るのである。若し彼等が目的を遂げてゐたならば、彼等の死について、型の如き想像がめぐらされてゐたのであらう。

私は、泡鳴のこれ等小説を、他の明治の傑作に比べて見た。鷗外の「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」などには、人間の悲喜哀歡の心理について擦摩臆測を逞うしないで、ある時代と、そこに生存してゐた一個人の外觀の行動を叙してゐるだけで却つて、ある人間の眞面目が浮び出てゐるやうに思はれた。漱石の「心」などは、ある心理の追窮を盡くしたものである。この二作家は、明治の作家中の最も學究的の作家であつたが、一生かゝつて磨ぎ上げた彼等の心に、晩年に於て映つた人生は、如上の作品に於て現はれてゐる。その目とその心とその筆とが渾然として、藝術家として の彼等の特色を現はしてゐる。また有島武郎の「ある女」は、女性の强さ弱さ美しさ醜さを、微細に豐かなる文章によつて現はしてゐる。これ等に比べると、泡鳴のは著るしく粗野である。一見非藝術至極である。しかし、その非藝術らしいところに、彼れ特得の生き／＼した心熱主義の藝術があるのである。

七

「自分は蛇を好む。蛇の直立したのが人間だ」と、泡鳴は何處かで書いてゐる。しかし、彼れの云ふところの蛇は、シエレーが好んで用ひたやうな壯嚴美を現はすためのそれではなかつた。それで、五部作を通じて現はれてゐる彼れは、直立してゐる蛇の凄さと滑稽さを帶びてゐるが、「憑き物」以後の彼れの自傳小説は、よつぽどふやけてゐる。ぬらりくらりと匐つてゐる蛇で、直立してゐるやうな緊張味が乏しい。前者のいゝのは 樺太 北海道の慘苦が彼れを鍛えたためであらう。

在來の傑れた文學に比べると、彼れの小説はいかにも無作法である。人間に具はつてゐる藝術慾は、かういふ者では滿足し切れないので、多くの讀者は泡鳴の作品には面を背けるであらう。ある讀者は興味をもつて讀んでも、所謂「詰らん坊」の行爲の記錄としての興味であらう。しかし、虛飾を剝いで見たら、この「詰らん坊」の小説に、自己や周圍の人々の眞相について思當るところが少くないだらうと思はれる。少し馴染んだ札幌の遊廓の女が「あなたほど正直な人はない」と感心してゐる。泡鳴は、才氣は乏しかつたが、物事を誤魔化さうとしなかつた。頭腦は不聰明であつたが、讀者に媚びようとはしなかつた。おれはかうだと臆面もなく自己を出してゐる。後人にどう思はれようとも、彼れは作家としては悔ひるところのない生涯を過した譯だ。「首が飛んでも動いて見せるわ」と云つた伊右工門の意氣は泡鳴にも見られた。

北海道から歸つて來て私を訪ねて來た時には、彼れの「痩せ方や顏容の蒼白かつたのは、殆ん

ど人間らしくなかつた」と、中澤臨川の云つてゐる通りであつたが、私との交際が疎遠になつた後年の彼れは、顏がつや〳〵しくなつて元氣がよかつた。次第に世に認められるやうになつて、生活もいくらか豐かになつたらしかつたが、それが次第に彼れの作品を鈍昧にしたのではないだらうか。有名な「征服被征服」なんか、獨り合點の、いゝ氣な小說である。

泡鳴の新體詩をところ〴〵讀んだ。殆んどはじめて、彼れの詩に接したと云つていゝのである。史詩「豐太閤」は、彼れの崇拜してゐた英雄を唄つてゐるに關はらず、通俗な豐公感を述べたに過ぎない。舊套的七五調がそこでは八七調となつてゐるにしろ、それを單調につゞけて行くのが、昔流行してゐた新體詩の調子を思出させる。私は、かういふ新體詩がきらひであつた。それで、詩の惡口を新聞によく書いてゐたので、泡鳴が最初私を突然社に訪ねて來た時にも、私の無理解な罵倒について不平を述べてゐた。

しかし、今度「戀のしやりかうべ」と題した詩集に收められた小詩を讀むと、どれも面白い。小說では蕪雜さ汚らしさ無器用さが目立つが、これ等の詩にはさういふものがなくつて、從つて反感なしに私の心に入つて來る。言葉と感じとが一つになつて響いて來る。現實の生活苦を通つて來た人の詩である。「死外七編」なんか、ことに愛誦に價ひしてゐる。泡鳴は本來、小說や戲曲の作家としてよりも詩人としての天分を豐かに有つてゐたのではあるまいか。小說「發展」のはじめの方に書かゝれてゐる父親の死亡前後に於ける作家の氣持は、却つてこれ等の詩に、餘計なまぜ物なしに、よく現はれてゐる。作者の氣持と周圍とが渾然とした象徵になつてゐて、わざとある物を對立させたやうな、作られた象徵詩ではない。「胸のきしめき」「火葬」「庭木の刈り込み」などからは、在來の漢詩和歌俳句などから受ける感じとはちがつた、もつと自分の心に密接した詩の感じを、私は受けた。……私は、現代の詩人の作品を殆んど讀んでゐないから、泡鳴が、他と比較して、どういふ位地にゐるか知らないが、今、彼れの幾篇かの詩を讀んで、文學者岩野泡鳴の眞價を新たに見直さうとしてゐるのである。

日本主義を力說し、個人主義を主張してゐた泡鳴には、今日勢ひを得てゐる思想から見ると、時世おくれの古さがあるのだが、よくも惡くも、彼れは人眞似をしない獨自のものを一貫して持つてゐる。時代を隔てゝ讀んでも、いき〳〵した印象の與へられる所以である。

いろ〳〵な問題に關する彼れの感想錄についても、彼れの私生涯についても、書きたいことがいろ〳〵浮んで來たが、あまり長くなるから、このくらゐで筆を擱くことにする。（六月二十日）

菊池寛論

菊池寛君を論ずるのは現代を論ずることである。この雜多紛々の現代に於て、ある一人を以つて現代の標本とすることは困難であつて、範圍を文壇に限つても、現代を背負つた標本的人物はそこらに散在してゐるやうであつて、特に一人を選び出すことは困難である。

しかし、今日の私は、多く躊躇するところなく、菊池君をもつて好箇の現代の代表者としようと思つてゐる。私は彼れに於てよく現代の影を見てゐる。現代は絶えず動搖してゐる。明日はどういふ風が吹くか知れない。從つて、私の菊池君に對する評價は、明日の日どう變るかも知れないが、今日の彼れは、よく日本の現代を反映してゐる。どちらかと云へばいい意味で日本の現代を代表してゐると云つていゝ。よくも惡くも現代に無關心で生存してゐられない私は、菊池君についても無關心でゐられない譯である。

最近の文壇人のうちでは、故芥川と、久米菊池の兩氏とに、私は、いろ〳〵な意味で興味を寄せてゐた。私は、年齡の差違のためか、この三氏に對して、羨望嫉妬憎惡あるひは偏愛、仲間贔屓などの私情をまじへずして、その述作を味ひ、その行動を注視してゐられるのである。

他の二氏のことは暫く置く。「菊池君は素直に現實を受入れる人である。現實に對して相應に敏感な人である。外形も精神も今の日本に生きてゐると云つた感じが生々としてゐる人である。彼れの述作は、さういふ感じの卒直な表白である。」日常の行動も多分さうであらうと思はれるが、社會民衆黨（今度の選擧に際して、そんな名前の黨派のあることを私ははじめて知つたのであるが）の一員として、第一回の普選の代議士候補に立つたことも、氏の行動として、ふさはしく私に思はれる。氏が落選したことによつて、「現代の日本の代表者」たるに價ひしなかつたと見做すのは、最高點の投票數を得たと云はれる高木正年氏を、「現代の日本の最高の代表者」たるに價ひしてゐると見做すのと同樣に、無論皮相な考へである。菊池君は、民政黨にでも加入して選擧に立つてゐたなら、當選の榮譽を得たであらうし、彼自身の志してゐる出版法の改正や著作者擁護の法案成立のためにも、都合がよかつたであらうのに、氏は易きを去つて難きに就いた。しかし、そこに、現代的良心の保持者たる氏の面目が見られるのである。

安部磯雄先生が社會民衆黨の巨頭であることも、私は今度はじめて知つた。安部先生と私とは、この世に於て多少の因緣がつながつてゐないことはない。私は、年少の頃（明治二十七八年の頃）備前岡山の郊外にあつた薇陽學院といふ宣教師經營の私塾に半年ばかり通學して、傍ら縣立の病院へ通つてゐた。（當時の印象は、「地獄」といふ短篇に書いたことがある）その學校の校長は、安部先生であつたが、神學研究の目的で米國に留學されてゐた。私の入學後何箇月かして歸朝されたので、私達は多くの期待をもつて先生を、岡山の停留場に迎へた。私は、學校では先生の教授を受けなかつたが、市内の教會堂に於てをり〳〵先生の說教や講演を聽いた。社會主義らしい意見を、私はその時はじめて耳に入れた筈であつたが、特別に記憶に留まるほどの感激は受けなかつた。

間もなく私は年少の憂欝に困じて退學したが、一二年後にその學校も閉鎖されることになつたのであつた。校長たる安部先生が、在米中新神學にかぶれて、基督教の正統的信仰を失つたゝめに、宣教師と意見が合はなくなつたのが、學校閉鎖の一つの原因であると云はれてゐた。

私が上京して早稻田の學堂に通學してゐた間に、安部先生も上京された。一團の同志とユニテ

リアンの教旨を宣傳されだしたが、當時の私は、宗教が鹽氣を失つてしまつたやうな神秘性を缺いだ、淡々水の如き常識的なユニテリアンを蔑視してゐた。(今思ふに、無產黨中の社會民衆黨は、宗教のうちのユニテリアンのやうなものではあるまいか)

先生は、私の在學中早稻田に教鞭を執られるやうになつて、私達のクラスにでも英語の一課目を受持たれたのであつたが、まだ先生の人格や學識を知らなかつた學生は、どういふ譯だつたか、先生を毛嫌ひして、最初の授業時間に、私など數名の外はその教室に入らなかつた。學生に嫌はれたことを知つた先生は、直ぐに教室を出て、それつきり受持教師は變更された。それで、後年安部先生が早稻田の學生間に旺盛なる人望を得られたことを知つて、私は意外に感じた。

爾來數十年。私は輕井澤避暑中に、彼方此方の途上で、幾度か行會つて、お辭儀をする外、先生に面接したことはなかつた。先生がいかなる社會主義行動をしてゐられたか、さういふことに興味のなかつた私は殆んど知らなかつた。たゞ羽仁吉一氏ををり〳〵訪問した時世間ばなしのうちに、安部先生の家庭についても、多少耳にしたことがあつた。羽仁氏の令孃が、安部さんの子女××さんは、神様は信じないけれど、お父さんを信じると云つてゐたと話したのが、私には奇異に感ぜられるとゝもに、先生の家庭ではさうだらうと思はれた。先生はかつて、ある雜誌に「私は妻君を尊敬する」と云つてゐられた。夫が妻を尊敬し、子が父を神の如く信じることは、私が日常目睹してゐる周圍の家庭では多く見られない現象である。

かういふ有德の人物が國民の代表者として議政壇上に立つことは喜ぶべきことである。選擧前後の先生の人氣の盛んな所以である。しかし、翻つて考ふるに、議會は現實の國人の生活に直ちに影響を及ぼすやうな言論行動の舞臺であるとすると、溫良有德の人物といふことは、必しも代表者として最高の條件であるとは云へないのではあるまいか。私は、先生の政治上の主義主張については、詳しくは知らないのであるが、雜誌上でをり〳〵瞥見したところに依ると、產兒制限論者であるとともに、財產の制限論者であるらしい。土地國有主義を抱いてゐるらしい。土地の私有禁止を說いたり、個人の私有財產を幾干に止めようと說いてゐるのを、私は何處かで讀んだことがある。……ところで、他の無產黨候補者を選擧した人々は、どういふ人々であつたか知らないが、安部先生の應援者及び投票者は、必しも無產者ばかりではなかつたらしい。財產を有し土地を有し、また出來ることなら自己の財產を殖やし、所有土地をも殖やしたいと、人類共通の慾心から脫却してはゐさうでない人々も、安部先生を自分達の代表者として昇上げたやうである。私は、そこに現代を見るのである。現代的良心を見るのである。安値淺薄なる人間的良心を見るのである。若し、安部磯雄先生の屬する黨派が政友派や民政派のやうに有力であつて、議員の過半數を占める恐れがあつて、安部先生も當選の曉には、自から內閣を組織し總理大臣となつて、その抱懷せる土地私有禁止などを、直ちに實行し得られるやうであつたなら、どうだらう？さういふ右か左かに自己の運が左右される場合にでも、先生の投票者は擧つて先生を投票したであらうか。どうせ無產黨が議會に多數を占める恐れはないのだから、自分達は、新聞雜誌などで新しい進んだ思想らしく說かれて、現代の知識階級の流行となつてゐる主義の所有者たる先生に一票を投じて、現代的良心の滿足を得、先生の當選の報を新聞に讀んだ時、明日から土地私有禁止實行などの不安に襲はれる必要なく、普選第一回の進步せる選擧者であるといふ快感のみを味

ひ得られるのではあるまいか。

全體無產者は有產者を打倒して自から有產者たる幸福を占領したいのが、人間性の至極である。人間は精神的にも物質的にも、他に優越してゐるといふことに於て自己の幸福を感じるので、婦女子でも、萬人が萬人同じ衣服を着るやうだつたら、それがどんな美服であつても幸福を感じないに違ひない。選擧でも、主義その者に即しなくつても、勝敗といふことだけで、大勢が興味を覺えるではないか。

筆が横道に外れたが、ここらで、本題の菊池寛論に返ることにする。

改めて云ふ。菊池君は素直に現實を受入れる人である。現代的良心の所有者である。帝國議會の一員となつて實際の政治に參與したいといふ、在來の引込思案の文人氣質とは違つた勇猛心、起しても、民政黨へは加入しなかつた。そして、氏は、近き將來に於て、社會組織が急變して、生活が平等になつて、流行作家も贅澤が出來なくなるであらうと、素直に考へてゐるらしい。(私はさう考へてゐない。通俗的流行作家は、これからます〳〵榮えて、浮世の榮華を極めるやうになるのではあるまいか)

封建制度が崩壞しようとも、資本主義が滅亡しようとも、生きかはり死にかはり、人間の所有慾や愛慾が、蛇の執念の如く、何等かの形に於て、人類が地上に存在する限り威を揮はないで置くものか。周圍の事情によつて文學そのものが衰頽すれば兎に角、さうでない限りは、文學者の生活はます〳〵不平等になつて、時好に投じた作家は、ます〳〵贅澤を味ひ得られるであらう。

菊池君は、文壇人の所有慾滿足のために相應に力を盡した人である。文藝家協會を設立されたのも、最も多く氏の力によるのであらう。戯曲の上演料が得られるやうになつたのも、何年か前から、急激に原稿料が騰貴するやうになつたのも菊池君などがその道を拓いたのではないかと思はれる。そして、氏に對して惡聲を放つ人々も、原稿料が値上されたり、上演料が取れたりすることには反對しさうでない。この頃圓本發行書店が、頽りに藝術家の作品を極度に商品扱ひしてゐるが、商品扱ひされて豫想外の利益を得る作家は大して澁面をつくつてゐないらしい。それは、今日の作家が特に所有慾に目が眩みだしたのではなくつて、以前の作者は、環境が彼等をして强いて清貧に安ぜさせるやうになつてゐたのである。

そして、菊池君は拘りなく現代に應じて行く。藝術的氣取りに捉はれないで、現代をありのまに享樂して行く。さういふ點では、育ちが育ちだけに說教者めいた安部先生よりも、現代の代表者として衆議院議員の適任者であるかも知れない。

菊池君は、人として現代の代表者であるとゝもに、作家としても現文壇の代表者である。この頃盛んに宣傳されてゐる新潮社の「長編小說集」でも、春陽堂の「戯曲全集」でも、先づその第一回配本に菊池寛集を撰んでゐるのによつても、氏が現代の代表的作家として世間から認められてゐることが察せられる。

私は、今度、氏の長編通俗小說「新珠」を通讀した。それから、大正九年輕井澤に避暑してゐた頃、日々新聞で何回かを走讀みした「眞珠夫人」と、先年「婦女界」で二三回だけ讀んだ「受難華」とを、飛び〳〵に讀直した。そのうちで、「新珠」が作者得意の作ではないかと思はれる。

しかし、現代の文壇に跋扈してゐる所謂通俗小說なるものを、殆んど一つも讀んだことのなか

つた私は、「新珠」一卷を讀むにも苦しい忍耐を要した。老いて、少女愛玩の小說に親しむことの如何に難きかを知つた。

それでは、拙劣な作品であるかと云ふと、決してさうではない。私などは無論かういふものは、書かうたつて書けないだらうし、他の知名な通俗作家達の作品のうちにも、このくらゐなものは、さう手易く見つからないのではあるまいかと、私はまだ廣く讀まないさきから豫想してゐる。

通俗的見地から批判すると、「新珠」は、用意周到を極めた作品である。日本畫の大家の未亡人が、子女の不名譽な姙娠についても、さして心を勞しないで、相手の男を勝手に出入させたり、姉娘の行衞不明を一年もほつちらかして平氣でゐたり、ことに、良家の三人の姉妹が、藝者か娼妓かの如く、日常の仕事のやうに、互ひに色戀の競爭をしたり、色つぽい話を、姉妹同士で臆面もなくし合つたりするなんか、私には不可解な世界として映ずるのであるが、ここらが頭腦未發達な婦女子の讀物たる所以であらうと、讓歩して見ると、全篇の構圖、人物の配置、會話の呼吸など、用意周到を極めてゐる。三人の姉妹はそれ〴〵に性格を異にして、中心の男性たる不良青年に對する態度が順々に變つて行くところなんか、思ひつき妙を得て、年少の讀者を釣つて行くのであらう。モウバツサンなんかは、かういふ世相の描寫は手に入つたもので、ある短篇では、伊太利か何處かへ旅した蕩兒が、最初娘のうちの年上の女を手に入れ、その次の旅には次の女を誘惑し、まだ一人若いのが殘つてゐると、ひそかに樂んでゐる氣持がスツキリと書かれてあつたが、「新珠」には、不良青年に配するに、ある殉情の男を以つてしてゐる。婦女子の讀者はかうでなければ、滿足しないのであらう。

私は、讀みながら、數十年前に讀んだ「厭風戀風」や「青春」を思ひ出して、時代の相違を考へた。樂々と書きこなして、ギゴチないところのないのは、「新珠」の方が如上の二長編に傑つてゐる。風葉の「青春」のうち「あなたは天才だわ」と、女に褒められて、「僕が天才？」と、男が目を見張るところなんか、私は若い頃に讀んでさへ、胸の惡くなるくらゐいや味に感じたのであつたが、「新珠」では、いや味になりさうなところが、割合にすつきりと書流されてゐる。

現代兒菊池君は、現代の若い女性の喜びさうなことをよく知つてゐて、よくそれを書現はしてゐる。しかし、空々しい筆や皮肉な筆を用ひないで、熱心に書いてゐる。「ぢや、つまりお姉さまのおつしやることは、女子教育家などが云つてゐることゝ同じね。つまり處女時代の貞操を尊重せよと云ふことね。ありがたう。お姉さまのお言葉を有難く聽いて置くわ。でも、妾の考へは少し違つてよ。妾、本當に愛する人が出來て、またその人が妾を、本當に愛してゐて呉れるのなら、妾凡てを捧げるつもりよ。妾、お姉さまにそれだけは云つて置きたいわ」

厭風戀風や青春には見つからなかつた臺詞であつて、現代の一部の若い婦女子の拍手喝采を得るところである。

「耻しいなんて、生涯の大事だわ。羞耻のために生涯の大事をあやまるなんて、そりや舊式の日本婦人のことよ」

「女性全體から選まれて、色厭的な男性を懲す選手になつたつもりでゐますの」

その他、さま〴〵な、現代の若い女性の拍手を促すやうな臺詞が散亂してゐる。

しからば、私のやうな現代女性について知るところの少いものは、「新珠」を讀んで、大に啓發

されたであらうかと考へるのに、「今の婦女子はかういふ小説を愛讀してゐる」といふ點で、現代の女性の心理が想像されるばかりで、女性そのものの本態や人生の眞相については、さして得るところがなかつた。こんなに長つたらしくなつて、從つて時間を浪費しないで讀み得られた同じ作者の幾つかの短篇小説や戯曲ほどの感銘は得られなかつた。

「人間の業は、はてしなく巡轉するものである。人に負はせた苦しみは、いつの間にか自分の身に巡轉して來る」など、作者の人生に向つた觀察は、正しくつても、筆が皮相を撫でゝ深く抉つたところはなささうである。私をして倦怠を覺えさせるほどに長つたらしい癖に、姉妹の嫉妬煩悶が、少しも熱火を帶びて現はれてゐない。上すべりの奇麗事に過ぎぬ感じがある。これは、婦女子を喜ばせるためにわざとさういふ筆使ひをしたのではなくつて、作者自身の心境がさうなのではあるまいか。

しかし、現代の才人である菊池君の筆は、さすがに他の多くの作家の如く鈍昧でない。「新珠」のうちにも、清新な形容語や清新な警句がところ〴〵に目に觸れるのである。

「眞珠夫人」は熟讀しないから、充分な批評は出來ないが、この妖婦振りはひどく表面的のやうに感ぜられた。妖婦と云へば、有島君の「或女」は壓力の强い作品である。私は、去年輕井澤でこの長編を讀耽つて感歎した。かくてこそ長編の長編たる價値があるのである。

昔、國木田獨歩が、「破戒」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚で書く」と傲語した。これは例の空氣餡であつたが、小説でも何でも、短かくつて濟むものなら短いのに越したことはないのである。そこには議論の餘地のない譯である。……（私が「新珠」を讀んで、「おれならこんなものは、三四十枚のうちに書込んで見せる」と自惚れてゐるかの如く邪推する勿れ、私は、はじめから「新珠」のやうなものは書けないと降參してゐる）

何年か前、武林無想庵君が、最初の洋行から歸つて來て二の宮に假寓してゐた時分、一日私を訪ねて來て、歐洲の狀況を話して呉れたが、彼れは、フランスの現文壇の風潮は、性慾の極端な描寫とコンミニズムの主張であると云つてゐた。そして、彼れは自分でその異國の流行にかぶれて、眞似をする氣になつたのか、頻りに、○○付きでなければ誌上に掲載されないやうな小説を、得意になつて書きなぐり、かたはら、コンミニズムの信者氣取りの雜文を書き散らしてゐた。ところが、再度の洋行によつて、現實の刺戟を實感してからは、態度が一變して、西洋の眞似事でない自己の眞實を吐露しなければならなくなつた。人間は聞き嚙りの思想や流行の主義から脱却した時に、自己の持つてゐる人間本來の姿がカヅよくあらはれるのである。

今「婦女界」三月號を開けて見ると、菊池君は、その戀愛觀のうちに「人生戀すれば憂患多し戀ひせざるも亦憂患多し」と、それを痛切に感じてゐるらしく書いてゐる。どちらに轉んだつて憂患の多い人生である。それならば、戀愛に向つてでも戰鬪に向つても、その渦中に投じて歡喜でも憂患でも、心にふりかゝつて來るものを味ふのが、男子の面目であるかも知れない。現日本の文學者のうちでは菊池君などに最も多くその意味がありさうである。可なりの戰鬪性を有し、享樂慾に富み、親分肌もあり、樂天的分子も可なりに持つてゐる。先日選擧の際、第一回の

政見發表演說の終つたあと、銀座のカフエー「エスキモー」で、私は菊池山本兩氏と座をまじへて紅茶を飲んだが、その時、山本有三君が傍からくよ〳〵氣をつかつて選擧の結果を悲觀してゐるのに引かへ、菊池君は悠然として安んじてゐた。これぽつちの度胸でも、今の文壇人には珍らしい。

代議士には落選しても、これだけの世界的聲望を脊負つてゐる菊池君には、何か目醒ましいことがやれさうである。またやるのは今のうちだ。世俗の聲望は朝夕を計られず、……

菊池君は、京都で上田博士の指導を受けた人であるに關らはず、最初から純藝術の道を進むやうな素質は持つてゐなかつた。ショウの感化を受けたと、自から云つてゐるやうに俗界に關心しないでゐられないのである。それが、過去十年、菊池君が世に出て以來の時世に適應してゐた。かういふ世間的興味を多く持つた文人が勢ひを得るやうな時代になつてゐたのだ。も少し早かつたなら、菊池君なども、他の多くの赤門出身文士のやうに、數年にして文筆を投じて學校の先生になつたかも知れなかつた。も少し遲かつたら、菊池君は初めから社會運動でもやるかも知れない。氏は運よくこの十年の時代の調子に乘つたがために、自己の文學的天分を過分に燦かすことが出來た。

餘論

以上の雜感を書終つたあとで、餘暇があつたので、新潮社發行の「現代小說全集」中の「菊池寛集」を取出して、ところ〴〵讀んだ。一度讀んだことのあるものばかりであるが、氏の作品は、頭を疲らせないでスラ〳〵と讀める。現代に持囃された原因は、かういふ特徴があるためであらう。少くも「新珠」や「受難華」を讀む時のやうな退屈を、私は感じないでゐられた。「無名作家の日記」「葬式に行かぬ譯」「友と友との間」など、文壇へ出るまでの苦心が如實に書かれてゐるので面白い。そして、かういふ初期の物には作者の人のよさがよく現はれてゐる。かういふ作品に有り勝ちないやみがない。

無論これ等の作品は、藝術としてさう傑れたものではないが、兎に角、事實の記錄であるから見飽がしないのである。「藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は、此要求を充たすに足りない」と、森鷗外が云つてゐる通り、單なる自己の日常生活の記錄たるに留まつてゐる小說は、我々の藝術慾を滿たすに足りないのであるが、しかし貧弱な空想で揑ち上げられた小說よりは、遙かに讀むに價してゐる。私は、この頃ある社の依頼により、懸賞募集小說の選拔をしてゐるが、實際の記錄らしい小說は、いかに小說が幼稚であつても、世の中にはかういふことがあるのかと、世相について一つ學んだ感じがされるのであるが、幼稚な頭で文章や趣向ばかり凝つたつもりの、所謂「創作」なるものは、讀むに堪へないのである。書く方も讀む方も時間潰しで、かういふ創作は全く無用な存在のやうに思はれる。……私は投書を讀んで、今更のやうにさう感じてゐるが、菊池君の如き現代最大の流行作家の作品を讀んでさへ、さういふ感じのしないことはない。

故上田敏氏のことが、菊池君の初期の作品には屢々現れてゐるが、「友と友との間」のある一節

に、「あの人はほんとうに偉かつたでしようかね」との質問に對して、松木さん（夏目漱石氏）は暫く考へてから、

「さうだね。博く知つてゐた事は、確に博く知つてゐたね。が、その博く渉つて居るある部分を押して行くと、それがどれ位深いかは、一寸問題だがね」と云つてゐる。

漱石氏の評語ほどあつて、上田氏を評して要を得てゐる。間口の廣い人が奥行の淺いのは當然である。上田氏は學問の深い人ではなかつたであらう。しかし今私は此一節を讀みながら、ふと考へた。……漱石氏は敏氏よりも、藝術についてどれほど深く入つてゐたのであらうか。ある特殊の人物や時代について一生を捧げるくらゐに深く研究することは專門的學者の態度であらうが自己の心で藝術を味得するのを最高の目的とするためには、一所に停滯し、部分的に拘泥する必要はないのである。上田氏だつて西歐の詩歌の鑑賞に於ては、夏目氏に負けなかつたであらう。

西洋の詩の味ひは、言語の關係から、日本人には分らないと、芥川君なども云つてゐるが、しかし、分る分らないは程度問題である。私などは西洋の詩を愛讀してゐる。日本の和歌や俳句にも勝つた興味を感じることもある。私はそれでいいと思つてゐる。私は、教壇に立つて外國の詩を講じようとする自信はない。しかし、一知半解にしろ、自分だけで興味を感じ、自分の心の糧としてゐるのは差支えないと思つてゐる。はじめから分らないと極めて、強いて外國の詩に目をつぶる必要はないと思つてゐる。

短くて取つつき易きためでもあるが、私は、この頃は、外國のいろ〳〵な詩人のものをあれやこれやと讀みかじつて、寂寥たる心境の慰めとしてゐるので、かういふことに言及した。

徳田秋聲論

一

徳田秋聲氏の小説には、去年の夏輕井澤の高原で「元の枝へ」を讀んで、老いて愛慾に惱んでゐる作者の痛ましい心境と、その枯淡な筆致に情趣を湛へてゐる當代に類の無い技巧とに感歎して以來、月々誌上に現はれる氏の短篇には殆んど目を觸れなかつたが、それ等の短篇にはどういふことが取扱はれてゐるかといふことについては、新聞の文藝欄の評語や知人の噂によつて、その大要を伺ひ知つてゐた。

ところが、今四月の中央公論の創作欄に、「春來る」と題された氏の新作が現れると、間もなく、激しい惡評が、あたり近所から私の耳を襲つた。去年の後半期に、「元の枝へ」が島崎藤村氏の「嵐」と並んで、近年に例のなかつたほどに、囂しく推讃された後、藤村氏は大風の後のやうに鎭まり返つてゐた間に、秋聲氏は、かの大作の後日譚をボツボツ語つてゐたのであつたが、世の物語の後日譚が多くさうである如く、氏の後日譚も讀者や批評家にあまり喜ばれないやうであつた。そして、ひそやかな冷笑侮蔑の聲が何處からともなく聞えてゐたが、今度、「春來る」が現はれるに及んで、作者に對する嘲罵の聲が渦捲いて來たやうである。(世間の狹い私が、さう感じたゞけで、一般の文壇ではどう云つてゐるのであるか、今のところまだ私には分らないが)それについて、毀譽褒貶の手賴りなさを私はまづ感じた。

それで、この頃晢く月刊雜誌の創作欄を遠ざけてゐた私も、徒らに押入れに積重ねられてゐる寄贈雜誌の中から、中央公論を引出して、「春來る」を讀みかけたが、長い間馴染の深かつた秋聲氏の作とは、まるで樣子が違つてゐるのに驚かされた。驚くと云つても、作に惹入れられる種類の驚きではなくつて、我慢にも讀切れなかつた。それで、一目十行の驅け足で通り拔けて、ホツと息をついた。……誇張して云ふと、私は滿身に冷汗を掻いたのである。讀むべからざるものを讀み、見るべからざるものを見たやうな感じがした。私は休息しながら憂愁に捉はれた。(冷汗を掻いたと云つたのは、誇張した言葉ではなくつて、私の感想に適切な象徵語であるかも知れない)

これでは、藝術と事實との關係から云つて、讀者が眉を顰めるのも無理がないと思はれた。同じ種類の材料が取扱はれてゐるに關はらず、「元の枝へ」には、讀者の冷笑を招くやうな間隙がなかつた。それに比べると、今度の作品は著しく弛緩してゐる。目も口も帶も締つてゐない。

二

讀後何日が經つた。その間、「春來る」が心の拘はりとなつてゐて、私をして、藝術家の一生について、あるひは人間の老境について、いろ〳〵に思ひを馳せさせた。

島崎藤村氏が、かつて、感想錄のうちに、「ある作家が自己の經驗した事實を書いたものは、それだけで價値がある。それが藝術になつてゐたなら更に尊い」といふ意味のことを書いてゐた。過去に於て、「足跡」や「たゞれ」や「何處まで」のやうな、人生世相をさながらに寫した多くの大作を出した秋聲氏の、老後の心境記錄が、さう蔑視される筈はないと、私は思返して、再び雜誌を取上げて、「春來る」を開いた。今度は、人生記錄に直面したつもりで、襟を正して、行から

行へと熟讀した。ペンを持つて、何かの意味で自己の心の刺戟されたところに線を引いた。

田山花袋氏の「蒲團」以來、近松秋江氏の幾つかの「所謂痴情小說」、島崎藤村氏の「新生」、筆に上されなかつた島村抱月氏の痴情小說の材料、武林無想庵氏の「コキュー」物などによつて、人生を學んで來た私は、自分で老境に入つてゐる今日、「春來る」によつて、つひに老人の戀を學ばねばならぬやうな機會に接した。舶來の書物によつて嘗て學んだストリンドベリーやゲーテの晩年の戀愛も、髣髴として思出される。以上の諸氏は、身を以つて當つて、滿身に創痍をあびて、艱苦をも歡喜をも體驗したつはものである。私は、廣津和郎氏が先頃の時事新報の文藝欄で云つてゐたやうに、一介の從軍記者たるに過ぎない。したがつて、いくら心眼を凝らして見ても、それ等の作品の心髓に徹することは出來ないかも知れない。……しかし、如上の諸作品も特異の奇事奇想を描いたのではなくつて、その多くは世間にザラにあることが取扱はれてゐるので、我々も自己の心裡に、これ等諸作品に現はれてゐるもの〻萠芽を有してゐるのである。だから、共鳴を感ずることも反感を起すことも、あるひは前車の覆轍として自から戒めることも出來るのだ。

「春來る」は、世上周知の一老文學者と一美少婦との戀愛記錄の一篇で、この材料については、作者ははじめは、遠慮しながら書いてゐたやうであつたが、次第に歩を進めて、今度のになると、臆面もなく材料をぶちまけてゐるやうな態度を取つてゐる。しかし、その態度は、二三の作家の愛慾小說の如く、藝術的勇猛心とか、自暴自棄的苦悶とか、あるひは藝術によつて自己救濟を試みようとするやうな願念に基いたのではなくつて、次第に馴れつこになつて、臆面もなく何でも書き得るやうになつたといふ程度のものである。同じ作者の「元の枝へ」や「暑さに喘ぐ」などとは、根柢からして態度が違つてゐる。

戀愛小說にも種類が多い。そのうちで、男女の相剋に關したものが、藝術の好題目になるらしく、讀者をも感動させ易いやうである。「春來る」の如く、男女相愛の甘い遊戯を描いたものは、作者の主觀が餘程嚴肅であるか、あるひは作者の筆致に讀者を陶醉させるやうな妙味を含んでゐて、有無を云はせず、作者の戀愛境地に讀者を惹込むやうでなければ、藝術としての効果を奏し得ないのである。手放しの惚氣には辟易するといふ世俗の人情は、心理的考察を試ると、他の幸福に對する人間固有の嫉妬心に基くらしいが、傑れたる戀愛藝術に於ては、さういふ嫉妬心を壓倒するに足る魅力を有つてゐる。森鷗外譯の「即興詩人」やツルゲネーフの「戀の凱歌」などは、その例として取出していゝ。元の戯曲「漢宮秋」の如き、哀傷艶美の詞句が綿々たる情緒を生動させて、讀者を恍惚たらしめるのだ。

ところが、秋聲氏の作風と文章とは、元來かういふものには適當しないのだ。簡潔枯淡な筆で、色つぽい姿態や情緒をほのめかす巧みな手腕は、かねて氏の作品に現はれてゐたのであつたが、あくどい色話は氏の筆には不適當である。それにしても、「たゞれ」や「あらくれ」の作者が、「春來る」のやうな、冴えない混濁した、薄汚いやうな作品を一篇たりとも出したのは、一應は呑込みかねる。……しかし、私は熟讀後に思ひをめぐらして、人生と藝術との微妙なる交渉に感慨を催した。この一篇を讀んだあとで、氏の過去の作品を讀返すことは、文學研究に役立つ點が少くないと思はれる。

三

「私は詩人的詠歎に包まれたやうな島崎藤村氏の小説を昔から愛誦してゐる。詩的空想に捉はれない、世上の實相の描寫に巧みなる徳田秋聲氏の長短篇にも、類例のない文學として推服してゐた。そして、詩から小説に移つた藤村氏は、詩的空想を悉まゝにすることを避けて、最も多く自敍傳風の小説を書續け、忠實に自己の見聞自己の經驗に即して筆を執つた。秋聲氏は自己を離れて他を描くことにも巧なのであつたが、自己の日常生活、自己の周圍の見聞錄見たいなものを題材として、そこに、人生の一片をさながらに現はすことにも妙を得てゐた。二氏は、ともに詩的空想を離れた寫實に徹しようと心掛けてゐたのであらうが、二氏の產み出した作品は甚だしく趣きを異にしてゐる。藤村氏は、詩を離れようとしながら、その作品には自ら詩趣が漂つてゐる。ことに、「新生」は一篇の詩であると云つていゝ。いろ〳〵な人間や事象は朧げで、作者の唄ふ哀切な唄が讀者の心を誘ふ。そして、氏の自傳小説を續けて讀むと、そこらに有り振れた凡庸な人間とは違つた、何等かの意味でえらいところのある一人物が、年少にして信州の山奥から都會へ出て、浮世の辛苦艱難な道を辿つて老境に達した物語を聽いてゐるやうな感じがする。作者は物語の主人公たる自己を取扱ふに當つて、飽くまでも謙遜の態度を執つてゐる。謙遜過ぎるくらゐに謙遜してゐる。西洋の文豪の自敍傳に比べるまでもなく、日本の花袋氏や秋聲氏の作品に現はれてゐるものに比べてさへ、藤村氏は人生に對し一層多くの謙遜の態度を執つてゐるのだが、それに關らず、氏の自敍傳小説は、辛慘の生を經てゐる偉人の物語のやうな感じを讀者の心に傳へる。あるひは、少年より晩年に至るまで、たゆみなく人格の陶冶を試みてゐる一人物の物語のやうにも思はれる。ところが、秋聲氏の自傳風の作品を讀むと、そこには、浮世の波に漂はされてゐるたゞの普通人の姿のみが、さながらに我々の目に浮んで來るのである。天の使命を帶びて下界に下つたのでもなければ、惡魔の陰謀を携へてこの世に假りの姿を現はしてゐるのでもなくつて、たゞの人間が動いてゐるのである。それは、濱の眞砂の一粒に等しい人間なのである。……二作家がそれ〴〵に自己の三十代の生活を描いたと思はれる「家」と「黴」とを比べて見ても、私はさう思ふ。

私は六七年前に、珍らしく藤村氏と對座して、長時間の雜談に耽つたことがあつたが、その時、氏は秋聲氏の「黴」などを稱讃したあとで「しかし、主人公がその夫人に對して情味の發露の缺けてゐる」のが、腑に落ちないらしく、そこに不滿らしい評語を挿んだ。たとへ互ひに飽足らぬ思ひをし續けた夫妻關係であつたにしろ、長い同棲生活の間にも、自から情味の湧く時もあつたであらうのにと、藤村氏は疑ひを挿んでゐたのであらう。成程、氏らしい意味のある見方であると私は思つた。

從來、秋聲氏の小説は、ある種類の讀者には、詩のない乾涸びた作品のやうに思はれ、ある讀者や批評家には、衒氣稚氣を全く脫した、灰汁の拔けた、枯れた、錆びた、名匠の所作のやうに思はれてゐた。あるひは、東洋的悟道の靜境地に化身してゐる藝術家のやうに見てゐる批評家もあつた。……しかし、今度の「春來る」によつて、さういふ批評家も、我々も、一人の人、一人の藝術家の心境を輕々しく固定的に判斷することの危さを、痛感しなければならない。人間は境

遇によつて動くものである。他人のことよりも我々自身、いつどう動くか分らないのだ。

兎に角、秋聲氏に取つては、春の來るのがあまりに遲かつた。

この新作に於ては、藤村氏の氣遣つてゐた情味が堰を破つて横流してゐる。作者は情味の海に呆然として漂つてゐる。ここに於ては、以前光つてゐた作者の目は盲ひ、藝術の帶はしどけなくなつてゐる。が、一方から云ふと、以前の作品には缺けてゐた詩が、よくも惡くもここに現はれたと云はれないことはない。

私は、この作品が三人稱で客觀的形式の下に書かれたことも、作の內容と不相應で、失敗の一つの原因になつてゐると思ふ。この小說だけを引離して、作者の名前をも匿して、文壇の消息に通じない讀者に讀ませたなら、理解し難いところがあるであらうが、それは、この作に限らないで、作者の藝術と日常の行爲とが交錯して、一を以て他の足らざるを補つて讀まれるのを例としてゐるのは、日本現代の小說の特異性なので、この作などには、それが少し度が强いだけなのである。

この作は、三人稱になつてゐるが、三人稱らしい傍觀的態度は全く見られない。この小說に於て、老いたる小野の目に映る美女愛子は、信仰の對象ともなし得られる一つのマドンナである。容色といひ、聲といひ、才氣といひ、文字までも、よくつて〳〵堪らないほどに、完全無缺な女なのである。色戀に溺れたものゝ目には、相手の女の「頭の天邊から足の爪先きまで」が美しく見えたり、何から何までが氣に入つたりするのは、あたり前なので、そこに惑溺した人間の面目がさながらに現はれるのであらうが、しかし、作者の筆がべた〳〵してゐるのは、藝術として最も忌むべきことである。他の作家なら兎に角、秋聲氏は、たとへ筆致が無味乾燥に失することは、あるひは有り得ても、金輪際、べたづく弊はあり得ないと、かねて信じてゐたのであつた。べたづくといふことは、芝居道で謂ふところの緞帳趣味の藝風であるのだ。「春來る」は、作中の人物がべたづいてゐるだけでなくつて、作者の筆が締りなくべた〳〵してゐるのである。だから、作中のべたづいてゐる人物が、讀者の同感を得るやうに生動して來ないのだ。此處に現はれてゐるところだけによると、愛子は妖婦でもなく才女でもなく、多少の淫蕩性を有つてゐる一凡婦たるに過ぎないし、主人公小野も、血液の最後の一滴も涸れるほどの戀の苦悶をしたミユツフア伯爵のやうでもない。四つ這ひになつて、唸りながら、ナナのふくら脛をギユツと嚙むことの熊遊びをさせられたり、犬になつて、ナナの投じたハンカチフを咥へて來させられて「いゝ狗ねえ」と云はれて興じたりするほどの凄慘味があるのではない。「小野はベットを下りて、彼女を後ろから抱き上げた。そして部屋中を歩いた。それから愛子が小野を負つて歩いた」といふやうな、讀者の氣を惡くさせる程度のものである。

作者は、節制なく相手の女子を讃美して「例の頭腦の好さ」とか「愛子の頭腦のよさも好きであつたが」などと頻りに云つてゐるが、何處を熟讀しても、この女子に、有振れた女子以上の頭腦のよさがあるとは思はれない。そんなところは何處にも描かれてゐないのだ。藝術に關する會話の條下など、乳臭さと齒の浮くやうないやみを感じさせられただけだが、それは、私に女性批判の目がないためなのであらうか。

「暫くでも愛子が傍を離れて行くと、直ぐ心が空洞になつた」とか「己はすつかり自己がなくな

つてしまつたやうだ。己は何にも出來やしない。愛子が居ればゐたで、居なければ居ないで」とか云ふやうな心境を中心として、年齢の相違やその他の關係から、女が自分を離れはしないかといふ不安な思ひを背後に潜めてゐる老人の戀の實相を、在來のこの作者の技巧でスツキリと書いたなら、一つの傑れた藝術品が現はれて、文壇を豐かにするのであつたが、作者は、筆を運んでゐるうち、稍々もすると、さういふ藝術上の用意はスツカリ忘れて、ホク〳〵と相好を崩して悅に入つてゐるのである。

しかし、この「春來る」が、藝術品になりそこねたところに、藝術と人生に關するいろ〳〵な意味を搜出さうとすれば出來ないことはない。

四

私はこの一篇を讀んでゐるうちに、ふと玄宗と楊貴妃との情事を思出した。淀君に惑溺した老耄の秀吉を思出した。「天に在つては連理の枝、地に在つては比翼の鳥」と、後代の詩人に唄はれた玄宗の、國を亡ぼしても悔ひない心境は、歷史の隔たりによつて美化され、詩人文人畫家などによつて色取られてわれ〳〵の心に映つてゐるが、現代の寫實的眼光で世話に碎いて、その眞相を見たなら「春來る」と同じことだつたかも知れない。「天に在らばお月樣、地にあらば玉霰を玉の床と定め」と、元祿の世之助は、時代相當の俳諧趣味で、白樂天の詩句を飜案してゐるが「春來る」の男女にも「段々憂き世放れのして來た」二人だけの世界の恍惚境が存在してゐるに違ひない。そこは、花袋氏などが屢々云つてゐるやうに、金も名譽も世間も藝術も塵芥に等しく思はれる恍惚境なのであるが、それを、惑溺者自身が文字に傳へるのは至難のことなのであらう。藝術の神はヱホバ神の如く嫉妬の神である。甘い惚氣を、そのまゝに捧げ物としても受納しないのである。

「過去の秋聲氏の小說は、所謂客觀的態度を基調としたもので、あるひは事相から離れ過ぎてゐるかも知れないが「春來る」は、事相に即し過ぎてゐる。材料に甘えてなゞべタづいてゐるのである。數十年の間、世相の經驗を重ね、藝術上の鍛練を積んだ作家も、一朝溺愛の境地に墮すると、こんなになるものかと思ふと、それは、私に取つては、等閑視しがたい重要な問題なのである。

「ほんとうに好いと思ふね。この材料を己も書かうと思ふが、書く必要はなくなつたやうだ。今に己の株を取つちまふだらう。いや、それ以上に己にないものが愛子にある」

「うゝん嘘よ。先生なんて三十年もの積み重ねがあるんですもの。知つてますよ……でも、これならよく書けたと云ふものね」

他の點は兎に角、文學の上ではまだ乳離れもしないやうな少女が、假りにも、三十年の水火をくぐつて鍛練されて來た作家と自己とを比較して、いゝ氣な口を利いてゐるところを讀んで、私は滑稽に思ふよりもむしろ憤慨の感を起した。藝術に對する冒瀆である。

現代の婦人雜誌が、俗惡な讀者の趣味に投じるために、ゴシツプ種になりさうな婦女子を引摺出して、物を書かせることが流行してゐるが、それが、どれほど文壇を賊し、婦女子その人の將來をもあやまるかも知れない。この頃、二三の婦人が「あんな女でさへ、小說なんか書いて、世

間に名を賣つて、多額な原稿料をも取つてゐるのだから、私だちも、何か書かなければ損だ」と云ふ意味のことを、私に云つてゐた。さしたる修業もしないで、虚名と慾のために、文壇へ出ようと、ヤキモキしてゐる婦女子が、この頃は少くないやうである。婦人雜誌がこの惡弊をつくつたと云つても、見當違ひではあるまい。さき頃「改造」に掲げられてゐた數氏の婦人雜誌攻擊の文章には、私は略々同感である。それに對する辯護説も何處かに出てゐたが、かういふ婦人雜誌が續出するのは世間の要求に基くので、それが止むを得ないことであるにしても、堂々たる批評家が、婦人雜誌の肩を持つて、現在の惡風潮を助長させる必要はあるまい。

五

私は、「春來る」の作者が、「春來る」の境地を拔け出たあとでは、氏の藝術が、過去のそれとはちがつた色彩を帶びるであらうと豫想した。惑溺の體驗は藝術家の重要な心の糧となるのであるが、渦卷のなかにゐて渦卷を描くことの至難さは、この一篇がそれを證明してゐる。

しかし、こゝでも、實行と藝術について私は考へた。戀愛にしろ、勞働にしろ、戰鬪にしろ、あるひは社會革命のやうな事業にしろ、さういふ實行に身を托してゐる人々には、藝術なんていふ影のやうなものはどうでもいゝので、古來人類が閑餘に考出して積重ねて來た藝術觀は、宗教意識とゝもに一つの迷妄なのではあるまいか。私などは長い間藝術に浸つて來たのであるが、そこに自己存在の意義を靈感して、そこに全心を托して安んじたことは一度もなかつた。

「ストリンドベリー」は、晩年の感想錄「青卷」の最後に於て、惱みの多かつた一生の結論として、「祈りながら働け。苦しみながら望みを抱け。天と地とを共にわが裏に有つのだ。永久の定住を求むるな。この世は巡禮の世である。故郷ではなくて、さすらひの場である……」と、中世紀の口吻を用ひて、神秘の境地を天の一方に望んでゐるが、それは私などが達せられない境地である。

さう結論をつけたストリンドベリーは、同書の他の章下に、ルッソウの言葉を引用してゐる。それは私の心胸に觸れるところがあるから、長くとも轉載しよう。

「若い時分、私は人生の疲弊に堪えかねて自殺した一英國人の記事を讀んだことがある。その青年は、毎日はめたりはづしたりするボタンの數を數へてゐたといふことである。すなはち、下着には半ダース、日中のシャツには半ダース、カラーとカフスに半ダース、チョッキ、上着、外套に一ダース、長靴、ゲートル、手袋に二ダースといふやうに、彼れは馬車に乘つて出る時にも、中食晩餐の折にも一々服裝を變へてはボタンを數へてゐた。

かう云つたら、可笑しな話だと思はれようが、しかしこれは人心の眞相を暴露した話である。彼れは生活が疲弊したので無益なことをして半日を費してゐたのである。すなはち不必要な訪問をすること、電話をかけること、用もないのに手紙を書き、新聞を讀むこと、特に衣裳と云つても、もとは紐で結べば事濟んだものである、今ではボタンをつける、フックをつける、眼をつける、紐をつける、リボンをつける、留針をつける、ビヂョ金をつけるといふやうに事々しい。我我の衣裳たるや、多くは無益のノンセンスたる煩瑣な時間空費の文明を縮圖的に表はしたものである。田舍に居つて土地を耕すものは、美術も科學も、文學も必要が無い。自然を有して美術も

宗教も必要のないものは科學者文學者よりも尊い人である。教會は到る處にあれど、博物館、劇場、書店、倶樂部は町ばかりにある。それ等が必要であるか否かは別問題である」（柳英彦氏譯）

前世紀までの累世の舊套を脱した新しい目で人生を見た新人中の新人であつたルツソウが指摘した人心の眞相、生活の疲弊は、今日に至つては、ます〳〵激しくなつてゐる譯である。ノンセンスな煩瑣な時間空費の方法は、文明の進むとゝもに、ます〳〵頻繁に案出されるやうになつたこと、地下からルツソウを連れて來て見せたなら、驚嘆して目をまはすだらうと思はれるほどであるが、しかし、彼れの謂ふところの「自然を有して、田舍に居つて土地を耕すものは、美術も科學も、文學も必要が無い、……科學者文學者よりも尊い」といふことも、今日の世となつては、彼れの時代に彼れの道破した時ほどの横威をもつて我々の胸に迫つて來ない。さすがのルツソウもすでに古臭くなつてゐる。生活の疲弊は今日は田園人も都會人と同じことになつてゐるではないか。救ひがそこにあらうとは思はれない。みんなが心靈の安住を得ない「さすらひの旅」をしてゐるやうなものである。

ストリンドベリーは、「この世は巡禮の世である。故郷ではなくて、さすらひの場である」と云つたあとで、直ぐに言葉を續けて、「眞理を求めよ、さらば發見し得る。只道理であり、生命であるキリストと共にあつてのみ眞理が悟られるのだ」と、解決をつけて、一卷――あるひは彼れの一生――の締括りをつけてゐるが、それが、東洋の末世に生れた私などには取つて付けたものゝやうに思はれる。ルツソウも、その「懺悔錄」に於て、「この一卷を提げて神の審判の前に立つ」と云つてゐるやうに、あらゆる舊套を脱しても古い神から脱却することは出來なかつた。

今日の時世に生れた我々は、おのづから神から脱却されるやうになつてゐる。「懺悔錄」の流れを汲んで、赤裸で自己告白をすることも常套月並になつて來たが、これ等現代の作家は、前代の新人ルツソウの心に潜在してゐた神の名殘りをも、最早留めてゐないのである。

私が、突如として、ストリンドベリーやルツソウを持出して來たのも、「春來る」に何となく關係を有つてゐると思つたからなのだ。

數十年の間、たゞの普通人の世相をさながらに見て來た德田秋聲氏の晩年の心境がここであつたとすると、文學の修養は心靈の陶冶にどれだけの價値があるかと疑はれる。少女との手頼りない一時の戯れを外にしては、空虛な淋しさが、救ふすべもなく老主人を襲つてゐるらしく、私には推察された。「暫らくでも彼女を見失ふことは、矢張り寂しかつた」。それは生活力の衰へた老人の普通の心情なので、私なども、自分の前途をそこに見なければならぬのであらうが、それでは、文學の鍛練は心性にさしたる關係はないやうに思はれる。小說だの感想だのゝ形に於て、赤裸々に自己告白を何十年しつゞけて見たつて、それはそれつきりで、自己の眞生命に取つて何の足しになるのであらうと思はれないではない。西鶴の「置土產」には、蕩兒の末路がいくつも描かれてゐるが、そこには、命に安じてゐる暢達の風趣が漂つてゐる。色修業は文學修業よりも、心靈の陶冶については一層力をもつてゐるのではなからうか。

文學、〻〻。書齋裡で文學に沒頭して、浮世の影を追つてゐる私は、たま〳〵「春來る」を讀んで、いろ〳〵に作者について考へ、自己について思ひを廻らしたが、周圍は荒凉としてゐた。

（昭和二年四月十四日の夜、若葉にそゝぐ雨の音を聞きながら、大磯にて）

芥川龍之介の藝術を論ず

「處女作に於て、その作者の一生の作風は決定されてゐる」

さういふ意味のことを、ウエルスが云つたさうである。芥川氏は、氏がさほど感心してゐないウエルスについても、この言葉だけは同感であると云つてゐたのを、私は何かの雜誌で讀んだことがある。

私が最初に讀んだ、谷崎潤一郎氏の作品は「新思潮」（？）に掲げられた「象」であつた。芥川龍之介氏の作品で、はじめて私の目に觸れたものは「孤獨地獄」であつた。この二つの作品は、それ〴〵に後年の二氏の藝術を豫定させてゐるやうである。

夏目漱石に激賞されたゝめ、芥川氏の出世作となつたといふ「鼻」は、早くもこの作者の特色を現はしてゐて、人間の心理洞察の目と、諧謔（ユーモア）の才をそこに認めることが出來て、いかにも漱石の好みにかなつてゐるのであるが、私としては、この作者の他の一面を現はしてゐる「孤獨地獄」の方に心が惹かれた。

私は、年少の新作家のこの小品を讀んだ時に、興味を覺えたのは、舊套を脱した藝術の萠芽をそこに認めたゝめではなかつた。斬新な技巧の光に打たれたゝめではなかつた。作中に語られてゐる話が面白かつたのだ。作者が母親を通して又聞きをした大叔父の話を、簡單明晰に、作者自身の主觀をまじへて述べてゐるのが、私の心にピツタリ嵌つたやうに感じたのであつた。

彼れの大叔父といふのは、幕末から明治初年へかけての大通人山城河岸の津藤のことで、この津藤が吉原のある遊女屋で偶然近づきになつた僧侶の心境を語つたのが、五十年後に、年少作家龍之介の若い心に觸れて、かの小品となつた。

僧侶禪超は大通津藤に向つて語つてゐる。

「佛說によると、地獄にもさま〴〵あるが、凡先づ、根本地獄、近邊地獄、孤獨地獄の三つに分つことが出來るらしい。それも……大抵は昔から地下にあるものとなつてゐたのであらう。唯、その中で孤獨地獄だけは、山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる。云はゞ目前の境界が、直ぐそのまゝ、地獄の苦艱を現前するのである。自分は二三年前からこの地獄へ墮ちた。一切の事が少しも永續した興味を與へない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追つて生きてゐる。勿論それでも地獄は逃れられない。さうかと云つて境界を變へずにゐれば、尙苦しい思ひをする。そこでやはり轉々としてその日〳〵の苦しみを忘れるやうな生活をして行く。しかし、それもしまひに苦しくなれば、死んでしまふ外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのが嫌だつた。今では……」

ここまで語つて、禪超はまた三味線の調子を合せながら、低い聲で云つたので、最後の句は、津藤の耳には入らなかつたさうである。

年少作者龍之介は、この小話を述べたあとに、自己の感想を添加して、かう云つてゐる。

「一日の大部分を書齋で暮してゐる自分は、生活の上から云つて、自分の大叔父やこの禪僧とは、全然沒交渉な世界に住んでゐる人間である。又興味の上から云つても、自分は德川時代の戲作や浮世繪に特殊な興味を持つてゐる者ではない。しかし、自分の中にある或心もちは、動もす

ると孤獨地獄と云ふ語を介して、自分の同情を彼等の生活に注がうとする。が、自分はそれを否まうとは思はない。何故と云へば、ある意味で自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである」

私は、かつてこの小話を通して、幕末の僧侶禪超の心境を想望したのであつたが、今讀直すと、この小品が、暗示に富んだ筆で津藤と僧侶とを描寫してゐるのに氣づいた。母親から傳聞したただのお話の記錄ではないのである。

思ふに、この材料を充分に驅使して、僧侶禪超の生涯を、もつと具象的に細敍したなら、遊廓の背景や脇師の津藤の通人振りとゝもに、絢爛にして凄慘なる名作が現れた譯であつたが、芥川氏は、その短い人生行路に於て、さういふ材料を生かすほどの實驗を心身に吸收し得なかつた。……氏はかの小品に於ては、禪超の心の一端を瞥見して、ある理解を試みたのに過ぎなかつた。津藤の言葉として「これを嫖客のかゝりやすい倦怠(アシニュイ)だ」と解釋したりしてゐる。「酒色を恣にしてゐる人間がかゝつた倦怠は、酒色で癒る筈がない」とも云つてゐる。そしてその後の、、數年の作家生活の間にも、この材料を生かすほどの人生味は身に體し得なかつた。

「自分も亦、孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だ」とは、年少者が氣まぐれに口にする感傷語とばかりは思はれない。芥川氏の腦裡に嚴存してゐた感じであつたらしいが、その感じが歳を取るにつれてどう働いてゐたのであらうか。作品の上にどういふ風に現はれてゐたのであらうか。

二

小品「往生繪卷」も「孤獨地獄」と同じやうな意味で私には面白かつた。……五位の入道は、狩りの歸りに、或講師の說法を聽聞して、如何なる破戒の罪人でも、阿彌陀佛に知遇し奉れば、淨土に往かれると知つて、全身の血が一度に燃え立つたかと思ふほどに、急に阿彌陀佛が戀しくなつて、直ちに刀を引き拔いて、講師の胸さきへつきつけながら、阿彌陀佛の在所を責め問うた。そして、西へ行けと敎へられたので、彼れは「阿彌陀佛よや。おおい。おおい」と物狂はしく連呼しながら、西へ〳〵と馳せてゐたが、やがて、彼れは波打際へ出て、渡るにも舟がなかつた。「阿彌陀佛の住まれる國は、あの波の向うにあるかも知れぬ。もし身共が鵜の烏ならば、すぐそこへ渡るのぢやが、……しかし、あの講師も、阿彌陀佛には、廣大無邊の慈悲があると云ふた。して見れば、身共が大聲に、御佛の名前を呼續けたら、答へ位はなされぬ事もあるまい。さすれば呼び死に、死ぬまでぢや。幸ひ此處に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか」と、彼れは單純に決心した。そして梢の上で、息のある限り、生命の續く限り、「阿彌陀佛よや。おおい、おおい」を叫んで止まなかつた。……彼れはその梢の上でつひに饑死したのであつたが、その屍骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐて、あたりに異香が漂うてゐたさうである。

この小品の材料は、この作者が好んで題材を取つて來た今昔物語とか宇治拾遺とか云ふやうな古い傳說集に收められてゐるのであらう。その傳說が作者の主觀でどれだけ色づけられてゐるのか分らないが、私はこの小品を、「國粹」といふ雜誌で讀んだ時に、非常に興味を感じた。ことに、「孤獨地獄」と對照すると、藝術としての巧拙は問題外として、私には作者の心境が面白かつ

た。孤獨地獄に苦しめられてゐるある人間が、全身の血を湧立たせて阿彌陀佛を追掛けてゐると思ふと、そこに私の最も親しみを覺える人間が現出するのであつた。しかし、これ等を取扱つてゐる芥川氏の態度や筆致が、まだ微溫的で徹底を缺ぎ、机上の空影に類した感じがあつたので、私は龍之介禮讃の熱意を感じるほどには至らなかつた。

私は、この小品の現はれた當時、その讀後感をある雜誌に寄稿した雜文の中に書込んだ。……五位の入道の屍骸の口に白蓮華が咲いてゐたといふのは、小說の結末を面白くするための思付であつて、本當の人生では、阿彌陀佛を追掛けた信仰の人五位の入道の屍骸は、惡臭紛々として鴉の餌食になつてゐたのではあるまいか。古傳說の記者はかく信じてかく書きしるしてゐるのかも知らないが、現代の藝術家芥川氏が衷心からかく信じてかく書いたであらうかと私は疑つてゐた。藝術の上だけの面白づくの遊びではあるまいかと私は思つてゐた。

かういふ私の批評を讀んだ芥川氏は、私に宛てゝ、自己の感想を述べた手紙を寄越した。私が氏の書信に接したのは　これが最初であり最後でもあつたが、私はその手跡の巧みなのと、內容に價値があるらしいのに惹かれて、この一通は、常例に反して保存することにした。今手許にはないので、直接に引用することは出來ないが、氏は、白蓮華を期待し得られるらしく云つてゐた。「求めよ、さらば與へられん」と云つた西方の人の聖語を五位の入道が講師の言葉を信じて疑はなかつたと同樣に、氏は信じて疑はなかつたのであらうか。

私はさうは思はない。氏は、あの頃「孤獨地獄」の苦をさほど痛切に感じてゐた人でなかつたと同樣に、專心阿彌陀佛を追掛けてゐる人でもなかつたらしい。芥川氏は生れながらに聰明な學者肌の人であつたに違ひない。禪超や五位の入道の心境に對して理解もあり、同情をも寄せてゐたのに關はらず、彼等ほどに一向きに徹する力は缺いでゐた。

三

小說家として芥川氏は、新技巧派の一人として認められてゐた。氏は早くから文章家らしい文章を書いてゐて、幼稚なところも蕪雜なところもなかつた。私は、新潮社出版の現代小說全集中の「龍之介集」を通讀した時に、數十種の作品のうち、一つも出來損ねのないのに感心した。現代の文壇では稀れなる名文家であると思つた。しかし、有島武郎の作品に淸新なる技巧を見る如くには、芥川氏の作品から斬新な技巧を感受することは出來なかつた。夏目漱石の作品のやうに、明敏なる頭腦をもつていろ〳〵に趣向を凝らしてゐるに關はらず、文章は在來の日本の文章のやうである。「紅毛人の文學」に熟通してゐるらしいこの作者も、自己の文章には異國の情趣をあまり吸收してはゐなかつた。……私は、文章の形ばかりを云ふのではない。形は新しさうに見えても、新しい生命がどれだけ通つてゐるかと考察してゐるのである。

私は、氏を名文家として推讃するに躊躇しないが、傑れたる新技巧家であるとは思つてゐない。それから、年少にして孤獨地獄を感じてゐた芥川氏も、人間を見る目に於ては、つまりは平凡な有振れた人情を一歩も出でゝゐなかつたことを、氏の作物を讀みつゞける間に痛切に感じた。……これは、必ずしも氏を非難するのではない。氏は平凡な人情を脫却して、人生宇宙の現象を見ようと、いくらか藻掻いてゐたらしいが、その態度を徹底的には持し得なかつた。それだ

からこそ、氏の作品が世に迎へられたのであるし、古今の多くの文豪も、つまりそこへ落ちて安んじてゐたので、それでいい譯なのであらうが、津藤によつて語られて、芥川氏によつて片鱗を描かれて、われ〳〵の心にも映じてゐる「孤獨地獄」の主人公僧侶禪超の心境は、そんな生やさしいものではなかつたに違ひない。

試みに、「蜘蛛の糸」を見よ。「杜子春」を見よ。あるひは、作者得意の切支丹物のうちの「おぎん」を見よ。どれも、美しく敍述された物語である。そして、どれも有振れた人情に雷同して作爲された物語である。「蜘蛛の糸」の犍陀多は、生前の惡行のために地獄の底に墮ちてゐたが、たゞ一度蜘蛛の生命を助けたことがあつたのが、お釋迦樣の記憶に浮んで、その善行のむくひとして、地獄から救出されることとなつて、お釋迦樣の手から一筋の蜘蛛の糸が、その地獄の底へ下ろされた。犍陀多はその糸を見つけると歡喜して、それに縋つて天上へ上りかけたが、他の多くの罪人も彼れに習つてその糸に縋りついた。彼れは、多人數の重みで糸の中斷することを恐れて、「この蜘蛛の糸はおれのものだぞ……下りろ下りろ」と喚いた。すると、その途端に、蜘蛛の糸はぷつりと切れて、犍陀多は眞逆さまに暗の底へ落ちてしまつた。……つまりは、自分ばかり地獄からぬけ出さうとするこの男の無慈悲な心が、その心相當の罰を受けたといふのである。作者はここで、極り切つた秩序ある世界をやす〳〵と受入れて、そこに何等の懷疑の苦をも感じてゐない。書振りが童話として書かれたらしく思はれるが、作者の心持までも童話の世界に安んじてゐる。私はこの頃「ガリバア旅行記」を讀直したが、ここに描かれた童話の世界を見詰めてゐると、寒風に肌の擘かれる思ひがされる。それに比べると、「蜘蛛の糸」などの童話の世界は、ストーブで溫められた溫室的書齋での假寢の夢に過ぎないやうに思はれる。……無論溫室の夢も藝術として價値があるのに違ひない。私は、「蜘蛛の糸」をも愛讀した。たゞ、私は、「孤獨地獄」や「往生繪卷」以來、芥川氏に對しては、世界の文壇の常套的藝術以上のものを期待してゐたために、不滿を感じたのである。

「杜子春」は支那の傳奇の飜案とも云つていいもので、龍之介集中の傑作の一つであるが　型の如くに事が運んでゐて、「私は仙人にはなれません。しかし、私はなれなかつたことも、反つて嬉しい氣がするのです。いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、默つてゐる譯には行きません」と、杜子春は最後に夢から醒めたやうに云つて、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、誓ひを立てゝゐる。……かういふ程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安じてゐたのであるか。それなら、禪超の「孤獨地獄」の惱みは、そこになかつた譯である。

「おぎん」は、自分一人天國の門へ入るよりも、天主のおん敎へを聞く機會のなかつたために地獄へ墮ちてゐる筈の兩親の跡を追つて、自分も地獄へ落ちようと決心して切支丹の敎へを棄てた。……作者はここでも人情に安んじた。讀者もここに描かれた人情に感動して涙を落すのである。

芥川氏は、屢々題材を古傳說から取來つて、人情を說いてゐる。溫室のなかで文學讀者を集めて、巧みな言葉で人情を說いてゐる。「山間曠野樹下空中、何處へでも忽然として現はれる」と、禪超の云つた「孤獨地獄」は、その溫室に於ける作者の眼前には現はれなかつたのである。無論

溫室の屋外に、幾億萬由旬に渡つて吹きすさんでゐる寒風は、作者の耳には響かなかつたのである。

四

芥川氏は、切支丹物と稱せられる變つた物語を幾つも創作して、讀書人の注意を惹いた。自然主義以來の常套に習つて、凡庸貧弱な自己の日常生活を書く外に能のない多くの新進作家に比べると、芥川氏の態度は、遙かに賢明であつた。藝術的天分の傑れてゐたことも證明される。そして、氏は、それ等の古い物語を、たゞの古い物語として書いてゐるのではない。それ等に於て、いろ〳〵に人間の心の動きを洞察してゐるのだ。藝無しの身邊雜記作者以上に、自己の心をそこに現はしてゐるのだ。「奉教人の死」「るしへる」「おしの」「きりしとほろ上人傳」など、いづれも完成したる藝術品である。「保吉の手帳」など、作者自分の現實の生活記錄よりも、一層よく作者自身の面目を現はしてゐる。(私は、保吉といふ男を主人公とした小說は概して藝術價値の低いものだと思つてゐる)しかし、切支丹迫害時代の壯烈悲痛の逸話を取扱ひながら、稍々もすると、一般の人情の發露、あるひは逆說的心理の摘出を試みたに止まつてゐるのに、私は多少の遺憾を覺えてゐる。作者は「孤獨地獄」の苦惱の一端を覗いたに過ぎなかつたと同樣に、迫害された切支丹信者の壯烈悲痛の心境、あるひは夢幻的歡喜の境地に、自己の心を浸染させてゐたのではなかつた。……文學はそれでいゝので、文學の本領はそこにあるのかも知れないが、さうすると、文學は要するに知惠の遊びに過ぎないやうにも思はれる。

知惠の遊びとして、芥川氏の技巧の妙を見るべきものは、切支丹物では、「報恩記」を最上とする。「藪の中」など二三、同じ趣向の立て方を試みたものがあるが、「報恩記」に於て、最もよく作者の藝術的手腕の冴えを見せてゐる。傑作の一つである。

しかし、これよりも、一層傑れてゐると思はれるのは、「地獄變」である。私は自分が讀んだ範圍內では、この一篇を以つて、芥川龍之介の最傑作として推讃するに躊躇しない。明治以來の日本文學史に於ても、特異の光彩を放つてゐる名作である。氏の多くの切支丹物や、王朝物は、知惠の遊びに過ぎないところがあつて、一度は着想と奇才に感歎しても、二度三度繰返して讀むと興味索然たることもあるが、「地獄變」は今度讀返して一層深い感銘を得た。芥川龍之介の持つて生れた才能と、數十年間の修養とがこの一篇に結晶されてゐる。聰明なる才人の知惠の遊びではない。心熱が燃えてゐる。夏目漱石や森鷗外に似て、いくらか型が小さいやうに思はれるところがないでもないが、この「地獄變」一篇は、鷗外漱石の全集中にも斷じて見難いものであると確信してゐる。私が藝術の上からのみ批判してかういふのではない。「孤獨地獄」や「往來繪卷」に一端を示したこの作者の心境がここでは渾然として現はれてゐるのに、ある尊さをさへ感ずるのである。……私は芥川氏の日常生活を知らない。氏が家庭に於て社交に於て、どういふ言葉を口にし、どういふ行動をしてゐたか知らないが、さういふ外形の生活はどうであらうと、氏が、良秀の「地獄變の屏風」完成の由來をここまで見たことは、氏自身が持つて來た心力の限りを盡くして、世界を見たやうなものである。……普通の人情や逆說的心理の摘出にのみ拘はつてゐた氏も、ここでは假面を脫した人間生存の姿を見たやうなものである。「現代小說全集」の目次を開い

て見ると、「地獄變」の作られたのは、大正七年のことである。氏が三十歳に達した頃であらう。そんなに若くつて、かういふ大作を著はしたことに、私は驚歎してゐる。

氏の如き神童型の作家の晩年は自から推知されるが、最近數年間の氏の作品に、私は痛ましき衰頽の影を見てゐた。「改造」に連續されてゐた文藝評論などは、多くは氏の頭腦の混亂が示されてゐた。

五

曲亭馬琴を題材とした「戯作三味」のなかに、錢湯の中で、入浴中の馬琴に當りちらしてゐる男の言葉として、

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一點張りでげす。まるで腹には何もありやせん。あれはまづ寺子屋の師匠でも云ひさうな、四書五經の講釋だけでげせう。だから又當世の事は、とんと御存じなしさ。それが證據にや、昔の事でなけりや、書いたといふためしはとんとげえせん。お染久松がお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口眞似をすれば、そのためしさはに多かりでげす」と云つてゐる。

作家の好みはさまざまである。お染久松を「松染情史」として書かうとも、自己の生活の直寫をしないで、王朝物や切支丹物に於て人間を書かうとも、それは作者の自由である。しかし、芥川氏は、現代の寫實に於ても、可成りに傑れた技倆を現はしてゐる。「秋」には若い姉妹の心の動搖が巧みに描かれてゐる。ことに、「一塊の土」はいゝ。「地獄變」と相並んで、この作者の全作中で、最高位に立つものである。お民といふ田舍女の忍苦の生涯には、作者自身の心が動いてゐる。そして、自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗談がない。……私は、數年前「新潮」に掲げられたこの小說を、故郷で讀んだ時、芥川君もこんなに現代の寫實に巧みであるのかと感歎して、直ちに讀後感を書いて、「文藝春秋」に寄稿したことがあつた。……しかし、この小說以後の芥川君の作品には殆んど一つも感心しなかつた。

谷崎潤一郎氏の藝術觀には、強い自信が現はれてゐる。力がある。芥川氏のには、頭腦の混亂が現はれ、懷疑の惱みも見られる。谷崎氏は、かつて、熊谷直實が、淨土のある西方に背を向けるのを憚つて、逆さまに馬上に跨つて歩を運んでゐたその敬虔なる心構へに感服し、自分にはさういふ宗教心はないが、藝術の美に沒頭して安んじてゐるといふ意味の感想を、ある雜誌に述べてゐたが、芥川氏は、さういふ藝術至上主義者ではなかつた。禪超や五位の入道や良秀について無關心ではゐられない人であつた。私が以前から氏の作品に共鳴を感じてゐたのはその點であつた。

聰明であつた氏は、谷崎氏のやうな自信を缺いでゐたのであらう。自己批判に疲れたのであらう。（八月八日輕井澤にて）

蘇峰と蘆花

一

近來、新たに明治文學に親しんで來た私は、小說を主流とした純文學の領域以外に、明治時代の思潮に關係の深かつた文學はどういふ種類のものであつたかと回顧した。

政治宗教哲學などの方面にも能文の士は少くなかつた。現代では、思想の發表には內容を臚列するだけで、文章によつて內容の裝飾を試みるものは、殆んどなくなつた。美辭麗句の力を借りて讀者を感激させようと企てるものは見當らなくなつた。これは當然の傾向であるが、しかし頭腦が聰明であれば、所論も自から明晰であらうし、心が熱情に富んでゐれば、文章にも自から熱と力が現はれる譯である。この頃の雜誌などに現はれるいろ〳〵な論文の多くが勃窣無味で、樣によつて葫蘆を描いた感じのするのは、論者の頭腦心熱に至らざるところのあるためであらう。感激のない文章ばかりが續出してゐる。

「蘇峰文選」の卷頭の題字の「辭達而已矣」といふ言葉は、古來漢文家の金科玉條としてゐた言葉の一つであつて、德川時代の文章家も筆を執るに當つて、それを心掛けてゐたのであつたが、しかし、それは空疏な信仰に留まつて、漢文系統の文章家は、實際は內容はそつちのけで、文字の粉飾に多く苦心してゐたのであつた。實感を直寫したゞけで滿足するやうなことは稀れだつた。

明治時代の學者論客も、思想を現はすに文字に捉はれて、しかも古い文字によつて、內容に乏しい思想を飾るのを常例としてゐた。そして、みんなが、直截な新しい表現法を採るやうになるまでには、いろ〳〵な人々がいろ〳〵な文體を試みたのであつた。

明治初期の福澤諭吉氏、明治中期の德富蘇峰氏などは、純文學者以外で、新文體を創始した代表的文章家である。それで、私は年少の頃、極度に愛誦してゐた蘇峰氏の作品を、久振りに讀直さうと思立つた。今日の年少の讀書子には何の感じも與へないであらうが、明治二十年代——ことに、その上半期——には、「民友社」といふ名前そのものが、清新な感じを少年の心に起させてゐたのであつた。明治初期の福澤氏が多分さういふ力を有つてゐたのであらうが、私などのやうに明治二十年代に少年期を過し旺盛なる讀書好學の念に燃えてゐた者は、民友社の魅力に化せられないではゐられなかつた。

私は、今度第一に改版の「靜思餘錄」を買つて讀んだ。昔「國民叢書」として續刊された蘇峰文集中の一篇で、小型の赤表紙本で、定價も十錢か十五錢であつたのだが、改版本は、表紙の色も形も違つてゐるので、手に取つても、懷しみがなかつた。定價も二圓になつてゐる。初刊後殆んど四十年を經た今日の時代にも、かういふ書物がまだ賣れるのであらうかと、私はまづ疑ひを挿んだ。この改版本の序文に於て、著者は、「靜思餘錄と第二靜思餘錄の兩冊の刊行部數は、十萬以上二十萬の近きに上つた」と云つてゐる。「不如歸」のやうな通俗小說なら兎に角、感想文集に過ぎない書物が、讀書社會の狹隘であつた數十年前の日本で、こんなに多量に賣捌かれたことは、異例であつたに違ひない。それほど當時の靑年讀者を捉へる力を有つてゐたのである。

私は、十四五歲の頃には、この「靜思餘錄」と、內村鑑三氏の「愛吟」といふ歐米の小詩の飜譯集との二冊を、綴ぢ目のほぐれるほどに日常讀耽つたものである。そのうちの多くを暗誦してゐた。今度私はこの文集を讀直すと、幼年時代に學んだ小學讀本を讀直すと同樣な感じがした

が、それと〻もに、かういふ文學の歡迎された時代の若さに思ひ及んだ。「人間は環境の產物であると同時に、また年齡の產物だ。老大にして少壯の感興を會せず、少壯にして老大の趣味を解せず。均しく同一人なるも、吾自ら吾を疑ふもの、洵に己むを得ぬ次第といはねばならぬ」と、著者自身、改版本の序文で云つてゐるが、讀者たる私も、同樣に感じた。何故かういふ文章を熱愛したのであらうかと、吾自ら吾を疑ふ氣持がした。著者の自信してゐた如く、これ等の文集には、「平凡なる思想あらん。しかれども不健全なる思想は決して無し」と云つていいのであるが、さういふ平凡健全な思想に、當時の青年讀者が感激したのは不思議である。實際今讀むと、平凡な常識以上の內容は些しも含まれてゐないのだ。內村氏の著書には、兎に角熱烈なる基督教の思想が籠つてゐたのだから、我々の若い心に影響を及ぼしたのも當然であつたが、蘇峰氏からはどういふ意味で感化を受けたのであらう。藩閥打破、平民主義の鼓吹などに、私は共鳴した譯ではなかつた。雜誌記者新聞記者としての蘇峰氏の政治論に感動したのでもなかつた。詰るところは、あの新體の文章に隨喜渴仰の涙をこぼしてゐたのであらう。氏の文章にも詩があつたのだ。「嗟呼汝快樂を求むる耶。遑々然として迷兒を沙漠に尋ぬるが如し、慌々如として遺金を街頭に探るが如し。人は快樂に生れて苦痛に死す豈に憐む可からずや。それ快樂は求め得られざる耶。求め得可きものは、快樂と爲すに足らざる耶。快樂は求むる場所に在らざる耶。求め得たるものは、快樂の香味を失ふ耶」

かういふ調子づいた文章が、當時の我々の耳には音樂のやうに響いたのであつた。飜譯聖書の稚拙ながら斬新な語調を眞似たところにも新味があつた。マコーレー曰はくとか、カーライル曰はくとか、盛んに歐米人の所說を引用してゐるのも、青年に迎へられる所以であつた。

明治二十年代は、和洋新舊の文脈が雜然として、人さま〻に混亂してゐた時代であつて、今の目で見たら、誰れの文章でも幼稚で、調つてゐなかつた。そして、そのうちでは、バタ臭い民友社調が、若い讀者には淸新に感ぜられたのであつた。同じ模倣にしても、硯友社は德川文學の模倣であつたのに、民友社は西洋模倣の分子に富んでゐたのが我々を喜ばせた。カーライル曰はく、アーノルド曰はく、ビツト曰はくの方が、江戶の通人の物眞似よりも面白かつた。

あの頃は蘇峰氏も若かつた。日淸戰爭の「變節」は、氏が日本の現實に接觸して心が大人びて來た結果であらう。

二

時代の關係で蘇峰初期の文章を愛讀してゐた私も、蘆花の作品には殆んど親しまなかつた。數年間、民友社のレツテルのついてゐたものは、殆んど全部購讀してゐた時代があつて、「コブデン」「ブライト」「グラツドストン」など、蘆花によつて飜譯された史傳をも譯も分らずに通讀してゐたこともあつたが、「自然と人生」や「不如歸」によつて、獨得の地位に立つやうになつてからの彼れの作品には殆んど目を注がなかつた。この頃になつてやうやく、「黑潮」や「思出の記」や「富士」などの一端を覗いてゐるのに過ぎない。そして、作品そのものには、不滿を感じながら、德富兄弟の對立については、いろ〳〵な興味を覺えてゐる。

私は子供を有つてゐないので、子供に對する親としての感情は微かに分らないが、兄弟は多過

ぎるほど多いので、その間の心理狀態はよく分つてゐる。カインとアベルの關係も推測されないことはない。不快なる人生々活は、まづ兄弟關係から一歩を踏みはじめるやうなものである。古い聖書のいろ〳〵な記事の眞に徹してゐることを、私は歳とゝもに痛切に感じるのである。蘆花最後の大作「富士」には、この兄弟間の離合反目愛憎好惡が隱すところなく寫されてゐて貴民友社に心醉してゐた私達をして、著しく幻滅を感じさせるのである。田山花袋氏を祖師とした自然主義系統の小說は、在來の道德の標準や美醜の標準から脫却して人間の眞相を有りのまゝに描き出すのを特色としてゐたが、今から見ると、それほど激しい現實暴露をやつた譯でもなかつた。却つて、「不如歸」の著者の晩年の小說の方が、もつと猛烈な赤裸々の描寫を、自己と周圍を題材として試みたのであつた。花袋藤村氏などの現實描寫には、人情に驅られた感傷味に富んでゐるし、秋聲氏の作品だつて、以前のものには謹ましやかなところがあつた。蘆花の「富士」は、それに比べると、むしろ無慙と云つていゝ。年を取つてからの作品であるせいか、見榮も外聞もないと云つたやうに色氣がない。「夫婦で裸で銀座の大道を歩くやうな氣持で書いた」と宣傳されてゐたが、さういつた趣きがあつて、私は讀みながら面を背けたい思ひをしたところもある。支那のある新しい女は、舊風俗を打破しようといふ意氣込みで身に一絲を纏はず赤裸々で上海の街上を練り歩いたさうであるが、蘆花の「富士」はそんな感じがする。藤村の「新生」は、あゝいふ材料が詩に化けてゐるので、讀者に親まれるが、「富士」には何の粉飾もない。餘計な粧飾のないのは、むしろ推賞を價ひするのだが、感情が干涸らびて、主觀の嚴肅さをも缺き、描寫が粗雜であつて、私は、讀みながら藝術品に接してゐるやうな感じはしなかつた。「自然と人生」などに漂つてゐた豐かな詩趣も晩年には全く涸れてしまつた。いくら忌憚なき眞實の敍述であつても、かういふ風に取扱はれたなら、材料にされた人間は、迷惑だらうと思はれる。蘇峰氏もこんな弟を持つたために、尊嚴を傷けられたのである。私は氣の毒に感じた。……これは他所事ではなくつて、私自身もをり〳〵過去を顧みて、おのれを責めることがあるが、自分を裸にするのは勝手であるとしても、他人の衣服までも無理强いに脫がせることが、正しいことであらうか。作者自身の觀察が萬能の神の如く完全無缺である譯はないのだから、作品のモデルにされた人間は、尙更迷惑である。

かつて蘆花夫妻が　その緣者たる八十以上の老女を訪ねて「裸になつて自己告白をしろ」と强要したといふ噂を聞いた時、僭越無法の振舞だと私は感じた。若しもその勸告が用ひられて、八十の婆さんが裸で白晝の大道を歩きだしたらたまらないではないか。

「富士」の創作の態度には私は感心しない。そこには、著者の邪推の目のあまりに働き過ぎてゐるのを私は感じた。しかし、作者が勢一杯事實を書かうと努めたことだけは否み難い。したがつてそこに現はされてゐる親子兄弟夫婦親戚緣者の交錯した世相に、我々自身の肉親關係の影が見られないでもない。人間生活の煩はしさが推察される。ことに、私などが年少の頃崇拜し憧憬してゐた蘇峰先生や民友社の裏面の消息が細かに說かれてゐるのが、私の興味となつた。「國民之友」が出て、「國民新聞」が出て、新興文學の源泉の如く、我々をして仰ぎ見させてゐた當時の民友社も、その內面は天國ではなかつた。遠く隔れて、その社から配附される新聞雜誌新刊書類を耽讀してゐた我々少年の心の中にこそ天國は宿つてゐたのだ。……現今の文壇と田舍の文學少年

との關係も同樣であらう。

私は、小學卒業後一二年間山閣の私塾に學んでゐた。そこの學生は擧つて民友社本の愛讀者であつた。私は、國民新聞の久保田米僊氏の劇評を通して團菊の舞臺を想望してゐた。蘇峰先生の「熱海だより」を讀んで、夢の世界に誘はれてゐた。「上に遊禽の囀ずるを聞き、下に淸瀨のむせぶを聞き、ヲルズオルスの詩を口すさみ候」といふ一節に、私の村塾に於ける生活が美しく描かれてゐるのを見た。同じ民友社黨であつた同窓の人々と私と異つてゐたのは、私が「國民之友」のうちから基督敎を見つけて、その敎に心を寄せるやうになつたことであつた。

私は、獨りで聖書を讀み、內村鑑三先生の著書に耽溺しだした。あの頃が、私の一生のうちで、最も敬虔で純潔な時代であつたかも知れなかつた。しかし「國民之友」や「國民新聞」は頻りに私の上京慾を唆かした。

三

私は蘇峰氏の思想よりも、その文章に心醉してゐたのであつたと云つたが、氏は文學的素質、あるひは詩人的素質に於て、天性か令弟に讓つてはゐなかつた。弟蘆花は無器用であつたために、現友社一派とは違つた素朴な味ひを文章の上に現はしたのであつたが、兄蘇峰氏は才氣に任ませて書きなぐつたために、時世の變遷に堪へるやうな名文章は遺し得なかつた。「實用以外に何等の文學的抱負もなく自信もなし」と云ひ、「予の立言の目的は、所謂對症應急にありて、固より百載の必傳を期せず」と云つてゐる如く、その日に讀み棄てられその月に讀み棄てられるのを覺悟して書かれたに過ぎなかつたが、しかし、「自然と人生」中の諸篇に匹敵するくらゐなものは、氏の文集に見つけられないことはない。小說を書く氣があつたら、氏だつて、「黑潮」くらゐなものは書けたに違ひない。「宗敎上には眞理の探討者、戀愛は敬遠して、家庭には多きを求めず、ひたすら公的に生くるといふ態度を兄は執つた」と、「富士」のなかに書いてあつて、蘇峰氏のやうな肌合ひの人は多分さうであらうと、一般的には思はれるが、「富士」の敍述を讀みながら言外に推察の目を注ぎ、また、大部の「蘇峰文選」を通讀してあとで考へると、必しもさうではなさゝうだ。蘇峰氏が宗敎上の眞理の探討者であつたことに、私はまづ疑ひを挿む。氏も周圍の關係から、若い時分宗敎の門を覗いたことは覗いたが、雲の彼方のことに思ひを凝らすべく、氏はあまりに俗界に興味を有ち過ぎた。「戀愛を敬遠した」とは、氏自身も、をりに觸れて屢々口にしてゐたらしく、自から木强漢を以つて任じてゐたらしかつたが、氏だつて戀愛の情趣を感じない人ではなかつた。私は、夏目漱石の晩年の數種の長編を讀んで、彼れが男女關係について人一倍思ひを勞してゐたのを知つたが、蘇峰氏だつて、異性に對して無關心でなかつたことを、その文集のうちから推察するのである。賴山陽門下の女詩人江馬細香の詩集、「湘夢遺稿」の批評の如き、女性の心理に關する微細に渡つた的確な觀察が試みられてゐる。細香と山陽との詩を列擧して解釋し批判してゐるのが一篇の情史一篇の戀愛小說のやうな感じがする。私の見た限りに於ては、蘆花氏の小說に、これだけに戀愛の情趣の語られてゐるものはなかつた。「近世國民史」に於ても、人情の機微を見る小說家的觀察は少くないのである。氏は蘆花氏の如く自分を裸にして現はさうとはしなかつたが、史上の人物などについて說きながら自己の影をそこに映した。

「利口な兄」に對して「愚かな弟」として、幼少の頃を過した蘆花は、偶然「不如歸」で當りを取つて以來、兄を凌ぐほどの文名を得た。何と云つても小説の方が評論よりも讀者に喰入る力を强く有つてゐる。そして、通俗味を有つてゐる點では、氏等兄弟はよく似通つてゐる。蘇峰の論文に深遠な思想の宿つてゐなかつた如く、蘆花の小説に深刻、鋭利な人間描敍は見られないのである。民友社で育つたゝめに、現友社型の戯作家氣取りに墮しないで、無骨ながらも清新なところがあつたが、「不如歸」だつて、「黑潮」だつて、卑俗である。「黑潮」にあの頃の社會が描かれてゐると思つてゐる讀者は、伊藤痴遊の講談によつて明治初期の社會を見てゐる人々と同樣である。

小説家として蘆花の才能は決して豐かではなかつた。多く俗界に關心してゐた蘇峰氏とは違つて、仙骨を帶びてゐたらしく思はれてゐるが、空想力は乏しかつた。世相や人間を客觀的に描寫する手段も傑れてゐなかつた。それ故、「不如歸」「黑潮」など二三を除いたら、自傳風のものを書くより外、爲方がなかつたのであらう。小説といふよりも單なる旅行記に過ぎないものが多い。「富士」に描かれた兄弟關係の如きは、事實として、小説の材料としての洞察力はそこに見られないのである。漱石の「行人」はさすがに違つてゐる。材料をそのまゝに敍したのではなくつて、作者の空想裡の産物なのであらうが、それでも、人間の心の奥の奥を見ようとする目が光つてゐる。兄の弟に對する猜疑には凄いところがある。兄嫁に對する弟の不即不離の感情に微妙なところがある。そして、作者の主觀は嚴肅である。「富士」の方では　事實の興味に惹かれながらも、讀んでゐて、屢々不快な感じに襲はれる。たゞ醜い感じだけのするところが少くない。夫人との共著であるためか、文章の甚だお粗末なところがある。漱石と蘆花とは共に流行作家であつたのだが、その藝術の素質は異つてゐた。

蘆花の小説のうちでは、「思出の記」が最も傑れてゐる。そして、彼れの天分に適應してゐる作品は、「みゝずのたはごと」のやうなものであらう。「不如歸」が當つたゝめに、小説家として進んで行つたのだが、本來は「自然と人生」の系統を追つて行つた方が柄相應であつたのだ。

四

私は日清戰爭後に上京したのであつたが、新橋に出迎へて呉れた友人に連れられて、横寺町の下宿へ落付く途中、神樂坂の雜誌屋で、「國民之友」を買つた。數日後に、神田の青年會館で、蘇峰氏の演説を聽いた。日頃崇拜してゐた偉人の風丰に接して、その演説を聽く機會を、上京後間もなく得たことは、どれほど私を感激させたか知れなかつた。しかし、上京後半歳も立たぬ間に、私の民友社崇拜熱は醒めてしまつた。蘇峰氏が平民主義を棄てゝ藩閥に下つたといふ噂が盛んであつたが、私はさういふ政治上の意味に拘はらないで、民友社に對する感興を失つた。今、「靜思餘錄」や「蘇峰文選」を讀直して考へると、あの頃私が蘇峰氏の文章に興味を失つたのは、私の頭腦の發達を證明してゐるので、あゝいふものは少年期の讀物たるに過ぎない。蘇峰雪嶺樗牛桂月などは、明治時代に相續いて年少の讀書子の感激性を刺戟した文章家であつたが、今日ではこれ等の人々の地位を繼紹してゐる人は誰れであらうか。

かういふ種類の文人は、今は跡を絶つたやうに思はれる。河上肇とか大山都夫といふやうな人人の論文は、熱心に現代の青年に迎へられてゐるやうであるが、これ等諸氏はある問題を理論的

に討究するだけを本領として、往年の蘇峰氏くらゐな詩趣をもその文章には見出しがたい。時代は進んで來て、最早文章の力で感動させるやうな稚氣を脱して、理窟一點張りで押して他を動かさうとするやうになつたのであらうか。

「蘇峰文選」の中のある一章に、「今日の憂の一は、國民に英雄崇拜心の消磨せんとするにあり」と歎じてゐるが、それは蘇峯氏の英雄視してゐるものを、崇拜する者が少くなつたゞけなのではあるまいか。人間はいつの世にもいかなる形に於てか、英雄を崇拜しないでゐられないのである。英雄に雷同しそれに引づられて行くものである。

蘇峰氏もかつては、言論家として一個の英雄であつた。しかし、內閣の壽命と同樣に、言論界の英雄の壽命もさう長くは續かないのが浮世の常である。私は短き一生に於ても、英雄崇拜の形がいろ〳〵に變つて行くのを見た。一世を指導して自から英雄にならんと志した人々が、新陳代謝してゐるのを見た。平民主義から國家主義に轉じた蘇峰氏が、假りに何かの刺戟によつて社會主義とか共產主義とかに轉換すると假定しようにも、さうなるには、頭腦がすでに硬化してゐる。新奇を喜ぶ青年に顧みられなくなつた譯であるが、古今東西の歷史に通じてゐる氏が人間が新を好み變化を好む生物であることに氣付かないでゐるとしたら迂濶である。「唯眞故新」なりといふことも人生に於ける一面の眞理ではあるが、「唯新故眞」なりといふことも眞理である。人間の食慾愛慾所有慾は古今を貫いて同樣であつても、その外形のあらはれが、時により處により形を異にする如く、思想や主義の論爭も、畢竟外形の相違に過ぎないことが多い。蘇峰氏が平民主義を唱へたのも、新を好む若い心から出たので、當時の新を好む青年がそれに雷同したのだ。今日のいろ〳〵な新主義も、新を好む人心の現はれに過ぎないので、蘇峰氏などの昔の新人が危んだり歎息したりするのは、人間の老いを現はすのに過ぎない。今日の新は明日は古臭くなるのに極つてゐる。「新を追ふて地獄までも行く」と、ボートレール（?）が云つてゐるが、長く青年の崇拜を得ようと思へば、絕えず新味の發揮を志してゐなければならない。

老人は精神が硬化して、思想も文章も固定するのを例としてゐる。先日、久振りに德田秋聲氏に會つて、長時間行動を共にして、食つて歩いて話したのであつたが、その間に、氏は屢々「モダーン」といふ言葉を口にしてゐた。私が心身の衰頽を歎ずるのに對して、「人間は老いてゐても、心に若い芽が萠えるものだ」と力說してゐた。氏の生活には永久の若さがあるのかも知れない。ゲーテなどは老いを知らない永久の青年のやうであつた。それでこそ、長く青年の崇拜を失はないでゐられるのであるが、しかし、青年は夢に富み詩に豐かな筈である。乾燥無味な理窟一點張りで滿足し得られないのが、いつの世にでも青年としての自然の本性である。その作品のうちに隱然勤王を皷吹したといはれる賴山陽は、その政治論にも歷史にも、多くの詩を含んでゐた。明治の青年を感激させた蘇峰樗牛桂月、あるひは內村鑑三氏などの所論にも、今日の目には幼稚に見られるにしても、兎に角詩を含んでゐる。ところが、今日は政治論社會問題論は云ふまでもなく、文學評論でも、多くは砂利のやうな文字の臚列で、どれも〳〵讀みづらい。かう堅くるしく述べなければ、所信が發表されないのであらうか。

五

私が數十年の間を置いて、新たに蘇峰氏の述作に親しみだしたのは、「近世日本國民史」が刊行

されるやうになつてからである。その日その月の要求に應じるのを立言の目的として、「百載の必傳」を期しなかつた氏も、老境に達したので、過去の長い文筆生活に不滿を感じて、自己の紀念碑を自から刻んで不朽を遺さんと企つる氣持になつたのであらう。氏としては最も適當な題目を選んだ譯である。坪内博士の沙翁全集の飜譯と同樣である。

餘生幾干もないといふ感じは、現世に、何等かの形に於て自己の影を留めたいといふ慾念を誘起すものらしい。逍遙蘇峰兩先生の如きは、自己の一生の蘊蓄を傾瀉するに適した題目を選ばれたのだから幸福である。

私などは、まだ自己の印象を後世に遺したいといふやうな感じを意識的に起したことはないのであるが、もつと年を取つたらさういふ氣持になるかも知れない。あるひは、今だつて、自己批判がもつと鋭利になつたら、心の底に、現世に於ける自己の不朽慾の潜在してゐるのに氣づくかも知れない。

しかし、「現實」を知らんと努めて來た私も、「この世はついの住み家にあらず」といふダンテによつて代表された中世紀の感想を全く脱することは出來ない。これが迷妄であらうとなからうと、紛々たる現實の事相を嫌惡し、あるひは狐獨の寂寥に沈んだ折々、旱燥時の雨露の如く、心に一點の慰藉を與へられるのは、この夢のやうな思ひである。

少年期に受けた感化は一生を支配するのであらうか。あの頃現實主義の「民友社」の感化を受けてゐた筈の私は、北村透谷を主とした所謂高踏派の「文學界」にも共鳴し、新しい基督教の空想にも動かされてゐた。爾來世路の經驗を重ね修養を積んで來ても、少年期に心に芽ぐんだものの、霜にも風にも耐へてまだ枯れ切らないでゐるのに氣づくことがある。（五月二十七日）

森鷗外について

一

「小說は澤山讀む。新聞や雜誌を見るときは議論なんぞは見ないで、小說を讀む。しかし若し何と思つて讀むかと云ふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は、此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云ふ心理的狀態で書いてゐるかと云ふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとか云ふ積りで書いてゐるものが、却つて悲しかつたりするものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いてゐるものが、却つて悲しかつたりする」

森鷗外は、「キタ、セクスアリス」(明治四十二年の作、時に、作者四十八歳)のうちにかう書いてゐる。彼れが、當時の日本文壇の作品を、內心馬鹿にしてかゝつてゐたことは、これによつて察せられる。

「そのうち自然主義と云ふことが始まつた。金井君は此流義の作品を見たときは、格別技癢をば感じなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。云々」と、同じ小說のうちに書いてゐる。

日本の自然派と自稱する作家どもが、みんな一樣に色情狂見たいなことを書いて、「これが人生だ」と云つてゐるのを、不思議に思つた彼、鷗外は、ふと、「自分の性慾的生活の歷史を書いて見ようか」と思立つて、この異色のある「キタ、セクスアリス」の一篇を作上げたのであつた。二葉亭四迷の「平凡」も、當時の自然派作者の性慾描寫に刺戟されて思立つたものらしかつたが、しかし、「平凡」には、舊文學の臭ひが附纏つてゐた。鷗外の古い感情から脫却した明確適切な描寫とは、類を異にしてゐた。

全體、この「性慾史」ばかりではなくつて、鷗外の後半生の小說と戲曲とは、當時の自然派に刺戟されて出現されたのであつた。自然派の作品を馬鹿にしながら、「おれも書いて見よう」といふ創作慾を、彼れは起したのであつた。彼れが前半生に試みてゐたいろ〳〵な近代歐洲文學の飜譯は獨步花袋藤村など當時の文學青年に淸新な感化を與へ、舊套を脫した新文學の發生する原因の一つとなつたのであつたが、後では、鷗外自身が、知らず識らず獨步花袋藤村などの感化を受けた譯になるのである。私はそこに面白みを感じてゐる。「藝術品に對する要求が高いために容易に取り附けなかつた」創作の筆を自由に揮つて、鷗外として文學的事業を史上に留むるやうなつたのは、自然派の刺戟があつたためであつた。島村抱月が、歐洲に留學して學んだものよりも、日本の自然主義の氣運によつて、心の扉が開かれたと同じやうに、鷗外も、長年月の間に讀破し來つた種々雜多な歐洲文學よりも、日本の若輩の、彼れの目からは浮薄低劣に思はれる新文學の作風によつて、自己の天分と學殖とを藝術の方へ傾瀉すべき戶口を見つけたのであつた。それが、「遊び」氣分であつたにしろ、馬琴の所謂「有用な書物の購求費のために書かれた無用な文」であつたにしろ、私などは、後半生の創作に於て、鷗外に重きを置くやうになつてゐる。「現代日本文學全集」中の鷗外集が、初期の數種の短篇小說の外は、飜譯ばかりで埋められるやうだつたら、いかばかり淋しいことであらうか。私は、彼れの學殖の深さ淺さはよく知らないし、またそ

んなことはどちらでもいゝと思つてゐる。しかし、その創作は、讀みつゞけると、滾々として盡きざる興味が覺えられる。私は人生の事と文學の事について、彼れの作品から學ぶところが少くない。

二

私は、年少の頃「國民之友」で讀んだ「舞姫」と、「水沫集」で讀んだ「文づかひ」と「うたかたの記」とを、久振りで讀直した。そして、わが生の若かりし夢を偲んだのであつた。今讀んでも、好短篇として翫賞し得られるものである。「わたくしは少年の時、貸本屋の本を耽讀した。……讀本、書本、人情本……さういふ本を讀み盡くして、さて貸本屋に、何かまだ讀まない本は無いかと問ふと、貸本屋は隨筆類を推薦する。……わたくしは貸本文學卒業者になつた」（細木香以」のうちに）と、自から云つてゐるほど、江戸文學に熟通してゐたのに關はらず、逍遙露伴紅葉その他同時代の他の多くの作家のやうに、舊幕時代の舊い文學に感染されてゐなかつた。

これ等の三篇は、いづれも歐洲留學紀念の作品である。若かつた鷗外は、異鄕の土地と人とを題材として、自己の青春の夢を語つてゐるのであるが、これを、紅葉が、「三人妻」や「伽羅枕」などに、江戸情調の遊女女妓を憧憬し空想して、自己の青春の夢を語つてゐるのに比べると、若い夢のさま〴〵が思出されて面白い。かの三つの小說は、歐洲近代の短篇小說の體裁を模したものだが、當時の青年作家たる鷗外の心臟がそこに皷動してゐるのである。島崎藤村の抒情詩「若菜集」などと同じやうに取扱はれるべきものである。詩趣情味が豐かである。それに氣品も添つてゐる。後年の史傳的小說が學究の考證記事のやうな無味乾燥に墮さなかつた所以である。「即興詩人」のやうな飜譯以上の飜譯が現はれた所以である。「エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺いだ豐太郎」「舞姫」）の心を作者の心としてゐた鷗外は、アヌンチヤタとアントニオの薄倖な戀物語にも心を捉へられたに違ひなかつた。「涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限りの涙と化して融け去るを覺えたり」とは、アヌンチヤタの最後の手紙を讀んだ時の、アントニオの心を叙したばかりではなく、譯者や讀者の心も述べられてゐるやうに思はれる。

若い男女の戀を描いて、情景兼ね具はつた小說は、明治以來「即興詩人」に及ぶものはなかつた。私は三たびこの物語を讀んだ。最初は、「しがらみ草紙」「めざまし草」などに斷續的に掲げられたのを、上野の圖書館に保存された古雜誌の綴込みを捜して止切れ〳〵に讀み、その後、春陽堂出版の四號活字の二冊本によつて、首尾を通じて讀んだ。私は二十代に讀んだ飜譯文學で、最も忘れ難い印象を留めてゐるものは、この「即興詩人」と、小金井きみ子女史の「浴泉記」とである。私は過去を追懷して、數年前に、新刊の縮刷本を買つて、「即興詩人」の第三回目の復習を試みたのであつたが、私は自分の心がもはや作中の男女の心から遠く離れてゐるのを感じない譯に行かなかつた。

作者たる鷗外も、「即興詩人」あたりを打留めとして、青春の夢から醒めて、心は枯淡になりかかつた。現實世界の實相を見る目も冴えて來たのであつた。「埋木」「浮世の波」「惡因緣」など、「水沫集」に收められた前期の飜譯と、「一幕物」その他の後期の飜譯とを比べると、譯文の調子が變つてゐるばかりでなく、原作の選擇が異つてゐる。鷗外も以前は感傷的分子に富んだ物語を譯す

ることを好んでゐた。彼れが若し、もつと早く、「キタ、セクスアリス」を書いてゐたなら、あゝまで情熱を缺いだ科學的態度を持してのみ、筆を執らなかつたであらう。

「世間の人は今の自分を見て、金井は年を取つて情熱が無くなつたと云ふ。しかし、これは年を取つたためでは無い。自分は少年の時から、餘りに自分を知り拔いてゐたのでその悟性が情熱を萠芽のうちに枯らしてしまつたのである。……或は結婚もしなかつた方がよかつたかも知れない。どうも自分は人竝はづれの冷淡の男であるらしい」と、作者は、「キタ、セクスアリス」の結末に於て自己を省みて、一先づかう云つてゐる。しかし、忽ち又考へ直して、「……自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけのことである。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。……自分は無能力では無い。インポテントでは無い。世間の人は性慾の虎を放し飼ひにして、どうかすると、其背に乘つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性慾の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅と云ふのがある。馴れた虎を傍に寢かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。あの虎は性慾の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰へてゐないのである」と云つてゐる。

性慾については兎に角、藝術に於ては、鷗外の意氣は晩年まで衰へなかつた。その悟性も學殖も、彼れの藝術を培養こそすれ、萎縮させることはなかつた。

彼れは、無論天才型の作家ではなかつた。しかし、創作は片手間の仕事で「遊び」氣分で筆を執つたことも多かつたのであらう。非凡な作品、深刻な藝術は彼れの全集のうちから拽出せないかも知れない。……しかし、近年の私は、明治以來の種々雜多の作品のうちでは、鷗外の作品を最も愛讀してゐる。その文章の的確明快なのを好んでゐる。蕪雜の跟のないのを、讀みながら快く感じてゐる。作品を通して親はれる作家の心境に何となく親しみを覺えてゐる。何よりも鈍味なところのないのが氣持がいゝ。

三

端的に鷗外の晩年の心境の露出されてゐる小品「妄想」については、私はかつて感想を述べたことがある。「高瀨舟」は、他に托して作者の心境を述べたもので、渾然たる佳篇である。作意の晦澁を厭うてゐたこの作者は、自作自註の態度を取つて、いろ〳〵な小說に、屢々說明語を添へて、讀者の理解を助けるやうに努めてゐるが、それが却つて、鑑賞を不純にして、作品の幅を狹くすることもある。「高瀨舟」にも、この作の狙ひどころの說明が添加されてゐる。「財產といふものの觀念」と「死に掛つてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ること」との、二の大いな問題が、この物語の中に含まれてゐることを、自から指摘してゐる。しかし、この所謂二大問題なるものが、作者によつて解決されてゐるのではない。そして、私などは、問題を別にして、この小說に興味を覺えるのである。場面と人物と心理とが、寸分の隙きのないやうに描出されてゐる。澄み切つた晩秋の月夜を見るやうな氣がする。

私は、鷗外晩年の作品では「高瀨舟」と「妄想」とを最も好んで、これまでに幾度も讀返してゐた。「妄想」は、最も聰明であつた一人の日本人の人生觀として敬聽して、自省の資としてゐたのであるが、それとゝもに鷗外の作品解釋の鍵ともしてゐたのであつた。

私はこの二篇と「ぢいさん、ばあさん」とを好んでゐた。

「金毘羅」と「蛇」と「雁」とは、今度「現代日本文學全集」本によつて、はじめて讀んだのだが、かういふ小說に徵しても、作者の聰明な頭腦と明確な描寫力が認め得られるのである。鷗外は、ポオの怪奇小說の一つである「モルグ街の殺人」を「病院横丁の殺人犯」と改題して、巧みに飜譯してゐる。その譯文には「ポオの推理的叙說は、今の日本文壇の好みに適しないから抄略する」といふ意味の添書きがしてあつたと、私は記憶してゐる。ポオの推理は微細を極めてゐて「黄金蟲」の如きは、その點で古今に類を絶した驚歎すべき作物であるが、それほど傑れた頭腦を有つてゐたポオも、一面、神秘不可思議な人生と宇宙とに戰いてゐたのであつた。しかし、鷗外は、推理に傑れた頭腦は有つてゐても、神秘な世界に分入つて彷徨することはなかつた。彼れは「有りのまゝ」の世界を見極めるだけに滿足して、人智で分りもしない世界に歩を進めようとはしなかつた。「人生宇宙の不思議に驚きたい」のが國木田獨歩の願ひであつたが、聰明なる鷗外は、さういふ願うて甲斐なき願ひに心を惱まさなかつた。十九世紀の終りに獨逸に留學してゐた彼れは、歐洲の世紀末の思潮と文藝に接觸した最初の日本文學者であつた譯であるが、その思潮に感染しなかつた。ハルトマンの歴世哲學を理解しても、さういふ哲學に心醉し惑溺しなかつた。

日本流の自然派文學の「有りのまゝ」主義を標準として批判すれば、鷗外晩年の作品の多くはその標準にかなつてゐるのではあるまいか。

「金毘羅」と「心中」と「蛇」は、題材に神祕らしい影が附纏つてゐるのだが、作者は、それを明るみに持出して、暗い影を殘さなかつた。愛慾の人情を描いた「雁」を讀んで、ことにさう思ふ。この可成り長い小說は、男女の色情についても、鷗外の目のよく働いて、理解の行屆いてゐたことを證明するものであるが、人情愛慾の不思議さについても、作者はそこに曖昧模糊の踪を殘してゐない。主人公末造にしても、その女房にしても、若い妾とその父親にしても、彼等の悲喜哀歡のもつれが、明かに秩序整然と說かれてゐる。底の知れない惱みが作品のうちに出沒してゐるのではない。……トルストイやドストエフスキーの文學と、わが森鷗外の文學との相違してゐる所以である。

「小說は說明をしてはならないのださうだが、自惚は誰れにでもあるもので、此話でも萬一ヨオロッパのどの國かの語に飜譯せられて、世界の文學の仲間入をするやうな事があつた時、餘所の讀者に分らないだらうかと、作者は途方もない考へを出して、行きなり說明を以て此小說を書きはじめる」（「百物語」）と、當時の雜評家を揶揄してゐるやうに、わざと堅くるしい說明語を用ひてゐるところもあつて「雁」のやうな人情小說に於てさへ、時々學者くさい筆法が散見して、讀者の素直な鑑賞を妨げるところもあるが、描寫の才能がないために、說明語を用ひてゐるのではない。この小說の舞臺になつてゐる本鄕から下谷へかけての風物、明治初期の時代の空氣は、讀者の目に映るやうによく描かれてゐる。松源での妾の目見えの場面でも、決して說明で逃げようとはしないで、描寫で委曲を盡くしてゐる。描寫の巧みな作家は、日本にはあまりなかつたので、小說家らしい小說家の作品よりも、有島武郎の「ある女」や鷗外の「雁」などに、却つてしつかりした描寫の見られるのを、私は不思議に思つてゐる。

夏目漱石は藝術家として、鷗外よりも豐かな天分を有つてゐたに違ひないが、私には、漱石の作品はいつもくどい感じがする。

四

私は「書生氣質」以來の、明治の重な小說は、一通り見てゐる譯であるが、自己の天分を完成した作家としては、鷗外が第一であつたと思ふ。明治の重な作家は、早世したゝめでもあつたが、充分に自己を發揮し得なかつた。獨り鷗外は「舞姫」から「北條霞亭」まで、青年期から晩年まで、藝術を樂んで、天分と修養とを兼ね具へた自己相當の文學に安んじて終りを全ふした幸福な文學者である。終りまで老衰の跟を殘さなかつた。

罪人を護送しながらその話に聞惚れてゐる同心庄兵衞の輕い懷疑の氣持は、つねに鷗外の心にも存してゐたのであつたが、懷疑のために七顚八倒することの愚かさを知つてゐた彼れは、一生心の平靜を失はなかつた。「日の要求に安んぜない權利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科學で大發明をするとか、哲學や藝術で大きい思想、大きい作品を生み出すとかいふ境地に立つたら、自分も現在に滿足したのではあるまいか。自分にはそれが出來なかつた。」（「妄想」）と云つてゐる通り、古今東西の偉大なる作品に熟通してゐた彼れは、日本現代の文學者に有勝ちな誇大妄想的自惚れも起さず、また、聰明であつた彼れは「辻に立つてゐて、度々帽を脫いだ。昔の人にも今の人にも敬意を表すべき人が大勢あつたのである。」帽は脫いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた」（「妄想」）ので、一人の人間や一つの主義に雷同して狂奔することはなかつた。そして「死の恐怖が無いと同時に死の憧憬も無い。死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、人生の下り坂を下つて行つた」といふ、晩年に到着した彼れの平靜な心境を、私は羨ましく思つてゐる。

私は、直接に鷗外に會つたことはなかつた。また會ひたいと思つたこともなかつた。たゞ、私が森川町に下宿して新聞社へ通つてゐた時分に、電車の中で、カーキ色の軍服を着けた額の少し禿げかゝつた男が、私の前に腰掛けて、小形の洋書を開けて讀んでゐるのを見て「この人が鷗外なんだな。よく見ると、何處か、三木竹二さんに似てゐるから、さうに違ひない」と思つたことがあつた。それから「ホトヽギス社」に招待されて、能樂を觀に行つた時に、席を隔てゝその姿を見たことがあつた。

演劇を鑑賞するには、舞臺外の俳優に接する必要がないと同樣に、文學を鑑賞するには、作家に會ふ心要はないのである。私は目のあたり鷗外に接して敎へを受けなかつたことを遺憾とはしてゐない。

前半生には、批評の筆を執つて盛んに論戰してゐた彼れも、後半生に於ては、彼自身半ば侮蔑してゐたらしい自然派の作品や評論に對して、表立つた論爭はしなかつた。しかし、自作に對する後進の種々雜多な惡評を冷眼視はしなかつた。他の大家のやうに默つてすましてはゐなかつた。短篇集「分身」に收められてゐる「不思議な鏡」や「田樂豆腐」、文學全集の「遊び」などは、小說といふよりも、當時の文壇の批評であり、自作に對する辯護文であるが、これ等を讀むと、雜多紛々の世評などは、實質的に何の力もないで傑れたる作品は、自分の持つてゐる力によつ

て、存在を續けて行くことが分るのである。

「創作のなかに自己告白をしない自己を有してゐないから遊びの文藝だ」「情熱のない作だ」といふのが、彼れの作品に對する重な非難であつて、私なども以前さう思つてゐたが、しかし、數十年間の鷗外の作品を通覽すると、その一生の自己が、自己告白を目標とした作家の作品に劣らないほどに現はれてゐるを、私はこの頃感じてゐる。

五

文學とは何ぞ？

私は年少の頃、内田魯庵の「文學一斑」を讀んで、文學といふものゝ理論的概念を注入されて以來、今日まで、文學の分類や價値批判や、その他さま〳〵な理論について、絶えず聞かされて來た。「文學とはかくの如きものなり」「かくあらざるべからず」との理窟を、三十年來聞かされ續けて來たのであつた。この頃でも、月々日々文學論の絶える時はないので、我々文筆を職業としてゐるものは、さう議論に全然無關心ではゐられない譯であるが、「人生とは何ぞや」の問題が永久に分り切らない如く、「文學とは何ぞや」の問題も永久に解決されないやうに思はれる。

畢竟わが好むところに從ふ外はないのである。

理論は兎に角、明治以來の代表的作家の重な作品を殆んど讀盡してゐる私は、どういふ作家のものに心醉し、「これこそ文學だ」といふ感じに打たれて來たのであらうかと回顧すると、可成り多くを數へ上げることが出來るのであるが、しかし、さういふものも、今日手に取つて見ると、大抵色の褪せたものとして、私の目に映るやうになつてゐる。色彩の絢爛なものも、簡潔直截なものも、明るいものも、暗いものも、そこに、作家自身の一所懸命になつたところは認められても、私自身讀みながら感激さゝれることは稀れになつた。そこへ行くと、森鷗外の作品は見さめがしない、天才らしい强烈な藝術の匂ひがないかはりに、鈍昧な跟を留めてゐないのがいゝ。明治以來の日本には、大なる天才は現はれなかつた。われ〳〵を渦の中に卷込むやうな作家はなかつた。せめて、聰明なる人鷗外の語るところを、私は耳を澄まして聽くことを喜んでゐる。

（一月二十八日）

二葉亭について

一

「あひびき」は、ツルゲネーフの「獵人手記」のうちの、最も短いもの〻一つの飜譯であるが、當時のいろ〳〵な作家の創作よりも、不朽性をもつて明治文學史上に光を放つてゐることは、衆人の認めてゐるところである。二葉亭や鷗外の飜譯のあるものは、單なる外國文學の飜譯といふよりも、明治文學中の重要な古典だと云つてい〻。「あひびき」は、明治二十一年に「國民之友」誌上に掲げられたのだが、その頃世に現はれたどの創作だつて、この飜譯に比べると、稚拙であり陳腐である。

文章だけについて云つても、言文一致體のそれとして、最初から殆んど完成してゐる。「浮雲」よりもい〻。「あひびき」「めぐりあひ」の二篇は飜譯でありながら、自然と人生に對する新しい情緒と、それを生々と表現する新しい文體とを、新日本の文壇に示したものであるが、當時は幾人の讀者がその味ひを翫賞したことであらう。少數の敏感な青年文學者の心を刺戟したゞけであつたと思はれるが、その以前のさまざまな、粗雜なる政治小說の飜譯とは違つて、微妙な藝術的感觸を、新代の青年の心に傳へたのであつた。この二編が奇蹟の如く新文壇に投出されたあと、彼れの飜譯は暫く杜絕してゐたが、明治三十年前後から、新たに、しかも頻繁に、露國の名小說の飜譯が現はれるやうになつた。今度は、新日本の文學も餘程進歩してゐたので、それ等のロシア物も、前よりは多數の讀者を得るやうになつた。しかも深く翫賞されるやうになつた。そして、日本の創作よりも却つて青年の心に響くところが多かつた。

森鷗外は雜誌「趣味」の、二葉亭追悼號に於いて、「飜譯はいくら巧くつても、それだけでは、文學者の價値を上下するに足らぬ。二葉亭も創作で評價すべきものだ」と云つた意味の感想を述べてゐた。鷗外自身、すら〳〵と勞せずして飜譯の筆を執つてゐたため、飜譯を輕視してゐたのかも知れないが、二葉亭の外國文學移植はそんな手易いものではなかつた。

私は、日本はいつまでも飜譯國でないかと思ふ。明治初年の自由民權說の輸入以來、今日でも、外來思想の直譯がそのまゝに受入れられて、青年の血を湧かせてゐる。文學でも、外國の文學が今なほ盛んに飜譯されてゐる。しかも、自國の文學を今尙壓倒してゐる。新潮社の圓本飜譯文學集が、數十萬の會員を得て、多くの飜譯家が、創作家にも勝つた巨額な印稅を獲得するといふ奇異な現象をさへ呈するに至つた。

獨創の才は文壇に乏しい。二葉亭だつて、創作の方は、飜譯に比べると見榮えがしない。飜譯のうちでは、ツルゲネーフ物が最も多數を占めてゐるが、出來榮えも最も傑れてゐると思はれる。當時の日本の文學青年は、この多感多情で、近代思想をも胸に抱いてゐた詩人的小說家ツルゲネーフの作品に最も共鳴したものであつた。紅葉露伴一葉などの創作に對するよりも、むしろ、二葉亭によつて移植されたツルゲネーフの「片戀」や「うき草」などに於て、一層よく眞實の自己を見出したかも知れなかつた。若い心に潛んでゐるものを惹出されたのであつた。ルーヂンやアーシャは、異國の無緣な男女ではなくつて、露伴紅葉などの作中の人物よりも、讀者の身に親しく思はれたのであつた。

私は、森田思軒が「懷舊」と題して飜譯したユーゴーの「バタジヤルガル」でも、あるひは、

「即興詩人」など鷗外の飜譯小說でも、明治二十年代の日本文學のうちでは、最も印象の深かつたものとして心に殘つてゐるのを覺える。そしてこれ等の飜譯家は意味を傳へるだけではなくつて、それ〴〵に文體の表現や味はひを閑却しなかつた。そのうちでも、二葉亭はことに苦心した。鷗外思軒などとはちがつて、はじめから原文一致體で、日常語を自由に使つたから、誰れのよりも新味に富んでゐた。ゴルキーの「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などは、あまりに二葉亭化されて、筆に調子がつき過ぎて、洒落れつ氣があり過ぎて、ゴルキーの原作が、こんなに垢抜けがしてゐるのであらうかと疑はれるほどであるが、ゴルキー物を材料とした一つの創作として見ると面白い。日本の飜譯のうちで、飜譯的創作と銘を打つていいものは、この二篇に留めを差すのである。二葉亭の面目が躍如としてゐる。多少の戲作者口調を含んで、しかも生きのいい、取り立ての魚がぴちや〳〵跳ねてゐるやうな趣きのあるのは、この二篇で、二葉亭の才分は、ここに於て、最もよく發揮されてゐる。私は、この頃でも、をり〳〵取出して愛誦してゐる。二葉亭の寫したツルゲネーフのある物を、今日の私には、實はあまり面白く感ぜられなくなつてゐるが、「ふさぎの蟲」などは、內容も文章も面白い。

ところが、二葉亭の創作は、彼れの飜譯的創作である「猶太人の浮世」や「ふさぎの蟲」などに比べると、著しく劣つてゐる。そこが私にとつては考ふべき問題になつてゐる。

二

飜譯では文章が、ぴちや〳〵跳ねるやうに生きてゐるのに、創作では、筆が著るしくいじけてゐる。原作の束縛を受けるべき飜譯に於て、自己の才氣が隨分に働いて、自由自在に書ける筈の創作が、却つて窮屈さうに見えるのは、いたましく思はれる。

「浮雲」が「書生氣質」などと殆んど同じ時代に現はれたことは異例であつて、たとへそれがロシア文學の刺戟によつたとはいへ、この作者の天分に、他の凡庸の徒と違つたところのあつた證據とすべきであらうが、日本のその頃の周圍の狀境がこの作者の天分を充分に培養し發展させるのに適しなかつたゝめか、あるひは作者自身の心掛けが當を得なかつたゝめか、あるひは、天分にそれほどの强み深みがなかつたゝめか、兎に角、はじめの勢ひは續かなかつた。創作道に於て、作者は直ぐに息切れがした。反省力のつよい二葉亭の煩悶苦惱が、私には想像される。

「浮雲」も第一編と第二編とが、今日なほ讀應へのするものであるが、その續きはガタ落ちがする。讀むに堪へぬほどだらしのないものである。創作に斷念してゐた彼れが、處女作後二十年も絕つてから、新聞社に對する義理から止むを得ず執筆した「其面影」は、いくらか讀者受けはしたらしかつたが、「浮雲」以上の何物でもなかつた。彼れに對して、過分の好意を寄せてゐた內田魯庵氏でさへ、「浮雲の描寫は直線的に極めて鋭く、色彩や情趣に缺けてゐる代りには、露西亞の作風の新らしい匂ひがあつた。之に反して其面影の描寫は、婉曲に生溫く、花やかな情趣に富んでゐる代りに、新しい生氣を缺いてゐた。幸田露伴はかつて浮雲を評して、地質の斷面圖を見るやうだと云つたが、其面影は、斷面圖の代りに、橫濱出來の輸出向きの美人畫を憶出させた。」と云つてゐる。これは適評である。「浮雲」よりも古い感じのする小說である。哲也と小夜子とが、レストラントで會食するあたりは、作者もなか〳〵味をやつてゐるが、全體としては、たゞの通

俗小説である。文章だつて飜譯のやうには冴えてゐないのだ。

第三作「平凡」では、二葉亭も、思切つて自分を投出したので、「其面影」ほど陳腐平凡ではなかつたが、さしたる深みも厚みも、鋭さも、あるひは輕快な味ひも見られなかつた。犬についていろ〳〵叙述したところは、寫實の妙があるが、こんな挿話だけで生命を保つてゐるやうな小説である。しまひの方のお糸さんの一件なんか、型の如き通俗味の漂つてゐるもので、私の空想裡にある二葉亭がどうしてこんなものを書いたかと疑はれるほどに低級な感じのするものである。……しかし、この小説には、ところ〴〵作者自身の文學觀や自己批判らしいものが出てゐるのが面白い。

「平凡」は鷗外の一ギタ、セクスアリス」と同様に、當時流行の自然主義の刺戟によつて思ひついたものらしい。「其面影」の型を脱して新しい意匠を凝らす力のなかつた彼れは、日本の自然主義者等の書振りの手易さに目を留めて、おれもその手で行かうと思つたのであらう。「近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、喞かも技巧を加へず、有の儘に、だら〳〵と、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張り其で行く」と、はじめに云つてゐるのは、必しも戯談ではあるまい。自然主義と云ふと、日本では、二葉亭こそ最初にロシアの本場の自然派文學に接觸した文學者であつて、それを翫味しそれに心醉し、それをはじめに日本に紹介したので、獨歩でも花袋でも、その感化を受けて、新文學に向つたと云つてもいゝくらゐなのだが、しかし、花袋氏などによつて唱へられた自然主義は、ツルゲネーフやトルストヰなどとは違つてゐた。「喞かも技巧を加へず、だら〳〵と牛の涎のやうに書く」ものと、二葉亭には思はれてゐたのであらう。

しかし、鷗外は、文學に關心するところの少くなかつた人であつたため、自己に逆らつてゐた年少の徒に對して、戰鬪的態度を持してゐたが、二葉亭は「文學はどうでもいゝ」と思つてゐたためか、あるひは自己の才能の乏しさを感じる謙遜性のためか「愚にも附かぬことをだら〳〵と書く」日本流の自然派小説をも相當に認めてゐたらしかつた。

日本の自然主義に刺戟されて書かれた鷗外の性慾小説はあんな風であつて、二葉亭の性慾小説は、この「平凡」のやうなもので、二つを比較して、二作家の人となりの相違が察せられる。

そして、鷗外は、樂々と書きこなしたのに反して、二葉亭は「其面影」でも「平凡」でも、苦辛慘憺「造物主が天地萬物を産出す時の苦しみ」を經て、作り出したのであつた。神經質の彼れは「どうでもいい」と口では云ひながら、どうでもいゝで澄ましてゐられなくつて、一字一句にも全力を注いだのであつたが、彼れは、自分で認めてゐたやうに、創作の才は乏しかつた。

彼れの飜譯を讀むと、しきりに名文句に出くわし、譯者の筆に感歎されるのだが、創作には、滅多にさういふところが見つからない。三篇が三篇とも、愚圖々々した煮切らない男を主題としてゐるのだが、作者の觀察の目や描寫の筆が、一作ごとに深くも鋭くもなつてゐるのではない。彼れは、實際界に於ては夢想家であつたが、藝術家としては、空想力が極めて貧弱であつた。文學を一生の事業とする氣にならなかつたのは、自己を知る明があつたと云つていゝ。私なども、一生懸命に骨を折つて、そして、貧弱無味な作品を作り上げて、自己の無能を歎息することが多いので、二葉亭の作品を讀みながら、身につまされるのである。私は明治二十年代の作家のうち

では最も二葉亭に敬意を寄せてゐる。最も親しみを覺えてゐる。しかし、「其面影」や「平凡」は、作それ自身は、決して傑出した藝術ではないと、私はいたましく確信してゐる。それが當時文壇の人々からも期待され、相當に重んぜられもしたのは、二葉亭の人格の力と、飜譯者としての手腕と、及び、文壇の戰鬪範圍外に超然として敵を有つてゐなかつたためであつた。夏目漱石が、虚子の「俳諧師」を批評して、「平凡」よりいいと遠慮しながら一言云つたのに、私は同感である。

三

「平凡」では、雪江さんのところも、お糸さんのところも、筆つきが鈍昧である。むしろいやみである。年少の頃書いた「浮雲」のお勢ほどの生氣もない。しかし、「平凡」には、作者の感想が洩らされてゐるので、その點が面白い。

「私が感化を受けた友と云ふのは……文學が專門だから、文學書は私より餘計讀んでゐたといふだけで、何でもない事だが、それを私は大層えらいやうに思つてゐた。まだフアウストを讀まぬ時、フアウストの話を聽かされる。なに、友は愚にも附かん事を言つてゐるのだが、その愚にもつかん事を、人生だ、知識だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脫だといふやうな意味のあり氣な言葉で勿體をつけて話されると、何だか有難くなつて來て、これを語る友はえらいと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。……讀んで分つたところで、フアウストがどれ程の物だ？技巧の妙を除いたら、果してどれ程の價値がある？」

「文學の實際は、人間の墮落だ。墮落を潤色して、懦弱な人間を更に懦弱にするばかりだ。……」

「私は、自然だ人生だと口には云つてゐたけれども、唯書物でそんな言葉を覺えたゞけで、意味がよく分つてゐるのではなかつた。……小說、殊に輸入小說には、人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。作の新舊を論じてその價値を定めてゐた。自分はこんな下らん眞似をしてゐながら、他の額に汗して着實の浮世を渡る人達がたま〳〵文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵つて、獨り自から高しとしてゐた。獨り自から高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落してゐた」

作中の人物に云はせてゐるかういふ感想を、直ちに作者自身の述懷と見做す譯には行かないかも知れないが、をり〳〵噂に聞き、また雜誌などで讀んだ彼れの生前の文學觀を思出すと、「平凡」の主人公の所感は二葉亭の心境を幾分言現はしてゐるのであらうと思はれる。

彼れは、一面文學を蔑視してゐた。……私は、よつぽど前に、坪內博士を訪問した時「世の中の出來事にさう珍らしいことはないやうですから、文學に扱ふ材料も大抵似たり寄つたりで、詰りは文學の價値は技巧だけぢやないでせうか」と云ふと、博士は、「二葉亭がさう云つてゐた。文學は技巧だけのものだと云つてゐた」と云はれた。……

「フアウストだつて、技巧の妙を除いたら何が殘る？愚にもつかん事を、人生だ、煩悶だと勿體つけて見ても、馬鹿な話だ。」と、「平凡」のなかでも云つてゐるが、そのくせ、彼れは、「人生とは何ぞや」といふことを、頻りに考へてゐたらしい。これは、ロシヤ文學の感化でもあらうが、空

漠たる懐疑は絶えず彼れの心に宿つてゐた。「人生」とか「死生」とか、さういふことを「眞正直」に考へてゐた。今日の目で見ると、何でそんな取留めのないことに心を痛めてゐたかと陳腐に感ぜられるだらうが、そこに、明治二十年代の惱みが見られて、二葉亭の存在に興味が感ぜられる。彼れはその小説の主人公の如く、少し愚圖で頭が冴えてゐなかつたらしいが、正直であつた。今日のある種の青年のやうに狡猾なところ、輕薄なところは少しもなかつた。あの三つの小説は、藝術として幼稚ではあるが、人間の正直さは現はれてゐる。

内田魯庵氏の「思ひ出す人々」のうちに、「二葉亭四迷の一生」と題して、彼れに關する追憶と批評とが、面白く記されてゐるが、これは二葉亭の人となりを知るためには、必ず讀むべきものである。創作と云つては、たつた三つしか書き遺さなかつた二葉亭が、明治文學史上に重きを置かれた所以が、内田氏の所説を讀むと理解される。「こんなまづい物を書いて原稿料を取つては相濟まん」といふ自責の念、自己の才能に對する過分の否定は、周圍の甘い賞讃によつてもぐらつく時がなかつた。これは、他に例のないことで、私などは、自己の創作については、常に不足を感じ續けて來たのに關はらず、世間に推賞されると、うかといゝ氣になるのである。夏目漱石でも、世間のおだてに乘せられて、自分も一ぱしえらいものになつた氣でゐたらしい。藝術家で名譽の快感を覺えないのは、藝術家としての特權を失ふ譯であるが、唯二葉亭にだけはそれがなかつた。その點では不思議な人であり、また不幸な人であつた。自作の世に認められないのを憤つて、たまに悪評を下されると、親の敵のやうに深く記憶に留める文學者氣質は、二葉亭の氣持とは正反對である。

四

鷗外が新日本の文壇の先覺者として重んぜられたのは、近代の西歐文學に早く接觸したのに由る。二葉亭が早くから異色を呈したのも、偶然、近代のロシヤ文學に刺戟されたためであつた。陳腐な儒教によつて少年期の精神を鍛練された彼れは、青年時代にロシヤ文學の感化を受けてあいふ人間になつたのであつた。儒教氣質と、詩趣を帶びた夢想癖との、矛盾した傾向の混和が、二葉亭といふ人間をつくり上げた。昔の支那文學で培はれた國士とは違つてゐた。ガツシリした體軀の持主で、天下國家を志してゐたあの二葉亭が、「氣の欝したる時は、外出せば少しは紛るゝ事もあるべしと思へど、わざと引籠りて求めて煩悶するが却つて心地よきやうに思ふ」と、自から云つてゐたやうに、空漠たる人生問題なんかに思惱んでゐた有樣を想像すると、いかにも不調和に思はれる。粉屋のチホンが、譯の分らぬ「ふさぎの蟲」に取付かれて煩悶するのが、傍目には滑稽に思はれるのと似寄つてゐないこともない。國木田獨歩も空漠たる人生問題に苦しんだ。北村透谷もさうであつた。綱島梁川もさうであつた。

しかし、今日は時代が變つた。一般の青年の心意氣は違つて來た。

私は、たつた一度、人に連れられて二葉亭を訪問したことがあつたが、その時、彼れが、年にも似合はず、「藤村操の投身」事件を話題として、同情のある感想を述べてゐたのを、今も覺えてゐる。

露伴について

今夏輕井澤に避暑してゐた頃、日々新聞に連載されてゐた幸田露伴氏の「華嚴瀑」遊覽記を讀んだ。同新聞はその撰定した新八景の宣傳のために、諸家を累はして、名勝記を書かせてゐたのであつた。私は「枕頭山水」以來、久振りで露伴氏の紀行文を讀むことに興味を感じたのであつたが、古典的文章美は相變らず具つてゐるにしても、山水に對する情熱は以前のやうでないのを見過す譯には行かなかつた。しかし、氏が自發的に華嚴の美をさぐりに出掛けたのではなくつて、新聞社の依頼により、お義理で見物に行つて書いたらしいこの紀行文を、私は今事々しく取上げて論じようとするのではない。たゞ、そのうちに、「大事な命を粗末にする馬鹿ものども」と云つたやうな言葉で、華嚴瀑投身者を罵つてゐたのを讀んで、「露伴は昔からかういふ風な人なんだな」と、ちよつといやに感じたのを思出したゝめである。紀行文の何回目かにさういふ文句の出てゐたのは、芥川龍之介自殺後、五六日過ぎたばかりの時だつたので、露伴氏は、龍之介を間接に罵つたのであるまいかと、私は疑つて、一層いやな思ひをしたのであつた。

しかし、それは私の思過しで、あの紀行文は、脱稿後餘程經つてから新聞に掲載されたので、芥川自殺の是非には關係がなかつたのであらう。投身者罵倒は投身者罵倒に止まつてゐるのであらう。

「自殺者は馬鹿だ」とは、世上の誰れでも云ひさうなことで、問題にするに足らぬ譯であるが、露伴氏が簡單にさう云ひ切つたことは、露伴氏の小説を鑑賞し批判する時の一つの鍵となりさうだと、私はその時、ぐつと自分の記憶に押込んで置いたのである。

同じ時代の人でも、二葉亭四迷はさうは云はなかつた、(これは私が直接に氏から聞いたから確かだ。その時、氏は、四十を過ぎた人にも似合はず、最初の投身者藤村操について、いろ〳〵に心を勞して考へてゐた)國木田獨歩もさうは云はなかつた。森鷗外だつて、華嚴を俯瞰して、「命を粗末にする馬鹿ものども」と、一概に云はなかつたに違ひない。

道鷗紅露とおの〳〵の頭文字が熟語となつて、明治文壇の大家が定まつた時分から、私は露伴氏の作品をも、目に觸れたものは、大抵讀んでゐたのであつたが、氏のものに限つて、殆んど何等の興味をも覺えなかつた。紅葉の作品は何と云つても面白かつた。「紅葉は文章は巧いが内容が乏しい。露伴は想が傑れてゐる」などと、あの頃の文學青年は云つてゐたものだ。露伴の方が非凡らしく云はれてゐた。世評がさうだから私もさう思はせられてゐたが、その非凡さを自分の頭腦に感得したことはなかつた。あの頃のもろ〳〵な作家のうちで、露伴氏は巨木のやうであり、英雄のやうであり、他に異つたえらさがありさうに思はれてゐたが、しかし、私は何となくさう思つてゐたゞけで、直接に氏の作品によつて感動さゝれたことはなかつた。氏は早くから和漢の文學に造詣深く、文章が六ケしく凝つてはゐたが、しかし、少年時代の私が讀み惱むほど、氏の小説が難解の書であるとは思はれなかつた。「一口劍」や「五重塔」など、文章が雄健で男性的氣魄を含んでゐるらしく云はれて、紅葉一派のおしろいくさい柔弱らしい小説に飽足りない人々に喜ばれてゐたのであつたが、當時、青年の惱みを惱み、時代の空氣に感染してゐた私には、露伴氏の作品は、神經の太い、頭の古い、古武士の書物のやうに思はれてゐた。二葉亭でも、「文學界」の連中でも、民友社の人々も、外來の思潮に動かされて、明治二十年代の若い惱み、若い希望を、心に抱き筆にも現はしてゐた。しかし露伴氏にはさういふ所がなかつた。當時の重立つた

作家のうちで、露伴氏が最も保守的で、純東洋的で、清新なところがないやうに、私には思はれてゐた。……日本古來の標準から云ふと、名文であるのか知らないが、氏の文章の重苦しさ。兜をかぶつて鎧を着て歩いてゐるのを見るやうだつた。

「風流微塵藏」と總括的題目を附して、遠大な計畫のもとに筆を執られたらしい連續長篇の一部、「さゝ舟」「きくの濱松」などを、私は、神田のいろはといふ貸本屋から借りて來て、努力して讀んだことを、今思出しながら、改造社新刊の露伴集に收められたそれ等の長編大作を讀直したが、すでに惱ましいのであつたが、例の重い鎧を着た上に、魯智深の持つてゐたやうな何十貫もする鐵の棒を引摺つてゐるやうな文章の後をつけて行くのは、樂ではなかつた。今の青年讀者はかういふものはとても讀み切れないだらうと察せられる。

卷末の年譜に照らして見ると、露伴氏が、「微塵藏」中の長篇數卷を世に出したのは、三十歳前後の時であつて、そんな若い時に、よくもかういふ古典的文章を綴り上げたものだと、今日の文壇の有樣に比べて見ると不思議に思はれるが、しかし、內容に於ては驚かされるところはないのだ。一箇所たりとも心を打たれたところはなかつた。たゞ、八犬傳よりももつと古い時代の文章を讀んでゐるやうな感じがした。出て來る人間は、みんな型の如く、自由な生々したところはちつとも見えない。昔から露伴氏の好きな、生悟りの、悟らんとして悟りかねたやうな人物、僧侶栽松が出たり、また氏の好きな朴訥な老人が出たり、また氏の好きな、精神一到何事か成らざんといふ意氣のゐる青年が出たり、善惡兩樣の人物が形を調へて對立したりしてゐるが、私は讀んでゐて、人生の實相に接したやうな感じのしたところはなかつた。少年少女たる新三郎お小夜の親しみが細かに書かれてあつても、そこに「たけくらべ」のやうな詩趣も情味も感ぜられなかつた。いくら美しい言葉を並べ、小說らしい趣向を凝らしてゐても、作爲の跟のみ目について、「たけくらべ」のやうに泉の湧出る趣きはなかつた。

私は、讀みながら、露伴氏の思想の古さを感じた。人生觀察の古さを感じた。かういふ小說が打囃されてゐたのを見ると、自然主義の起つたのも無理はなかつたと、私は事新しく感じた。「文章のための文章」が、一時極端に排斥されたのも無理はなかつたとも思はれた。「文章のための文章」に浮身を窶した巨頭として、紅葉山人は、自然主義時代に非難の矢を向けられてゐたのであつたが、その實、露伴氏の方が一層多く、「文章のための文章」に苦心してゐたのであつた。紅葉は專ら文章に凝つてゐたにしろ、その筆からは隨所に、浮世の姿が流出てゐる。しかし、露伴氏の作品には、文章にはじまつて文章に終つたものが多い。その所謂「理想」や「思想」は、あまり古臭くて、乾涸びてゐて、私には風馬牛相關せざるものである。「雁坂越」など、言文一致調のものは、露伴氏には不適切な作品である。紅葉は形の上でも新らしくならうとして、言文一致の新文體に苦心して、「多情多恨」に於て見られるほどの妙境に達したのであつたが、露伴氏は、在來の文章體がその本體であつた。

氏にも、文學上の煩悶があつたのか、「出廬」と題する新體の長詩を讀賣新聞に連載したが、當時青年であつた私などの心に觸れるところは少しもなかつた。「あほだら經」のやうに感じてゐた。後藤宙外氏が、「はじめて國詩に接す」と云つて、この長詩の提灯持をしたことを、柳田國男

蒲原有明氏が嘲笑してゐたのを、ある會で私は聞いたことがあつた。

「天うつ浪」は、私が讀賣入社後に紙上に連載されたもので、不惑の齡に達してゐた作者が、大なる抱負をもつて、自己の蘊蓄を傾瀉したのである。十年前の「風流微塵藏」と、これとが、露伴氏半生の「二大作品」である譯だ。私は、今度、この未完の長篇「天うつ浪」を讀直して、「金色夜叉」が紅葉の代表作であると同樣に、この長篇は露伴氏の代表作としていいものだと思つた。そして、氏の過去の作品から受けてゐた茫漠たる印象を新たに思浮べた。

「釣を垂れては、つく〳〵人間の技の小さくして、天運の力の大なる事を知り、棋を試みては、七情の騷げども益なく、一理のたゞ賴むべきをおもふ」（洗心廣錄より）といふ氏の感慨が、「天うつ浪」の上にも漂つてゐるやうである。十年後の氏は十年前の氏ではなかつた。「微塵藏」は、外形は大作であつても、內面はうつろであつた。「天うつ浪」は、技巧のみを弄したものではなくつて、兎に角充實してゐる。作者の胸中にある人生の世相がのびやかに現はれて、生命の波を打つてゐる。在來の露伴型の人物が都合よく配置されて、小說らしい世界をつくつてゐるのだが、それ等の人物が、をの〳〵面目をそなへてわれ〳〵の前に現はれて來る。私は作者の筆に心を惹かれて、全部を讀終つて、その未完結を惜んだ。作者は「微塵藏」の時と同樣に行詰つたのであるか。小說なんか詰らないと思つて投出す氣になつたのであるか。

この作品は、古い型の道念を底に潛めてゐる。普通の人情を表によく現はしてゐる。この作者が昔紅葉の寫實と相對して理想派と云はれた所以が、これを讀めばよく分るのであるが、しかし、この古い型の道念と普通の人情とは、紅葉の作品にも充分含まれてゐたので、兩作家の間にさしたる相違は發見されないのだ。この作者の作品に存在する理想や思想は紅葉の作品にも見つけられないことはない。

お龍お彫などの女性は、以前の氏の作中に現はれてゐた型の女子ではあるが、今度は肉體を具へてそこに現はれた感じがする。ことにお彫には、作者の理想的女性の影を見せようとしたものらしく、なか〳〵手が込んでゐて面白さうなのだが、未完の作品は、彼女をして充分に發展させないで終つてゐる。

この長篇が紙上に揭げられつつあつた間に、舊文學打破の自然主義が次第に勃興したのであつた。露伴氏は、文壇の風潮にいや氣が差して、この長篇を中絕させた譯ではあるまいが、「天うつ浪」は偶然、舊文學最後の大作として、文學史上に跟を止むるものであつた。森鷗外は、新風潮を冷笑しながらも、その感化を受けて、作風に一變化を來したが、露伴氏はさういふ風潮からは全く顏を背けてしまつた。紅葉でも長生してゐたなら、自然主義の感化を受けたのであらうと察せられるが、舊大家のうちでも、露伴氏だけは、さういふ感化を受けるべき素質を缺いでゐた。頑强な作家である。「自殺する奴は馬鹿だ」と罵倒するだけあつて、氏の作品には、初期の作品以來懷疑の跟がない。この動搖の激しい時世に生れながら、氏は疑惑動搖の姿を讀者に見せてゐないのである。兎に角恐ろしくしつかりした人である。……私は、今度氏の舊作を讀返しながら、その點を面白いと思つた。この動搖しないしつかりしたところを持續した人なればこそ、後年「運命」などのやうな重味のある大作を創成し得られたのであらう。氏の多くの作品のうち、私の心魂を搖がしたものはこの一篇であつた。欝勃たる力がそこに湧出てゐた。森鷗外が、彼れの

純粹の創作よりも、晩年の考證的史傳に於て、一層よく人生の眞相を描出した如く、露伴氏も、前半生の多數の小說よりも、晩年の史傳に於て、氏の本來の型は飽まで保ちながらも、一層深く人間を描いてゐるのである。

私は、かつて氏の戲曲「名和長年」を帝劇で見た。この勤王劇は、男の見物を泣かせると云はれてゐたが、露伴氏の本領はそこにあつたのである。昔の氏の小說が男性的だと云はれて、ある種類の讀者に喜ばれたのと同じ譯なのだ。作劇の態度も人物の取扱ひ方も、日本傳來の型を追つてゐるだけで、鷗外の戲曲にあるやうな新味は全くなかつた。

私は、今思出したことがある。……私が讀賣在社中、「天うつ浪」が紙上に揭げられて、中絕したあとで、花袋氏の「生」が揭げられたり、藤村氏の「家」が揭げられたりした。自然主義は天下を風靡してゐたのであつた。ところが、そのうち、老社長が死んで、嗣子たる本野一郎氏が社長の位置を襲ふとともに、自然主義を嫌ひ新進の文學者を嫌ひ、私學出身者を嫌つて、老大家を招聘することに熱中した。それで私などはおのづから遠ざけられたのであつたが、その時新社長は、紅葉露伴と並稱された昔を偲んで、露伴氏の小說を渴望したらしく、巖谷小波氏などを煩はして向島の臥龍を呼起さうとしてゐた。私はひそかにそれを察して、「露伴は書けまい」と云つてゐた。熱心なる依賴を斥けかねたためか、露伴氏もやうやく新聞に寄稿することはしたがそれはたゞ一回（?）だけであつた。在來の氏の作品とは、稍々趣きがちがつて、筆致が世話に碎けたものであつたと記憶してゐる。……氏は何故に一回だけで中止したのであらう。頑强なる氏は、周圍の若輩の自然主義の跋扈くらゐ、雲烟過眼視していい譯ではないか。……「天うつ浪」を中途で投げた氏は、創作上の行詰りを感じたのではあるまいか。

兎に角、「天うつ浪」は舊文學の最後の長篇であつた。爾來二十年の歲月が經過してゐる。その間いろ〳〵な文學が起つたが、田山氏などを先達とした日本流の自然主義の扶植した勢力はなかなか衰へなかつた。自然主義の作物と分類される種類のものは衰へたにしても、田山氏などのはじめた新小說作法は、いつまでも追隨者が多かつた。自然主義反對者でも、頻りに、自己の日常の言行錄や身邊雜記を發表して飽くところを知らぬ有樣ではないか。元來歐洲の自然派作家の作品は、多くは客觀的のもので、自己の言行錄すなはち小說といふやうなことはない譯なのだが、日本では、自然主義、すなはち自己描寫主義となつたから不思議である。

かういふ作風が十年も二十年も流行したために、文壇は單調に陷り沈滯して、變化を求める聲は、長い間、をりに觸れては聞かれた。小說に對する讀者の要求は、つねに滿されない有樣であつた。大衆文藝や通俗長篇が近來歡迎されだしたのも、自然の勢ひなのかも知れない。

それでは、二十年の過去へ返つて、「天うつ浪」や「金色夜叉」の作風を此處に復活させるのであるか。さうも思はれない。

私は、「大菩薩峠」を第一卷だけ通讀した。

文壇の小說、及び婦人向きの通俗小說に飽足りない讀者は、この「大菩薩峠」のやうな小說を、以前から愛讀してゐたらしい。谷崎氏や菊池氏がこの小說を推讚してゐたのを、何かで讀んだことがあつたが、私は、いろ〳〵な知人が、この小說を耽讀してゐるのを知つてゐる。皆んな

面白いと云つてゐる。

何だか、「天うつ浪」を打留めにした古風な小説が、自然主義系統の文壇小説跋扈の間に、地底にくぐつて、「大菩薩峠」のやうな形を取つて新たに現はれたやうな氣がする。露伴氏の作品に男性的氣魄があるのなら、中里介山氏の作品にもそれがある。それに、どちらも佛教臭い。佛教臭いところが、また傳統的に日本人に有難がられるのである。第一卷だけを讀んでも、以前の露伴氏の作品の風格に似たものが感ぜられる。

年少の頃、八犬傳を愛讀してゐた時分に、「大菩薩峠」を手にしてゐたなら、私も夜を徹して讀耽つたかも知れないが　今日は私は、奇拔な筋の變化には驚かされなくなつてゐる。たゞ、机龍之助といふ主要人物が、在來の講談的英雄型を脫してゐるのを面白いと思つた。この人物は、ひどく人情を沒却してゐる。講談的英雄でも、あるひは露伴式豪傑でも、どうかすると涙を濫費して、讀者の感傷癖に媚びるのであるが、龍之助は、飽くまでも冷徹である。それから、金藏といふ男の執念は、描いて眞に迫つたところがあり、第一卷のうち最も精彩を放つてゐる。……まだ大長篇の一部しか讀んでゐないのだから、全體に渉る立入つた批評は差控へることにする。

「洗心廣錄」を讀む。小說よりもかういふものによつて、露伴氏の學殖文藻識見が充分に伺はれるのである。氏が德川時代に生れてゐたなら、一代の大文章家として天下を風靡してゐたかも知れない。今時、かういふ漢文崩しの名文を書きこなす人は他に無ささうに思はれる。私なども讀みながら、文辭の上に一種の興味を覺えるのであるが、しかし、そこに含まれてゐる思想や處生訓からは、さして深遠な味ひを味ひ得られないのである。

「鏡に對へば忽然としてそこに人の姿あり。身より出でたる像ながら、此の身も滅ぜず、鏡に添へるものながら、彼の鏡も增さず、不增不滅の彼此の間に、忽生忽滅のすがたありて、眉は横なり、鼻は竪なり、笑む時をかし、それもまことよ。泣く時悲し、それもまことよ。阿字本不生いよよまことよ。たゞ何事も夢のたはむれ」など、面白い感想もあるが、舊幕の道學先生の講釋見たいなことを、六ケしい文字を連ねて云つてゐるところも少くない。

露伴氏も、現代の青年に對し新しい文學に對して、をり〳〵老人らしい冷語を洩し、當てこすりをも云つてゐるが、さういふものを見ると、時代を超越したらしい巨人でも、全然周圍を氣に留めないではゐられないことに思及ぶのである。

同じく「雜文」とか「隨筆」とか云はれるものでも、「洗心廣錄」を讀んだあとで、新年號のいろ〳〵な雜誌の雜文隨筆を讀むと、表現の方法がかうも違ふものかと驚かれる。同じ處世訓でも威儀を正して說かれると重味があるのだが、今後は、こんな古典的名文を書き得るものは出て來ないだらう。露伴氏には模倣者がない。最後の一人である。

志賀直哉と葛西善藏

一

「荒絹」「老人」「清兵衛と瓢箪」「赤西蠣太」「十一月三日午後の事」「小僧の神様」「矢島柳堂」……志賀直哉氏のこれ等の短い作品を讀んで、私は、少し大袈裟な言葉であるが、醇乎として醇なる藝術に接した感じがした。無雜な荒つぽい毛むじやらな腕をまくつて、ゆすり文句を並べてゐるやうな文學を、屢々讀まされてゐる今日、私は志賀氏のある作品によつて、胸のすが〳〵しくなる氣持がした。強烈なる文學、戰鬪的な文學、濃艶な文學、悲壯な文學。古今の文學はそれ〴〵の形に於て存在の價値を保つてゐるのであるが、激しさしつこさを表に現はしてゐない。和やかな感觸を讀者に與ふる藝術も、尊重していゝのである。ことにこの頃は、さういふものがなさ過ぎる。

如上の小說には、淡彩の日本畫といつたやうな趣きがある。これ等に比べると、有島武郎氏の作品は油繪である。志賀氏のやうな作品は、原稿料を當てに生活してゐる作家には、とても書けさうでないが、そこに、文學者としての氏の弱點も潛んでゐる。世路の經驗を經たあとでも、溫室育ちのお坊ちやん氣質の跟を留めてゐるところがあつて、讀者に與へる感銘に於て損をしてゐる。氏の初期の作品ではあるが、「網走まで」を取つて、葛西善藏氏の「急行券」といふ小品に比べて見るといゝ。共に、汽車のなかで起つた小事件であるが、二人の作者の日常生活を反映してゐて面白い。無論前者の方が、物を見る目も傑れてゐるし、筆の使ひ振りにうま味もある。しかし、後者の、作者自身に備はつてゐる生活苦から染み出てゐる哀歡の影に、前者の遊び氣分よりも我々の心は惹かれ勝ちになるのを如何ともしがたい。

それで、志賀氏には、「溫室育ちのお坊ちやん」らしい所が、隨所に作品に現はれてゐて、時として作品を安つぽくしてゐるが、藝術家としての天分の備はつてゐることは、葛西氏などとはよほど違つてゐる。人間を見る目が冴えてゐて、頭腦も粗笨でない。

「老人」がいゝ。「小僧の神様」がいゝ。二つとも私の好きな作品であつたが、今度新たに讀直して、新たに興味を覺えた。藝術の匂ひがしてゐるやうで、人生味も豐かだ。かういふ作品には、有勝ちな感傷語の濫用がない。ユーモアが自から備はつてゐて、わざとらしさがない。下品でない。「老人」は、圓本の細字で僅か二ページばかりの小品であるが、ある老人の心境を、簡にして細かに寫してゐる。作者の初期の作品であるが、若くしてよくこれだけ客觀的に印象明晰に書けたと思ふ。

この小品を一つの問題として、もつと批評を進めよう。老人にもいろ〳〵ある。概括して云ふと、世上の老人といふものは、ここに現はされてゐる「ある老人」のやうに物分りがよくはないし、もつといやらしいものである。もつと意地きたないものである。もつとしつこいものである。しかし、老人の醜いところを捉へて、面皮を剝がないで、和やかに彼れを取扱ひながら、空疎な描寫に墮しないこの小品は、志賀氏の藝術のいゝ方面をよく代表してゐる。またかういふ藝術をも翫賞し愛好し得る興味が、私の心にもあればこそ、この世の生存に堪へられるのである。

十年ほど前に、當時の新進作家菊池寛氏は、「文章世界」に志賀直哉論を寄せてゐたが、そのうちで、「老人」を推賞して、「かういふ題材を自然主義の作家が扱つたなら、皮肉の目で老人を見た

であらう」と、結末のところなどを例として擧げてゐたと、私は今も朧ろげに記憶してゐる。老人が死んで、「かつて老人の坐つた座布團には、公然と子供等の父なる若者（老人の妾の密夫）が坐るやうになつた。その背後の半間の床の間には、羽織袴でキチンと坐つた老人の四つ切りの寫眞が額に入つて立つてゐる。……」といふ結末は、讀者を微笑ませもするし、悠々たる人世の影がそこに映つてゐるやうにも感ぜられる。しかし、この老人の一生をかう見ないで、この作者の閑却した方面から老人の心に喰入つて、結末に於て、人生の破産の影を見せる作風が、菊池氏の思つてゐたらしく、藝術の邪道であるとは思はれない。志賀氏のやうな境地もいゝが、それに安じ過ぎると、世の中があまりお目出た過ぎるやうになるのである。

あの頃は、世間一般に自然主義系統の作品に嫌壓を感じてゐたためか、微溫的な明るみある「白樺」一派の文學が、文壇に地歩を占めた。ことに、志賀氏はあの頃の新進作家の仲間に敬畏されてゐたやうであつた。廣津和郎氏も、會ふたびに、私に向つて、志賀直哉讃美の語を放つてゐた。芥川龍之介氏は、あれほどの才人でありながら、志賀氏の前へ出ると頭があがらなかつたといふことも、この頃聞いた。去年芥川變死の後間もなく、輕井澤に私を訪ねて來た某氏の話によると、志賀氏は、芥川氏の作品をも人となりをも、あまり好まなかつたさうだ。それ故、面と向つて芥川氏から敬意を表せられる時には、返答に困つたさうだ。私はその話を聞いた時、「何だ。芥川は志賀なんかに對して引け目を感じる譯はないぢやあないか」と、口に出かかるのを危く壓えた。龍之介は直哉の藝術のどういふところに畏服したのであるかと、私はあとでいろ〳〵に考へた。それから、自分を輕視してゐる人の前でその人を讃美することの、いかに頓間であるかをも考へた。……一昨年の一月であつたと記憶してゐるが、「新潮」の合評會に私は出席した。その時花袋氏も芥川氏も出席してゐたが、志賀氏の「鵠」といふ小品を、花袋氏は特に推賞した。「いい日本繪である」といふ意味の評語が下されたやうだつた。私が何とか云つて非難すると、芥川氏はその非難を不當とするやうなことを云つた。今度讀んで見ると、この小品は、成程、茶室掛けに相應はしい繪である。龍之介は、かういふ作物に現はれてゐる風韻に傾倒してゐたのであらうか。

かういふ藝術味は、感覺の粗雜になつた今日の文壇では味はれなくなつてゐる。しかし、「白樺」派の盛時に於ても、多くの青年讀者は、志賀氏の持つてゐた風韻や雅致を賞味してゐたのではなくつて、むしろ、彼れの作品の中の一つの特色となつてゐた所謂「人道主義」といつたやうな思想感情に共鳴を覺えてゐたのであらう。「十一月三日午後の事」といふ小品の如きが好個の代表作である。

二

「十一月三日午後の事」が發表された時、その月の雜誌月評を讀賣新聞でやつた和辻哲郎といふ人は、この小品を極度に賞讃して、この寶玉のやうな傑作の前では、他の雜誌小說は瓦礫のやうだとでも思つたらしく、他のすべてを默殺したことがあつた。文學その他の藝術については、異性に對すると同樣に、好きとなると、盲目的に好きになるもので、そこがまた面白いのである。志賀氏のこの小品が、當時迎へられたのは、そこに「人道主義」「非軍國主義」の感情思想が現はれ

てゐるためであつた。田舍道を鴨を買ひに行つた主人公が、途上で兵隊の演習の苦勞を見て心を動して、「自分は一人になると又興奮して來た。それは餘りに明らか過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハツキリしないではゐない事がらだ。何しろ明る過ぎる事だと思つた。すべては全く無知から來てゐるのだと思つた」と、現今の軍事組織を憤慨して、家へ歸つても、折角買つて來た鴨を殺すことは勿論、自分で食ふ氣もしなくつて、他所へ送つてやつたといふのが、この小品の要點である。この小品は、田舍の秋の街道の光景を叙し、演習の片影を叙し、それに觸れそれに離れる主人公の微妙な氣持をまつはれて、味ひの深い純藝術品をつくり上げてゐる。私は、今度も愛讀した。しかし、和辻といふ人などの感服したやうな非軍國主義の現はれに感心したのではない。軍國主義の非難は、談何ぞ容易ならんやと思ふ。小說家が秋のそゞろ歩きに二三の兵士の勞苦を見て感傷的感慨を起したくらゐで、國家の大事が極められるものではない。「すべては全く無知から來てゐる」と云つても、實際について深くしらべたら、どちらが無知か分つたものぢやない。由來詩人藝術家は、あはれみの情に富んでゐるので、他の勞苦を見るに忍びないのだからこの小品には、その詩人らしい美質が現はれていいのであるが、しかし、その思想を實際界に當嵌めて卓見視するのは幼稚である。

當時の青年批評家は「卓見」視した志賀氏の思想は「山形」といふ短篇や「和解」といふ長編や、その他の小品のなかにも、をり〳〵微見えてゐるが、しかし　十年足らずの間に時代の思潮は變つて、今日の青年讀者や青年批評家には、志賀氏の社會觀などは微溫的なものとして冷笑されるやうになつた。もつと荒つぽく根本的でなければならぬと云はれるやうになつた。しかし、それは志賀氏の作品が價値を失つた證據にはならないので、藝術家たる氏の藝術を味はゝないで、附屬の思想を見るから起つたことなのだ。トルストイを廢物視するのも、粗雜な頭腦をもつた一部の現代青年の愚昧な所業であつて、トルストイのえらいところは、原始宗教觀や無抵抗主義の說教にあるのではなくつて、その藝術にあるのだ。今日のプロレタリア文學だつて、一知半解の思想や理窟だけで、藝術としての價値を有つてゐなければ、明日は亡んでしまふのである。

「十一月三日午後の事」にしても「小僧の神樣」にしても、一幅の人生圖として翫味してゐると、今日見ても、昨日見た時に劣らないほどの味ひが味はゝれるので、十年や二十年で廢物になる譯がない。假りに、兵隊の演習が廢止される時代が來ても、それ等の作品の妙味は失はれないのである。文學は日常の實用品とは違ふ。

同じ「白樺」派であつても、有島武郎氏の「生れ出づる惱み」と、志賀氏の「清兵衞と瓢箪」とを比較すると、この二人の作風が如何に異つてゐるかゞ分つて、年少の徒の小說學研究の好資料になるのである。どちらも美に對して敏感な貧家の少年を題材としてゐるのだが、武郎は、力を籠めた筆使ひでゴテ〳〵と書いてゐる。直哉は、いかにもアツサリと書いてゐる。油繪と日本畫の相違がある。武郎の油繪には、今春上野の博物館に陳列された松方所藏の英國の前世紀の繪畫に見られたやうな、鈍重さギコチなさがいくらか見られ、直哉の日本畫には、昨秋芝の美術倶樂部で、山陽遺墨と共に陳列された竹田の畫帖にでも見られさうな含蓄のある筆致が見られる。

私の愛好する志賀氏の作品は、所詮はかういふ短篇や小品の範圍に留まると云つていい。作者は「圓本」の序詞に於て、「作者といふものから完全に遊離した存在となつてゐる」藝術を渴仰し

てゐる。藝術の極致はそこにあるのかも知れない。樂屋落ちの興味によつて辛うじて存在を保つてゐるやうな瑣末な身邊雜記小説の如きは、藝術として、下の下なるものかも知れない。そして　氏の小品のうちには、作者から遊離した藝術の趣きの偲ばれるものがないでもない。「遊離」といふ言葉に、志賀氏はどういふ意味を寓してゐるのか知らないが、私は、この言葉の意味を、自我を無視したものとして受取らない。むしろ自我が完全にその作品に融和し盡くしたものと思つてゐる。

三

ところで、私は、志賀氏の自傳的小説には、あまり興味を有つてゐないのである。ある家庭あるる社會の事相の記述として、多少の興味が寄せられないことはないが、それは敬意を持つた興味ではない。傑れた藝術に對しての興味ではない。

長篇「大津順吉」の甘さ淺さに、同人雜誌小説見たいな未熟を感じるばかりでなく、「ある朝」「鵠沼行」などの短篇にも、ある人の日常雜記以上のものは感じられない。この點では、葛西氏の身邊雜記小説のある者はまだしも讀者を動かす力をもつてゐる。そこには自から生活苦が出てゐるからだ。

私は、最初雜誌に出た時、非凡な小説のやうに云はれて、文壇に珍重された、この作者の製作のうちでは長篇の部に屬する「和解」にも、さほど感心しない。無論よく書かれてゐるのだ。描寫に於て凡庸の作家の及ぶところでない。しかし、父子の爭鬪の根本が、曖昧模糊の感じがする。かういふ生活の餘裕のある家庭では、お互ひの我儘から、こんなことがあるといふ、客觀的態度を、作者があくまで持してゐるのではなく、作者は、こせ〳〵と主人公たる自己をいじり廻してゐるので、作柄が小さくなつてゐる。この主人公は、自分に接觸した人物の瑣末な一言一行一擧一動を、自分勝手に解釋して、「いゝ印象を與へられた」だの、「不快だ」のと云つてゐるのが、私にはせゝこましく思はれることがある。志賀氏は芥川氏のお辭儀の仕樣にまで難癖をつけてゐたと、去年某氏が云つてゐたが、小説家には有勝ちの神經性によるとは云へ、「和解」には、これに類した煩はしさがある。

私は、はじめにこの作者には「溫室育ちのお坊つちやん」風のところがあると云つた。しかし、武者小路氏とは、「お坊ちやん」ぶりが違ふ。武者氏は、正統的お坊ちやんで、お目出たいところがあるとゝもに、天空海濶のところがあり、物に拘はらないのび〳〵したところもあるが、志賀氏は、その作物によつて判斷すると、なか〳〵に神經質で氣六ケしくて細かいところによく氣がつくのである。家庭の事情にもよるのであらうが、生存に對する不滿の影も、彼れの心に差してゐる。これで、生活難があつたら、葛西氏よりもこの方が陰氣な厭世家になつてゐたであらうと想像される。

「和解」は、當時この小説を微細に批評して激賞した小宮豐隆氏を泣かせたものらしい。頑な父子の反目も解けて、父も子も目を濡らし、繼母も泣き叔父も泣き、妻も泣き妹も泣くといふ一篇の結末は、多くの讀者をも泣かせたらしい。ところが、私は、ここの場面は、通俗小説の泣かせ場のやうな感じがした。志賀氏のやうな作家にあるまじきところだと思つた。「老人」を書いたや

うな態度で、なぜここを冷靜に書き得なかつたかと思ふ。作者は、自分の事であるためか、自分に甘へて書いてゐるのである。私は、「和解」を通讀して、根抵の淺い葛藤につゝかれて來た揚句の果てに、涙攻めになるので愛想を盡かした。この場面と「濁つた頭」とは、私の讀んだ範圍に於ては、志賀氏の惡作であると思ふ。私は、小說を書きはじめの頃、藤村花袋の兩先輩が、ある所で執筆難を語合つてゐるのを傍聽したことがあつたが、花袋氏は他人の事を書く困難を云ひ、藤村氏は、自分の事を書く方が一層困難ではないかと云つてゐた。要するに、どちらも、よく書きこなすことは六ケしいのであるが、「龍之介直哉」などの作品では、自己の直接實驗を直寫したものよりも、題材を離れた所から取つたものに於いて一層よく藝術的効果を現はしてゐる。芥川氏は、死の少し前くらゐまでは、自己の露出を嫌つてゐたらしい。志賀氏は「自分の仕事の上で父に私怨を晴すやうなことはしたくないと考へてゐた。それは父にも氣の毒だし、尙それ以上に自分の仕事がそれで穢されるのが恐しかつた」と云つてゐるやうな遠慮をもつてゐた。

しかし「和解」には私の心の押へられたところがあつた。ことに赤兒の病氣と死亡のあたりは眞に迫つてゐて、しかも主人公の心は混亂してゐながら、描寫は客觀性を持して亂れてゐない。私はここを讀んでから間もなく葛西氏の「不良兒」を讀んで、子供のために苦勞する親心を想像した。私には體驗のないことであるが、葛西と志賀のやうな、他の題材は稍々もすると遊び氣分を作中に現はしてゐる人達の藝術にも、子供の生死の危機、運命の岐路に立つと、極度の緊張を示してゐるのに感動した。

四

文壇に割據してゐるいろ〳〵な團體のうちで「白樺」派と云はれてゐる仲間は、私に取つては最も緣の遠いものゝやうにかねて思はれてゐた。志賀直哉氏の如きは顏も見たことがない。葛西善藏氏は早稻田に學んだ緣故で、文壇で「早稻田派」と云はれる系統に屬する作家であつたが、私はこの人とも殆んど面識がなかつた。たゞ一度、德田秋聲氏夫人の葬式の時に、寺院の庭で會つたゞけである。で、私は、個人的に葛西氏をよく知らなかつたのみならず　氏の作品にもあまり親しんでゐなかつた。

「子をつれて」といふ短篇を、「早稻田文學」で讀んだ時、この作者の名をはじめて知つた。そして、貧窮の生活を敍してゐるうちに飄逸なところのあるこの小說を面白いと思つた。それから、「贋物さげて」といふ小說を、やはり「早稻田文學」で讀んで、よくある材料だが、かういふ題材を取つた小說では、近松秋江氏の「伊年の屛風」の方が面白いと思つた。その後、二三葛西氏のものを讀んだ筈だが、私には興味がなかつた。

ある時、文學志望の青年が來訪した時の話に、彼れは葛西氏の作品に最も敬服してゐると云つて、「あの人はどうして自殺しないのでせうか」と云つた。突詰めた生活をしてゐるこの作者に取つては、自殺が當然の運命であると、この青年は思つてゐるらしかつた。またさういふ運命にある人間を、凡人とちがつたえらい人間であるやうに思つてゐるらしかつた。私はかういふ見解には同感しなかつたが、葛西氏に心醉する青年もあるのかと、むしろ不思議に思つてゐた。

今、「葛西善藏全集」を披いて、幾つかの短篇を續けて讀んで、私はウンザリした。「暗鬱、孤獨、貧乏」の生活記錄の繰返しであつて、それが外形的にも思想的にも單調を極めてある。私の一番悲しく思ふことは、貧乏であること、そしてその貧乏に打克つてグン〳〵金持になつて行けるほどの豐富な創作力を惠まれてゐないと云ふことである」と、自分で反省してゐるが、その通りであつて、氏の創作力の貧しさに、私は驚いた。兎に角四十餘歳までの生涯を文學に托して、呻吟苦惱、かういふ作品をこれだけしか書上げられなかつたのは悲慘に感ぜられる。これだけのものも、貧乏の鞭が彼れを追立てたればこそ書けたのである。改造社などの雜誌社が彼れをせき立てゝ書かせたればこそ、幾つかの身邊小說も辛うじて出來たのらしい。世が彼れの天才を虐遇したのではなくつて、貧苦の運命は彼れの身に具はつてゐたのであつた。

しかし、それに關らず、「葛西全集」は、現代の日本の文壇に存在を價ひする資格は有つてゐるのである。才氣に乏しいかはりに彼れは自己の藝術に誠實であつた。當て氣や通俗味は藥にしたくもなかつた。世俗に所謂成功の資格たる「運、鈍、根」のうち、彼れは「鈍」は充分に持つてゐたが、「運」と「根」とがなかつた。しかし、飲んだくれに有勝ちの、瓢逸さ、多少身に帶びてゐた仙骨が、彼れの暗鬱鈍昧な作品に、藝術の光を差させてゐるのである。

「私は、妻子を棄てて、あの鬼のやうな繼母の迫害に堪へかねて、鄕里を飛出して來た。それ以來、私はすべての女性と云ふものに對して脅迫と敵意を感じてゐる。どんな女に對しても、私は私の繼母と云ふものを通さずには、考へることが出來ないのだ。私は自分の妻や娘たちのことすら、信じたく思はない。すべての女性の蔭には、私の繼母の邪鬼のやうな影がひそんでゐる」（暗い部屋にて）と、彼れは云つてゐるが、しかし、その作品には、さういふ態度を持つた觀察に基く女性は、一人も半分も現はれてゐないやうである。「彼等はすべて邪惡で、毒婦で、涙にも媚にも、すべて死の毒を含んでゐるのだ」と、どうしたはずみか、興奮して毒吐いてゐるに關はらず、そんな女性を一度も具體的に書いてゐない。そんな女性もこんな女性も、女といふものを小說のなかに丸で書いてゐないのは珍らしい。主人公の妻とかおせいとか、溫泉場の藝者とかで、作中に出てはゐるのだが、女の名前でそこへ坐つてゐるに留まつて、外形に於て女の容姿を備へてそこに現はれてゐるのでもなければ、一人の女としての心理の動搖がそこに見られるのでもない。「急行券」のなかに、主人公の妻が、ちよつと見つかりにくいところへ、夫の小使錢を入れて夫に渡してゐる女らしい心使ひを、私はこの作者の作中では珍らしいと、思ふくらゐである。あれほど主人公と關係が深く、あちらこちらの作中に現はれてゐるおせいだつて、少しもいき〳〵して描かれてゐない。この女の心理なんかを、作者は歪みなりにも觀察してゐない。「いつも相手を疑はない」薄ぼんやりの女として、作者は見てゐたのかも知れないが、さういふ平凡な女としても明晰に描かれてゐない。

やくざな書畫を賣りて大金をせしめようとした「贋物」と同じ心理を取扱つてゐる「馬糞石」は、葛西氏の傑作で、田舍者の無知な慾心が、無器用なうちにも一種の味ひのある筆でうつされてゐる。村のスケッチである「仲裁人」もいゝ。しかし遺憾にもかういふ田舍の世相を寫した小說も、さう多くはないのだ。人の異性をも描き得なかつた彼れは、自己を離れた世態人情をも、描き得なかつた。彼れは、たゞ狹小な範圍でころがつてゐたのだ。

私は、私の讀んだ彼れの數十篇の短篇のうちで「仲間」といふのが、最も彼れの面目を知るに都合のいゝ代表作であると思つてゐる。これは割合に自由に書けてゐる。世才にも文才にも貧しい、しかも、肉體に病氣をも有つてゐる彼れが、差迫つた金の工面をしに上京して、運のいゝ友人達が面白さうな生活をしてゐるのを見て、心を暗くすること、友人達に揶揄されること、金策は不成功に終つて病氣の惡くなること。……みじめなことの連續なのだが、そこに、獨得の諧謔味がにじみ出てゐるので、自から一つの藝術境をつくつてゐる。

「狸」といふ綽名を仲間からつけられたことを氣にして、「哀しき狸…」と、泣きたいやうな自嘲の氣持で呟き、「若い彼等の眼には、自分のやうな人間は、餘程滑稽に見えるに違ひない。老いぼれの道化者としか彼等には見えないのだらう。ほんとに泣いてる自分の心持は、全盛揃ひの彼等に理解されやう筈がない」と歎じてゐる。

しまひの方で、全盛でない方の友人を訪ねて、自棄（やけ）の戯談をお互ひに取りかはしたりしてゐるあたりからが面白い。細君に逃げられたその友人と、急を要する金の工夫のつかない上に、九度近い熱の出てゐる彼れとは、喰ひ散らした佃煮などを肴に、金持、才能、名譽、美、藝術、健康、女性――さう云つたすべてのものに口から出任せの罵倒を浴びせて痛快を叫んだ。あらゆる者に向つての罵倒のはてが、今度は二人の間の罵倒となるのが面白い。不平不滿、胸のもだえの極は、互ひに他を罵つたゞけでは收まりがつかないで、面と向つた二人が互ひにぶつゝかり合ひでもしなければ、どうにもならなくなるのだ。

「貴樣は臆病者だぞ、卑怯者だぞ、巷に出ろ」と、だしぬけに友人が、主人公たる「彼れ」を叱咤する。

「さう云ふなよ。おれは病氣ぢやないか」

「だから尙出るんだ。貴樣の壽命なんか後幾ら持つものだ。おれについて來い。おれは原稿なぞ書いてやしないさ。糞骨折つて、猶太人見たいな人間共に頭をさげて持廻るなんか眞平御免だよ。……われは民衆に赴かん。……」

昂然と云つて、やがて、

「K來い。角力を取るから來い。」

「駄目だつて云ふに、そんなことしたらおれは死ぬぢやないか」

「死んだつて構はない。生きとつたつて何になるか。さあ來い」

「貴樣は若い細君に遁げられたんで、おれに角力を挑む氣なんだな。……よし、貴樣なんかに敗けてたまるか」

理由のない取組合ひがはじまつた。

「貴樣はおれを殺す氣か。……參つたから放せ」

「放さん。貴樣のやうな病弱者はいつまで經つたつて放さんぞ」

「そんな亂暴なこと云はんで放して呉れよ。苦しい。苦しい。おれはまた血が出るよ。許して呉れ、……君許して呉れよ」

主人公は半ば泣聲になつて、依然友人の咽喉を攻めながら云つた。

虐げられたる人の一生といつた感じが、讀後に油然として起つて來る。「虐げられた」と云つて

も、それは、天才が衆愚に認められないで侮辱されてゐるといふ意味ではなくつて、才能の乏しい人間が藻掻いてゐる苦しさが、傍人に侮蔑の目で見られることを私は意味してゐる。「半ば泣聲になつて依然友人の咽喉を攻めて」ゐるのは、自から葛西善藏の一生を表象した言葉である。力乏しくして書けないのに苦しみながら、なほ相手（藝術）の喉から手を離さないで闘つてゐるのである。

五

「女性はすべて邪惡で、涙にも媚びにも、すべて死の毒を含んでゐる」といふ女性觀を眞に痛感してゐたのなら、自分の鬱憤を晴らすためにも、小說の好材料としても、數十年の作家生活の間に、それをこそ力を入れて書くべき筈なのに、さう云つた女性の片影をさへ書かうとした形跡もないのは、不思議である。作者は果してそんな女性觀を持つてゐたかどうか疑はれるくらゐである。たまに、彼れの筆から出て來る女は、「死の毒を含んでゐる」どころか、凡庸なお人よしである。そして、彼れの周圍の男性にしても、どちらかと云ふと、人がいゝのである。彼れの老父は、わが子と一しよに酒を飲んで、わが子に唄はせたり踊らせたりして悅しがる人間である。たび〳〵作中に出て來る彼れの弟は、貧しいながらも、心力を盡くして、兄の世話をしてゐる。志賀氏の身邊雜記風の小說のなかの人物の親しみが形式的に見えるのと異つてゐる。愚鈍の善良さが彼れの作中の人物にはよく現はれてゐる。比喩が提灯と釣鐘になるが、彼れの文學的面差しはドストエフスキーに少しは似てゐるのであらうか。それが彼の創作上の總財產である

「暗い部屋にて」は、彼れが力をつくしていろ〳〵な人間を書いたものだが、どうも抽象的で客觀性に乏しい。「湖畔手記」は、彼れの晩年の作品であるが、鈍重な筆にも錆を帶びてゐる。心境と筆致とぴつたり合つたい〻作品である。「春」や「雨」や「歲晚」は彼れの詩である。「寺の梅も堅ないがらに最早蕾を揃へ、枯れ朽ちたとしか見えない牡丹の枝にも瑪瑙の牙のやうな芽を見せて、年を送り春を迎へる用意が出來てゐるが、自分自身を顧みて見ると、北嶺に寒い姿ばかりで、南枝に香しい梅の面影と云つたやうなものは、どこにも望まれなかつた」と歎ずるなんか、文學者通有の感傷語で、私などは聞飽きてゐるのであるが、小說に現はれてゐるやうな葛西氏も、獨居靜座の折には、自然と自己を對照して、かういふ月並の感想に耽つたのかと思ふと、新たなる興味が覺えられる。

（志賀氏の「暗夜行路」は、前編だけはかつて通讀して、讀後感を述べたことがあつた）（八月二十五日輕井澤にて）

「坂本龍馬」と新作家としての用意

幕末の世相と人物とは、新講談的通俗小説、あるひは大衆向きの演劇の題材に適應してゐるらしく、いろ〳〵な作家によつて頻繁に取扱はれた。この頃でも、たまに通俗雜誌のところ〴〵を開けて見ると、新選組とか近藤勇とかいふ文字が目につくことがある。幕府の末期ばかりでなく、明治の英雄も評傳や演劇の好題目として流行しだしたやうである。

近い過去の事は人の興味を惹き易い上に、維新前後は、精神的にも外形的にも動搖の激しかつた時代だから、どの方面から見ても面白い觀察が下される譯であるが、多くの講談的小説や、劍劇的脚色の取るに足らないのは云ふまでもなく、周到なる史實の研究から出來上つた傳記にも創作にも、私は、も一皮剝いだ所を見せて貰ひたいやうに思ふことが多い。徳川時代に著はされた徳川時代史は詠史であることを免れない。明治初期を描いても、科學者の態度にて、讓歩なき眞實を究めることは困難なのではあるまいか。六ケしい理論は別としても、維新の功勞者と云はれる薩長土肥をはじめその他の諸藩の英雄にしても、果して今傳へられてゐるやうに先見の明があつたのであらうか。私はつねに疑つてゐる。

私は、今度眞山青果氏の史劇「坂本龍馬」を通讀して、あの人心動搖の時代を追想して興味を覺えた。青果氏はある時代を描かんとする時には、それに關係のあるあらゆる文獻を調査し盡すと云はれてゐるが、この新作に於ても、一語一句にも事實の根據をもつてゐるらしく思はれる。事件と人物とに架空の影はあまり差してゐないやうである。私は、この戯曲を讀んで、まづ活寫されたる幕末史の一片に接した感じがした。新興の意氣を持つた勤王黨の面目をうつして、將來の新日本についていろ〳〵な暗示を試みてゐる。私は、年少の頃、福地櫻痴の「幕府衰亡論」を愛讀したのであつたが、あれには、幕府の衰亡し行く事實が分り易くよく書かれてあつた。櫻痴は成島柳北その他の幕臣のやうに、感傷的でなく、舊時代にも新時代にも適應して世を渡る人であつたが、幕府側に立つて衰亡を説いてゐるところがあつた。櫻痴の舊い著書以外に、幕府側の幕末史も、文運隆盛の今日は、頻繁に出てゐるのであらうが、私はまだ讀んでゐない。近藤勇などを講談的英雄に仕上げて活躍させてゐるのは、幕末を卑俗な色彩で色取るやうなものである。私は眞山氏のやうな眼識のある老練な作家が、衰亡し行く團體の方を題材として、時代と人とを生き〳〵と描いたら面白いだらうと思つてゐる。

「坂本龍馬」は、この頃讀んだ歴史劇のうちでは、最も印象の鮮かなものであつた。この作者のこれまでの戯曲のうちでも、傑れた一つである。澤田一座によつて異常の人氣を得たといふことであるが、これは舞臺で觀るよりも、書齋で讀んで想像した方がいゝやうである。私は讀みながら、東北人たる作者が、西國の人と土地を書いてゐることを感じた。眞實に即した立場から云ふと、西國の地方色や西國人らしい情調に乏しいと云つていゝ。默阿彌の「島千鳥」の松島千太と明石の島藏とには、大まかながらも、東北人と中國人との面目が現はれてゐる。徳富蘆花の「黑潮」に出て來る肥後人や長州人にも、何處となくその出生地の面影が見られる。眞山氏の新作の人物には「土佐つぽ」らしいところや、長州人らしいところが、さう現はれてゐないやうである。言葉に土佐訛や薩長の土語を殆んど用ひなかつたのは、取つて付けたやうに所々に用ひるよりも、却つてサツパリしていゝのであるが、それにしても、臺詞に土の臭ひがない。田舍の青武士が一知半解の理窟を振舞してあばれてゐるにしては、臺詞が調ひ過ぎてゐる。中村吉藏氏の

「井伊大老」などの幕末物の西國武士の無器用な、締りのない臺詞に、どことなくあの頃の若い下級の武士らしい趣きがあつたやうに思ふ。

しかし、現代の寫實劇とは違つて、過去の時代を題材としたものは、周到な客觀性を具へて現はし得られるものではないので「坂本龍馬」くらゐに人と時とを書き現はせたら、史劇として上乘としていゝのである。時代を見る目のある物分りのいゝ才人の苦しみといふやうなものが、全篇を通じて我々の心を惹く

「平將門」「雲右衞門」それから、この「阪本龍馬」について考へながら、私は作者の主觀の動きに心を駛せた。この作者がまだ新進作家と云はれてゐた時分に書いた「第一人者」や「生れざりしならば」をおぼろに記憶から浮べても見た。これ等初期のものは生な理窟を並べたぎごちないものだつたが、その後二十年、近作に於ては作者の精進のあとが目ざましく見えるのである。作劇の實際に多年經驗を重ねてゐるほどあつて、間の拔けたところも誤魔化したところもない。描かんとするところは大抵危なげなく描かれてゐる。「阪本龍馬」のうちで、生氣の乏しいのは「茶屋魚しなの奥座敷」など、京都女の顏を出すところであるが、全體眞山氏にしても中村氏にしても、舞臺に女を出すとまづい。山本有三氏もあまりうまくない。そこへ行くと、谷崎氏のものは、實演には適しないのであらうが、谷崎好みの女性といふ範圍を限られてゐるにしても、女らしい肉體と情趣をもつて、鮮明にそこへ現はれてゐる。岸田國士氏のものには、ある種の女性がよく描かれてゐる。しかし、概して、現代の日本の戯曲の大家は、女性を充分にあつかひこなしてゐないのである。新日本の劇壇にはいつまで經つても、傑れた新しい女優が出て來ないが、傑れた女優をして充分に手腕を發揮さすに足る名脚本はことに乏しいやうである。

それは兎に角、「坂本龍馬」を讀み、その他の青果氏の近作を連想して私の最も強く感じたことは、作者がこれ等の戯曲に於て自己の鬱憤を強烈に洩らしてゐることである。「生れざりせば」にも、やたらに生を咀ふやうな調子があつたやうであつたが、この頃は作劇術の傑れて來たといふことに、ある人間ある時代を具象的に描きながら、自己の鬱憤を洩らしてゐるやうに見える。こんなことは私の新發見でもなく、「眞山君の脚本の人物は、みんな作者自身だ」といふ批評は、屢々私の耳に觸れてゐるのであるが、その作者型の人物と云ふのが、他の作者の作者型とはちがつて、世人に對し、あるひは生存に對して、八つ當りの鬱憤を洩らしてゐるところに特色がある。「君等は雙方ともに、封建制度の幽靈を脊負ふてゐるのだ。……切られてもいゝから云ふが、大名も譽、小さな私情に溺れて、人間全體を忘れてゐるのだ。我藩の面目、彼藩の耻辱、體面、名おれも、同じ土の上の蛆蟲だ。その位牌知行の名譽を守つて、わが主他人の主人、その區別を立てて何になる。……みな封建の舊思想に煩ひされて、自分自身を盲目にしてゐるのだ」と云つたやうな痛快な氣焰を、坂本龍馬は頻繁に吐いてゐるが、西郷大久保木戸の所謂維新の三傑以上に、將來を見透した先見の明のあつた人間のゐたことを、私ははじめて知るとゝもに、作者が坂本龍馬に化して、いゝ氣持で周圍を揶揄し足蹴にしてゐるのを感じた。第二幕の赤間ケ關旅館で、彼れが、何某等の正義派のぼんくらや、桂や中岡を前にして、先見の明を振廻して、彼等を飜弄するところなんかは、舞臺効果も多いだらうが、芝居を二の次にして、戯曲に於ても作者と人生を見ようとしてゐる私は、此處に作者の心の飛躍を見て興味を覺えるのである。新進作家時

代の青果氏が、文壇を睥睨して、周圍の甲乙丙丁を雜輩呼はりしてゐたことを私は思出す。

龍馬は周圍の人々を不明な雜輩視していゝ氣になるばかりでなく、「……おれは同志の者にいつもはぐれて行く。……素質があるのぢやないだらうか（涙の溢るゝ目を親友に向けて）武市、おれはそれを思ふと耐らないほど、心が寂しくなるんだ」と云つたり、「僕あこの頃……牢屋へ入りたいと思つてゐます。誰れか僕の手足を縛りつけて、例へ僕の頭が働いても、僕の身體が動き得ないやうに、……固く嚴重に、僕を縛つて置いてくれないかと……切實にそれを望んでゐます」と云つたりしてゐる。かういふ感慨も史實に根據を持つてゐるのであらうが、私の耳には、龍馬の聲としてよりも、作者の聲として一層つよく聞えるのである。……將門にしても雲右衛門にしても、龍馬にしてもそれ等が過去の彼等であるとともに、現在の作者の分身であることに、私は戯曲的興味を感じるのである。

中村吉藏氏の歴史劇や現代劇にも、作者の史眼のきらめきがあつたり、社會主義的見解が横溢してゐたりする。山本有三氏の戯曲にも人間のある心理が鮮かに取扱はれてゐる。しかし、眞山氏のには、他の作者のよりもつと強く主觀が燃燒してゐる。材料についての客觀的研究も行屆いてゐるのであらうが、さういふ材料のなかへ自己を叩付けてゐる。その意氣は昔、この作家が小說を書いてゐた時分と同樣である。本來戯曲といふものは、純粹に客觀性を具備してゐる文學であるやうに說かれてゐて、シェークスピアが最高のお手本のやうに、私なども思はされてゐたが、しかし、この頃はさうばかりは思はれなくなつた。……眞山氏の如き、昔はその小說に於て、端的に自己の性癖を放散して、讀者をしてをりをりその臭氣に耐えがたく思はせた作家が、戯曲の形を取つて、ことに史上の人物と事件に自己を沒入させたがために、多數の見物が、舞台の作者に魅了されるの觀があるのは面白い。見物は、「維新の豪傑、坂本龍馬はあんな男だつたのか」と感歎するのであらうが、實は作者眞山青果の鬱憤晴らしを當てつけられてゐるのに、それに勘付かないでゐるのだと、私はひそかに面白く思つてゐる。それだからこそ、龍馬も生き〳〵としてゐるのだ。將門も生々してゐたのだ。史上の人物を何十年前何百年前の史上の人物そつくりに描出したつもりでゐる多くの作家は、大抵生命の乏しい形骸を並べてゐるに過ぎないのだ。

坂本龍馬は兎に角眞山式にピン〳〵跳ねてゐるのが、私には面白かつた。

眞山君の新作を味讀した後、私は二十年前を回顧した。私や眞山君が新進作家として持囃された時代を思ひ出すと、私はこの年までよく生きて來たと思ふ。また何かしら次ぎから次ぎへとよく書いて來たと思ふ。あの頃の眞山君は、生活の態度に於ても、創作の態度に於ても、奔放不羈であつたが、私は、小さく自己を守つてコツ〳〵と書くだけであつた。執筆に當つて何の抱負もあつたのではなかつた。たゞ自分の有りつたけの力で、そのをり〳〵の雜誌の依頼に應じて、長短さま〳〵なものを書きつゞけたのに過ぎなかつた。十年も二十年も名聲を保持して、日本文壇の一つの椅子に座を占めてゐられやうとは豫期してゐなかつた。

私は、學窓に於て坪内博士のシェークスピア劇の講義を聽いて、客觀的態度が文學の極致である所以を敎示された時分にも、小杉天外氏が寫實主義を新文學の信條として硯友社風の常套を脫した小說を續けざまに著はすのを見てゐた時分にも、先進者の文學觀として、そのまゝ受入れな

がらも、自分を全然離れんとする態度が何故に傑れてゐるかゞ分らなかつた。たとへそれが傑れてゐるにしても自分の心を鏡にして、森羅萬象を映すだけでは、人間として詰らないではないかと思はれてゐた。あの頃でも、高山樗牛などは、文學の主觀性を高唱して、バイロンなどを讃美してゐた。次いで起つた自然主義文學時代には、「自己を離れる」といふことが、作家としての重要な要素のやうに强調せられて、私の作品でも、をり〳〵自己を離れて世相人事を描いてゐるといふ評語によつて推讃されたことがあつた。

しかし、私自身は自己を脫離して書かうとしたこともなかつたし、書けたものもなかつたと思つてゐる。「自己から遊離した藝術」は、以前から田山花袋氏が唱え、最近志賀直哉氏もその全集の序文に於て、唱え、さういふ藝術が藝術の極致らしく、私にも思はれないこともないが、要するにそれも一つの妄念に過ぎないのではあるまいか。少くも私は、自分の書いたものは、今考へると、自己に執したものばかりであつた。瑣末な行動に於て自己を直寫するしないはどちらでもいいことなので、周圍から材料を取り來つても、あるひは史上の人物を拉し來つても、私としては、そこに自己の影を認め、自己の心臟の皷動を感じてゐるのである。私の作中の人物は、屢々卑小の根性を現はしてゐると評されたが、それなら、私自身がさういふ素質を有つてゐるのである。人間の醜惡を客觀的にうつして、作者は超然としてゐるのではなくつて、そこに描かれてゐるのは、自己自からの影に過ぎないのだ。だから、私は自分の書いたものは、自分と密接な關係を保つてゐるので、空疎なものではないと思つてゐる。

新進作家時代に壓倒的の筆力を有つてゐた眞山君は、文壇の一員としては、運惡く健脚を踏み外して、長い間隱忍の生涯を過してゐたやうであつたが、その間に、自己の天分を廢滅させることはなかつた。むしろ、得意だつた若い時分、すさみかけてゐた技能を、艱苦によつて鍛えたやうなものであつた。復活した眞山君の戲曲家としての面目には、昔とちがつた心魂の冴えを現はしてゐるのである。しかし、今日の眞山君も、昔の彼れの如く、自己を直截に現はすのがその本領であつて、維新の時世と人物を取扱ふのも、今日の文壇と文壇人を取扱ふのと同じやうなものなのだ。私は自分の執筆態度に引比べて考へた。そして、「自己遊離」なんかは、藝術家の夢のやうに思はれた。

新作家としての用意

前途の豫想は、大抵外れ勝ちなものである。日本の文學藝術の將來だつて、どう變化するか、誰れにも明瞭に分る筈がない。よく自分に都合のいゝやうに、先きのことを極めてかゝつて、前祝ひの酒でも飲みたがる者があるが、さうして空想に醉つてゐる間が、人間の極樂なのである。

有產階級に取つては、國家社會の狀態が現在のまゝであるのが望ましく、無產階級に取つては、現狀打破が望ましく、既成作家は世上の思潮好尙の動かざるを欲し、新進作家はそれ等が急速に變化せんことを渴望することは、火を見るよりも明かで、論ずるまでもないのであるが、さういふ自己生存上の必要の心理に基づく者も、率直に表はされないで、いろ〳〵な形を帶びて現はれるのである。各人各樣の鬪爭の樣は、隨所に見聞されるのである。